



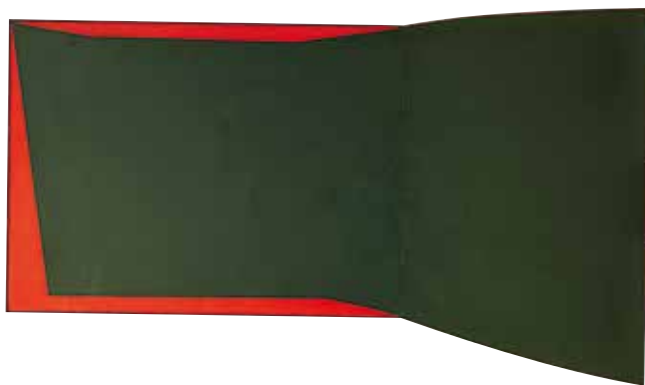
口絵1 《ゴッホになりたい》1949年頃 カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵



口絵2 《作品 52-VII》1952年 カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵



口絵3 《かかし》1958年 カンヴァスに油彩 大阪中之島美術館所蔵（画像は香美市立美術館より提供）



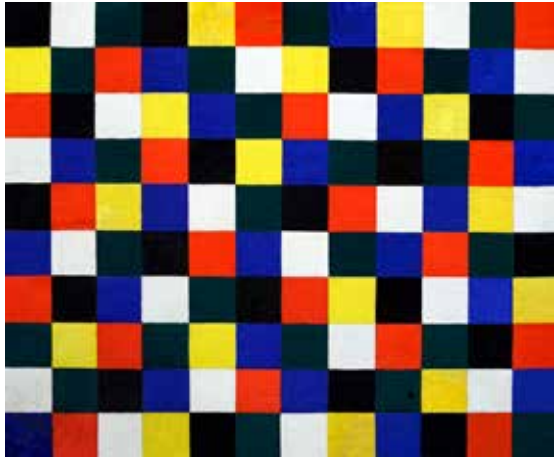
口絵4 《スペース 6023》（初出時の作題。現在は《朱と緑》として収蔵）1960年 カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵



口絵5 《作品》1961年 カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵



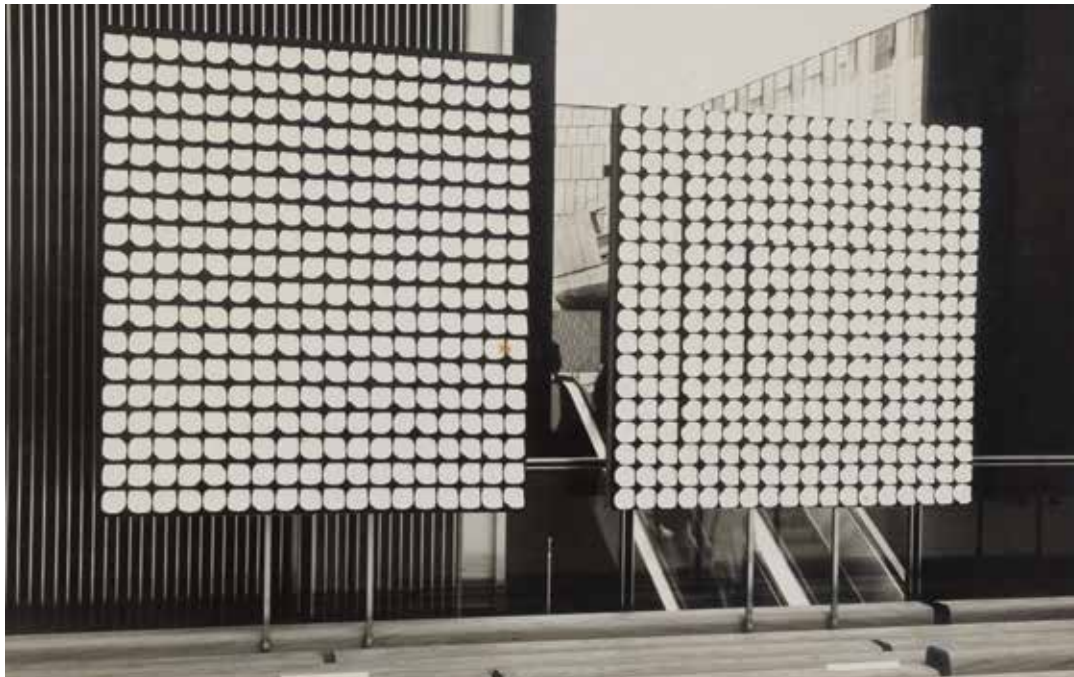
口絵6 《62-A5 大きな世界》（初出時の作題。2014年に作者が《装置》と改題）1962年 カンヴァスに油彩 個人蔵 撮影：三嶋一路
Courtesy of ANOMALY



口絵7 《作品》1962年頃 カンヴァスに油彩 大阪中之島美術館所蔵（画像は香美市立美術館より提供）



口絵8 《作品》1963年頃 個人蔵



口絵9 装置Ⅲ・装置Ⅰ／第1回ジャパン・アート・フェスティバル／ユニオン・カーバイド・ビル／1966年（高崎元尚、作題不詳）ゼラチン・シルバー・プリント 高知県立美術館所蔵



口絵10 1970年代のcockdole店内写真 cockdoleより提供



口絵11 侵食（第25回高知県展、高知県立郷土文化会館前、1971年）1972年の年賀状より転載

規則と偶然の芸術
—前衛美術家・高崎元尚の制作活動—
塚本麻莉（高知県立美術館 学芸員）

The art of rule and coincidence
– avant-garde artist Takasaki Motonao's endeavors

TSUKAMOTO Mari

This essay describes the work of Takasaki Motonao, an avant-garde artist from Kochi, by referring to individual series in chronological order. Assuming that the elements of “rule” and “coincidence” were the underlying qualities that define Takasaki’s artistic practice at large, the author bases her argumentation on her observations of how these elements affected Takasaki’s working methods as well as the resulting concrete shapes. She points out how Takasaki alternately worked in the realms of painting and photography in the 1950s, whereas the accidental forms captured in photographs are reflected in the designs in his paintings. By tracing back the developments seen in the series *Adhesion*, *Destruction* and *Impotence* that followed after *Apparatus* from 1963, the author further illustrates how *Apparatus* was characterized by an “anti-picture” kind of quality; how *Adhesion* marked a conceptual shift from “production” to “action”; and how the very process of the respective object’s transformation through physical destruction was presented as the actual artwork in *Destruction*. The essay indicates how elements of “rule” and “coincidence” generally coexist in Takasaki’s art, the contemporary avant-garde style of which continued to have a stirring effect on existing values.

規則と偶然の芸術

—前衛美術家・高崎元尚の制作活動—

はじめに

高知に住まう人であれば、黒く塗装された板上に白色の方形が整然と並ぶ様子を、一度は見たことがあるのではないだろうか。縁がわずかに反り返る方形が規則的に反復するそれは、白と黒のコントラストも相まって、意識的に鑑賞せずとも、観る者に独特の視覚体験をもたらす。高知出身の前衛美術家・高崎元尚による「装置」は、1963年に発表されてから50年を経た今も古びれることなく、確固たる強度を有している。高知県内に限って言えば、同シリーズの作例はその理知的でややもすると冷たい印象を与える外観とは裏腹に、学校やレストランといった公共のスペースに飾られ、周辺風景と同化していることも多い。そうした気負いない展示の所作は、前衛美術家の自負を持って新たな表現の創出に挑み続けた高崎自身が、破天荒な活動歴とは裏腹に、高知で親しまれ、受け入れられていたことの証左と言えるだろう。

1923年に高知県で生まれた高崎の活動基盤は、あくまで郷土の高知にあった。高崎が生涯を通して情熱を傾けたのが、地元公募展の「高知県美術展覧会（高知県展）」であったこともそのことを裏付けよう。しかし、高崎の活動は、決して高知という一地方都市内のみで完結するものではなかった。高崎の眼差しは県内だけでなく、常に県外—国内の「中央」たる東京や関西の都市、さらには国外にも向けられていた。事実、活動の初期から県外の公募展に出品を重ね、66年の「第1回ジャパン・アート・フェスティバル」ではニューヨークで自作と対面する機会すらあった。同年に関西の「具体美術協会」にも参加し、その解散後も継続的に京都や大阪で個展を開いて自らの存在を内外に示し続けた。最先端のアート・シーンの中心地とはなり得ない「周縁」の高知で制作発表の場を確保して後進を育てつつ、都市部での発表の場も意識的に設けることで、自らの制作サイクルを確立させていた稀有な存在、それが高崎元尚であった。

2016年1月、高知県立美術館は翌17年に予定されていた同館における高崎の個展開催準備のため、生前の高崎本人とその家族から、過去の活動に関する膨大な資料群の提供を受けた。その内訳は、写真プリントやネガ、アルバム、高崎自身がワードプロセッサで打ち出した作品に関する覚書等から構成される一次資料と、当時の新聞記事や展覧会目録、図録といった二次資料であった。これらの資料や高崎家に残された作品の来歴調査を進めるなかで、ようやく高崎の活動の総体が輪郭を伴い始めた。

「装置」の知名度の高さとは裏腹に、高崎の初期から晩期に至るまでの活動についての体系的な研究は未だなされておらず、個々の作品の検証も十分とは言えない。本稿はそうした前提を踏まえ、史料批判に基づき時系列順に高崎の活動を追い、地方に拠点を置いたひとりの前衛美術家が成した仕事の全体像を浮かび上がらせることを目指したものである。

高崎の制作は、「朱と緑」から「アクション」、そして「装置」など、唐突とも思える外観の変貌を繰り返しながら展開する。それは決して理由なき変節ではなく、過去のシリーズ内で試みてきた実験が蓄積され、派生と発展を繰り返した結果にもたらされたものだ。筆者は高崎の60年を超える制作活動を辿るなかで、その芸術に通底する要素が、「規則」と「偶然」ではないかと仮定するに至った。本稿では、各シリーズが生まれた経緯や当時の状況の詳述を中心に、挙げた2つの要素がいかに関々の

具体的表現に響いているかを確認しながら制作の変遷を追う¹。

1. 生い立ちと学生時代

高崎元尚は、1923年に高知県香美郡暁霞村（現在の高知県香美市）に農家の息子として生を受けた²。父の元治は同村の村長を務めたこともあったが、高崎家は基本的には農業などの一次産業で生計を立てていたという。高崎は生まれつき股関節にハンディキャップを抱えており、長時間の歩行が難しいなど、日常生活を送るうえでしばしば不便を感じていた。身体的な悩みを持つがゆえに、高崎は不向きな家業に従事する代わりに進学校の旧制土佐中学校に進学した³。

高崎は後年に自らの中学時代を振り返り、成績は押し並べて悪かったが「特別な努力を要しない幾何だけがまあ普通に出来たので、将来は図形に関する仕事をすればなんとかなるだろう⁴」と考えるようになったと述懐している。中学生の高崎は、自らの得意教科を活かすことができ、かつデスクワークが中心で身体への負荷が少ないのを見越して、早稲田大学建築科への進学を目指した。しかし受験に失敗し、早稲田大学専門部工科建築科に入学することになる。ここで出会ったのが、今井兼次と長野興業という二人の教員である。前者の今井兼次は、早稲田大学の教授を長年務めた建築家で、アントニ・ガウディの日本への紹介者としても知られる。当時は建築計画の授業を受け持ち、「Bauhaus」の文字自体を製図化するといったユニークな課題を与えるなど、生徒たちにバウハウス運動を紹介する役割を果たした。後者の長野興業は、高崎によると二科会彫刻部の会員で、代数の授業中にしばしば脱線し、振動数学による彫刻についての持論を展開したという。高崎にとって彼らとの出会いは、一方が同時代の欧米の芸術運動を知る端緒となり、他方が「数学と美術の融合という未知の分野⁵」に目を開かせるきっかけを与えたといえる。

しかし、高崎の身体的な悩みはここでも仇となった。入学当初の目論見は外れ、長時間立ち続けた製図や現場作業が必要とされる建築科の授業に高崎の身体は付いて行くことができなかった。苦慮の末、「私に一番ふさわしい仕事が、数学的直感に基く純粹抽象造型である⁶」との結論に至った高崎は、1年で早稲田大学専門部を休学して本郷の川端画学校に入学し、石膏デッサンに取り組んで東京美術学校の受験に備えた。42年に同校彫刻科への入学を果たしたが、十全に機能しない足腰は高崎を制作面でも苦しめた。彫刻科で扱う、練るのに体力を要する固い粘土は高崎には向かず、作品制作への没頭を阻害した。高崎は制作に打ち込むかわりに、既に出版禁止になっていた欧米の前衛美術関連の書籍を神田の古本屋で探して読み、新宿の喫茶店でモダンジャズを聴いたという。しかしながら、そうした学生生活すら長くは続かなかった。入学の前年にあたる41年に太平洋戦争が開戦しており、43年には高崎も学徒出陣によって海軍に配属された。45年に日本は終戦を迎え、戦争を生き延びた高崎は復員を果たした。翌年に戦火を免れた美術学校に復学した高崎は、上野の学校敷地内で寝起きして生活し、戦後の混乱期にあつて卒業制作を提出することもなく49年に卒業を迎えた。その後暫くは関東で職を転々としたようだが、52年頃に高知に帰郷した。

戦中戦後の混迷期と重なる高崎の美術学校時代の現存作例は確認できていないが、高崎家には当時の写真が残されている。図1の左側に写った裸体像が、現時点で知り得る美術学校時代の数少ない制作物のひとつであろう。在学中には油彩画の制作も行っていたようだ。同じく学生時代の作例とみられる



図1 学生時代の高崎元尚



図2 学生時代の《自画像》



図3 (口絵1) 《ゴッホになりたい》1949年
頃 カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵

《自画像》(図2、現存せず)や、49年頃に制作されたと考えられる《ゴッホになりたい》⁷⁾(図3)の画面には、当時作家が傾倒していたフィンセント・ファン・ゴッホの絵肌を彷彿とさせる厚塗りの筆致が顕著である。これらの作例は、思い通りに動かない身体を持つが故に挫折感に苛まれることが多かった自らの境遇を、高崎自身が実生活の敗

北者とみなしていたゴッホの姿に重ね合わせ、私淑した形跡と受け取ることができるだろう。

2. 1952-1955年：初期の抽象絵画

帰郷後の高崎は、東京の「モダンアート協会展」への出品をはじめ、自ら有志とともに高知で立ち上げた「高知モダンアート研究会」や高知の前衛美術グループ「前衛土佐派」⁸⁾など、複数の組織に並行して所属しながら制作活動を展開した。また、「高知県美術展覧会(高知県展)」やアンデパンダン形式の「高知市文化祭洋画展(高知市展)」といった地元の公募展にも出品を始めた⁹⁾。特に高知県展には1954年の第8回展から2016年の第70回展まで、実に62年間もの長きにわたって欠かすことなく毎年出品を続けており、事実上高崎の活動の軸となった¹⁰⁾。実生活の面では高知の公立中学校¹¹⁾の教諭職を経て、56年から母校の高等部にあたる土佐高等学校の美術教諭となり、生計の手段を確立している¹²⁾。

高崎はモダンアート協会展に、52年の第2回展から67年の第17回展まで出品した。欧米の前衛的な芸術運動に関心を寄せていたにも関わらず、戦中戦後の混乱に阻まれて進むべき方向を見出せずにいた高崎の目には、同協会が「昭和の軍国主義で壊滅状態になっていた、アブストラクト、ダダ、シュール・レアリズムといった前衛芸術を、戦後デモクラシーの象徴として復権させよう」¹³⁾とするものと映った。高崎は協会展への出品だけでは飽き足らず、55年には高知県展洋画部門の入選作家達に声をかけ、同調者とともに高知モダンアート研究会を組織している。研究会では定期的に勉強会を行い、東京から講師を招いて美術教育の講習会を開くなど、啓蒙的な活動を活発に行なった。また、翌56年から59年にかけてはモダンアート協会本部の協力をも受けて、東京の協会展の主要会員の作品を高知に巡回させる展覧会を企画・開催している¹⁴⁾。協会を

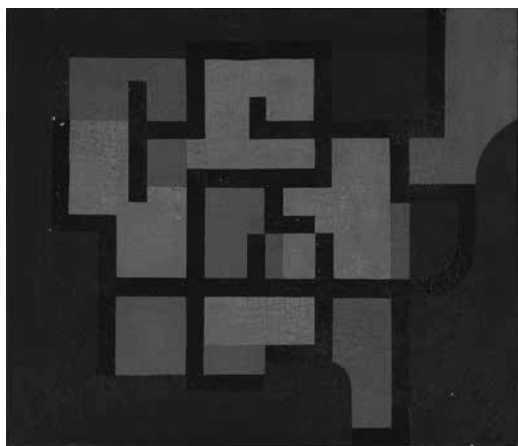


図4 (口絵2) 《作品 52-Ⅶ》1952年 カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵

介して高知県外の作家達との交流が生まれていたことも注目に値する。例えば、嶋本昭三といった具体美術協会の中核をなす作家との面識も、同協会を通じて生まれたとみられる¹⁵⁾。

状況の変化に伴って画風も変化した。モダンアート協会展に出品し始めた50年代初期の作品は、以前のゴッホ風の画面とは打って変わってフラットな、幾何学図形が頻出する抽象画であった(図4)。ピエト・モンドリアンの抽象画を参照したという、黒や黄色、朱色、深緑などの図形や曲線といった変則的なかたちで構成された作例は、52年から55年のモダンアート協会展に連続して出品されている。54年の第4回展において高崎がモダンアート協会

新人賞を受けていることから、同シリーズは東京でも一定の評価を得ていたといえる。

「モンドリアンの真似¹⁶」に端を発する抽象表現の模索の時期を経て、56年頃に高崎が新たに打ち出したのが「朱と緑」のシリーズである。モンドリアン風の作品は3色から4色程度の色面で画面構成がなされていたのに対し、「朱と緑」では使用する色を補色関係の2色に絞り込み、フリーハンドで幾何学的なカタチを描いた。この「朱と緑」を発表して間もなく、その後の高崎の制作に影響を与える出来事が起こる。勤め先の土佐高等学校で写真部の顧問に着任したのである¹⁷。

3. 1956-1962年：絵画と写真の往還

50年代後半の高崎が絵画の制作と並行して写真の分野にも力を入れていたことはあまり知られていない。本稿では写真の開拓が、高崎の絵画造形にも作用していたことを指摘する。高崎の写真による仕事は、高知県展写真部門への出品記録や、当時の『高知新聞』紙上に掲載された画像、岡崎功ら高知の詩人グループが共同編集した詩誌『POP』及びその後継誌『MES』、そして詩人の北園克衛が主宰したグループ「VOU」の同名機関誌に掲載された画像などから知ることができる¹⁸。写真部の顧問となって以降、高崎は教え子たちと並走するように56年の「第10回高知県展」から洋画部門に加えて写真部門にも出品しはじめ、一時は洋画部門よりも写真部門で高い評価を得るほどであった。

この時期の高崎の写真は、50年代の写真界で大きな影響力を持った主観主義写真の系譜に連なるものといえる。現在確認できる高崎の写真の多くは、建築物や風景、襖など、ふと目についた日常の風景を被写体としている。構図は厳格な事前計画に基づくものではなく、スナップ的にシャッターを切り、ブレなどで生じた抽象的なカタチを効果として活かしたものが多い。当時の高崎の撮影姿勢を理解する助けになるのが、60年6月2日付の『高知新聞』記事である¹⁹。高崎は記者からの「作図が変わっているが、絵では表現できないところを写真で表現しているのか」という質問に対し、「絵でやっている新しい形の発見を写真でやっているわけです。人間が意図してつくりあげた形でなく、意味不明の形、とでもいうか。大体、絵を夜書く習慣がついているので、昼間はカメラをぶら下げて歩く。スケッチのかわりともいいましょうか」と答えている。さらに、同記事内では高崎の撮影方法が「歩行中にレフカメラの上からファインダーをのぞいて撮影する」ものであることに触れる。それに対して高崎は「『カエルの目で見ると』ってやつですよ。人間が通常みなれていない角度から見たんです。いわゆる反写真、これまで写真にならないと考えていたもの、これが写真を変えていくのじゃないですか」と返している。一連の回答は、偶然による予期しないカタチをカメラのレンズを通して得ようとする意図が高崎にあったことを浮き彫りにするものだろう。

一方の絵画のシリーズ「朱と緑」で見られる幾何学的なカタチは、当時美術批評家の江川和彦が評したとおり、自然の形体を借りた再現的な造形ではない²⁰。高崎が同シリーズ制作の手がかりとしていたのは、同時期の写真に写り込んだ偶発的なカタチであった可能性が高い。写真を始めてからの高崎の作品を、写真と絵画の両方から見てみよう。例えば57年の写真《假面》(図5)のシルエットに散在する複数の白抜き楕円は、57-58年頃の絵画《作品》(図6)に見られる緑の楕円形



図5 《假面》『POP 2』(POPクラブ、1957年)より転載

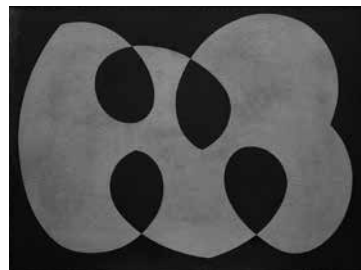


図6 《作品》1957-58年頃 カンヴァスに油彩 大阪中之島美術館所蔵 (画像は香美市立美術館より提供)



図7 《祈る人》『VOU 66』
(VOU クラブ、1959 年)
より転載

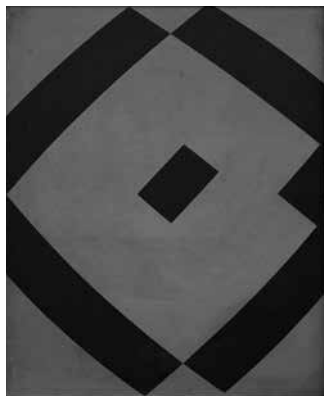


図8 《かかし B》1959 年 カンヴァス
に油彩 大阪中之島美術館所蔵
(画像は香美市立美術館より提供)



図9 《composition a》『VOU
76』(VOU クラブ、1960 年)
より転載



図10 《compositon b》〈原文
ママ〉『VOU 76』(VOU クラブ、
1960 年) より転載



図11 《vacuum space no.1》
『VOU 77』(VOU クラブ、1960
年) より転載



図12 (口絵4) 《スペース6023》
1960 年 カンヴァスに油彩 高
知県立美術館所蔵

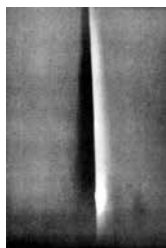


図13 《vacuum space
no.2》『VOU 77』(VOU
クラブ、1960 年)より転載



図14 《op. 6103》『VOU79』(VOU
クラブ、1961 年) より転載

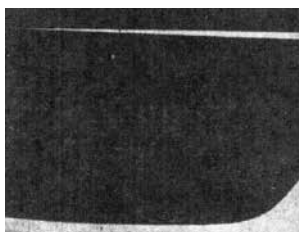


図15 《スペース6022》1960
年12月29日付『高知新聞』
紙面より転載



図16 《ソウルの軌跡》『第11回
モダンアート協会展目録』(モダ
ンアート協会、1961年)より転載

へと反映されてはいないか。59 年の《祈る人》(図 7)の画面からは、8 の字型の影部のかたちが抽出され、同年の《かかし B》(図 8) の緑の長方形を組み合わせた菱形へと転じたようだ。翌 60 年の写真《composition a》(図 9) や《compositon b》(図 10) の画面を横断する、明度の高い空とのコントラストで黒々と浮かぶ直線的な幾何学シルエットや《vacuum space no.1》(図 11) の画面下部における台形のかたちは、絵画作品《スペース 6023》(図 12) にみられる変形カンヴァスの形状を彷彿とさせる。さらに、『VOU 77』の《vacuum space no.2》(図 13)、『VOU 79』の《op. 6103》(図 14) に写る光影が形作る鋭い線形は、60 年の《スペース 6022》(図 15) や 61 年の《ソウルの軌跡》(図 16) といった絵画作品に繰り返し描かれた線形の着想源となっていないだろうか。

以上のことから、高崎は写真に偶然写った予期しないかたちを直接的な引用ではなくとも抽出し、絵画に還元していたと考えられる。高崎が写真を独立した作品として扱っていた以上、絵画と写真を単純な主と従の関係で捉えるべきではない。しかし、高崎が自らの写真を、絵画制作の準備のためのスケッチに類するものと扱っていたことは確かであろう。自らを取り巻く身近な風景をモノクロームで、しかも自らの思いもよらない効果で見直すことを可能とする写真というメディアによって生成されたイメージは、それ自体の表現目的を超えたところで高崎の着想の源になりえたと推察できる。さらに、高崎家には多くの写真やネガが残されていたのに対し、スケッチの類が全くと言っていいほど見当たらないことも、高崎にとって写真がその役割を果たしていたことを裏付けるものだろう²¹。

他方で、56 年頃にはじまる「朱と緑」のシリーズで描かれたかたちの変遷にも着目してみよう。当初は明らかにマンボウのようなシルエットが見て取れる《作品(魚)²²》(図 17) といった作品のように、画面における図と地の関係は明確であった。しかし、58 年の「第 12 回高知県展」において特選を受けた《かかし²³》(図 19) を皮切りに、図と地の関係が判然としない、言い換えると図と地の構造から脱して画面

自体の空間性を配慮したものが現れる。この変節の要因と考えられるのが、《かかし》を出した高知県展の3ヶ月前にあたる、同58年6月に高崎が参加した国立近代美術館（現在の東京国立近代美術館）の「抽象絵画の展開」展である。高崎はこの展覧会に《作品》（図18）を出したが、同じく出品作家であった今井俊満による、爆発的な激しさを持った不定形のアンフォルメル絵画に自作が「負けた」ことを痛感した²⁴。高崎が「朱と緑」に空間性の導入を試みはじめたのは、今井の作品という衝撃的な事件を受けて、カンヴァスというひとつの枠内で収まる自らの作品のおとなしさの打破を試みた結果ではなかっただろうか。高崎は「抽象絵画の展開」展後も暫くは「朱と緑」の制作を続けたが、空間の表現に心を砕いている様子は60年の第10回モダンアート協会展に出品した《拡がる空間》（図20）や、「スペース」という空間を示す語を冠した同60年の「第14回高知県展」及び村松画廊での個展における一連の出品作の作題からも顕著に読み取れる。とりわけ異色であったのが、第14回県展出品作と考えられる《スペース6023²⁵》（図12）である。本作は現在確認できる「朱と緑」のシリーズのうち、矩形から逸脱した変形カンヴァスによる唯一の作例であり、当時の高崎が「絵画そのものを否定するような、つまり真空空間を表現したい²⁶」と言及したように、更にラディカルな態度で空間の描出を追求した結果といえる。

しかしながら、この段階に来て「朱と緑」も行き詰まりを見せたようだ。61年の5月頃には、高崎はそれまでの形を否定し、モノクロームの画面に取り組むようになったという²⁷。同年8月、「柳原睦夫・高崎元尚二人展」において、高崎は「朱と緑」の次なる展開として、ジャズ音楽に着想を得たという「アクション²⁸」の絵画を発表した（図21）。ジャズのリズムに乗って描くという描画スタイルを裏付けるように、同シリーズには絵筆やペインティング・ナイフを握る高崎の規則的な反復の動作が反映され、独特の韻律が感じられる（図22）。このときも写真

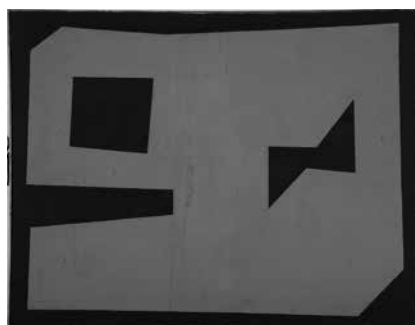


図17 《作品（魚）》1956年 カンヴァスに油彩 香美市立美術館所蔵

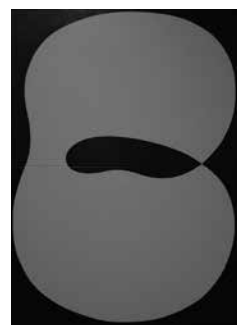


図18 《作品》1958年（2000年代の再制作）カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵



図19（口絵3）《かかし》1958年 カンヴァスに油彩 大阪中之島美術館所蔵（画像は香美市立美術館より提供）



図20 《拡がる空間》『第10回モダンアート協会展目録』（モダンアート協会、1960年）より転載



図21（口絵5）《作品》1961年 カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵



図22 《作品62の1(大きな世界)》（初出時の作題。現在は《モダンジャズ》として収蔵）1962年 カンヴァスに油彩 高知県立美術館所蔵



図 23 《op. 06》『VOU 81』(VOU クラブ、1961 年)より転載



図 24《op. 07》『VOU 81』(VOU クラブ、1961 年)より転載

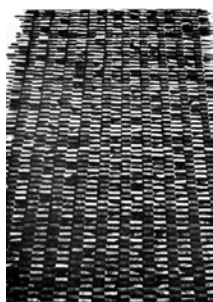


図 25 《op. 02》『VOU 82』(VOU クラブ、1961 年)より転載

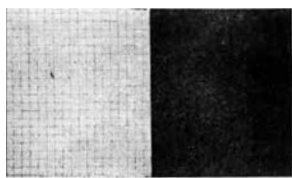


図 26 (口絵 6) 《62-A5 大きな世界》1962 年 6 月 8 日付『高知新聞』紙面より転載



図 27 《作題不詳》『MES 16』(MES クラブ、1962 年)より転載

と絵画の往還による制作が続いており、「アクション」も同時期の写真作品との視覚的な類似を示している。とりわけ 61 年 7 月の『VOU 81』(図 23、24)、9 月の『VOU 82』に掲載された写真(図 25)は、全体に何らかの同型パターンが反復する様を捉えており、同じく画面全体を満たすストロークの反復を基調とする「アクション」のモノクロームの画面との密接な関係を示唆する。

「アクション」期の高崎の制作において新たな方向性を示した作例のひとつに、62 年 6 月の「第 14 回高知市展」に出品された《62-A5 大きな世界》(図 26)が挙げられる。この作品では、グレーの粗い筆致で満たされた右面と、グリッドで区分された白色の方形が連続する左面とが並置された²⁹。次の展開を予感させる左面は、高崎の身振りの直接的な反映ではないとい

う点で、「アクション」の絵画とは一線を画すものといえる。他方で、同時期の高崎の写真には、レンガや障子、タイルといった連続するグリッドを被写体としたものが複数残されており、反復する方形や矩形のパターンに対する高崎自身の関心の程を窺わせる(図 27)。つまるところ、当時の高崎は、写真に写り込んだ偶然によるイメージをあの手この手で規則化させて画面に還元しながら、新たな表現の糸口を探っていたのであろう。

4. 1962-1963 年：「装置」の発明

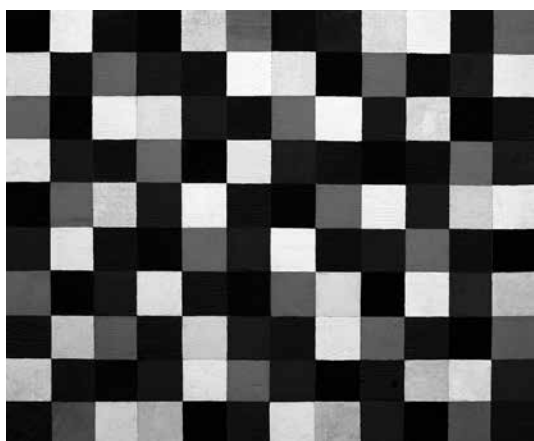


図 28 (口絵 7) 《作品》1962 年頃 カンヴァスに油彩 大阪中之島美術館所蔵 (画像は香美市立美術館より提供)

高崎は 1962 年の秋頃から、赤、黒、青、黄、白といった色彩の方形を碁盤目状に配した画面による連作の制作に着手した(図 28)。同シリーズの作例は同年 11 月の東京、樺画廊での個展でも展示されたが、来場した美術評論家の中原佑介に批判され、早くも手法の再考を余儀なくされる。この時の高崎の作品は、その言によると「六つの純色を絵画のルールを無視して並列し、整然として不確定な虚無の空間を現出しようとした³⁰」ものであった。これはアクション期に出現していたグリッドによる区画分割的な画面構成と、数学的な発想を組み合わせた結果のように見える。しかし、肝心の色彩の配列が高崎自身の主観で選択されたため、否応無く作為的に陥り、画面には描き手の意思が中途半端に反映されるという欠点があった。高崎は中原から、サイコロでランダムに、あるいは鑑賞者に選ばせて色を決定させた方が、均質な画面に繋がると指摘されたという。

悩んだ高崎は、本当にサイコロを振って色の決定を試みたというが、やはり完全に偶然のみに基づいた画面では仕上がりに満足できなかったようだ³¹。試行錯誤を繰り返した作家は、色を塗ったカンヴァス片を予め作っておき、並べ方の予行演習をすることに思い至る。その過程で発見したのが、絵具を塗ったカンヴァス片が、湿度の影響を受けて反り返ることであった。さらに、反りの程度が周辺の湿度に呼応して変化することにも気付く。高崎はこれらの気付きを作品に応用した。すなわち、無数のカンヴァス片を、ある程度まで手で曲げ、反りの具合を調整してから基底に貼付し、あとは自然に任せる—大凡このような経緯で「装置」は「発明」されたとみられる。なお、彩色したカンヴァスを切り取る作業から始まったために、「装置」のプロトタイプの作例には、数種の色を塗布した方形を貼り付けたものも存在する（図29）。しかし、「光の反映—濃淡—が最も微妙に現われるのはの〈原文ママ〉白の曲面上においてであり—その点に焦点を絞れば—色はいらないという結論に達したことでした³²」という後年の覚書の通り、カンヴァスの色彩は早い段階で白色に一本化された。

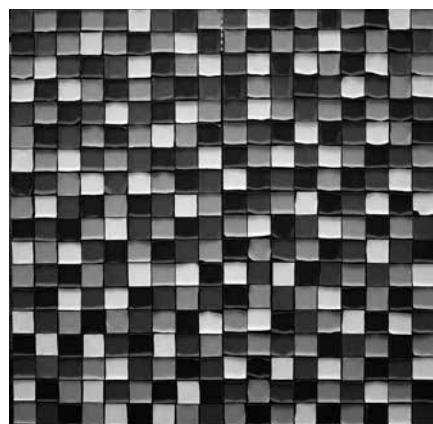


図29（口絵8）《作品》1963年頃 個人蔵

63年5月には、方形に切った白いカンヴァス片を板に貼り付けた《作品3》（図30）が高知でのグループ展で出品された。「装置」という作品名ないしはシリーズ名がいつ頃確立したかは定かではないが、少なくとも同年10月の「第17回高知県展」の目録には、「装置」とい

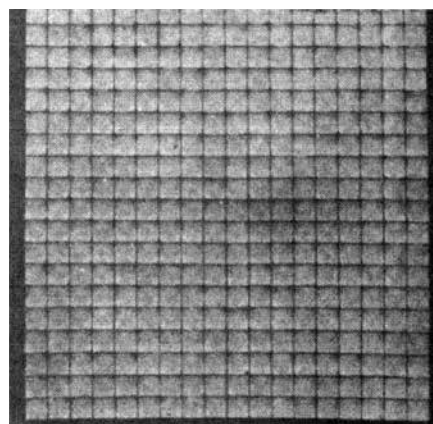


図30 《作品3》1963年5月31日付『高知新聞』紙面より転載

う名称が見られる。東京での「装置」の知名度は、11月の櫛画廊での個展において高まったとみられ、展示風景の様子は64年の『芸術新潮』などの美術誌にも取り上げられた³³。方形群を反復・整列させる「規則」の要素と、カンヴァスの反りという「偶然」の要素とが同居し、白と黒のコントラストに加えて、曲面に落ちる繊細な陰影が織りなす視覚的な美しさをも獲得した「装置」は、高崎の芸術におけるひとつの達成であった。

「装置」の解釈の様相と、高崎自身の言及についても触れておこう。「装置」にいち早く反応した美術批評家として、ヨシダ・ヨシエが挙げられる。ヨシダは1963年11月10日付の『高知新聞』紙上で「不吉な装置 高崎元尚の作品に」と題した批評を寄せ、「ほとんど無表情な正方形のパターンとその反覆のなかで、不吉な電信のようにはかないコミュニケーション（通信）を打ち続けているのかもしれない」と、「装置」をサイバネティックスの概念と絡めて言及した³⁴。さらに、最早「絵」とは言えない「装置」を、「従来のエスティックに対立しようとする、ひとつの機能が仕込まれた面、あるいは立体の装置だというべきだろう」として、「反絵画」という言葉で捉えた。一方、当時の高崎の制作意識を窺わせるもののひとつに、《装置》を出品した65年の「第16回選抜秀作美術展」の目録に寄せられたテキストがある。高崎は制作の動機について、「絵画が、飼育された猛獣としての地位に甘んずることなく、今日の現実に真向から立ち向う存在であるためには、「描く」ことをやめる必要がありました。こうしてキャンバスは、その上に「描かれる」ものとしてではなく、それ自体に内在する、未知の力を引き出される対象となりました」と語る³⁵。この言からは、高崎が極めて自覚的に既存の絵画に挑もうとしていた様子が読み取れる。カンヴァスという絵画の伝統に連なる素材を使用しているにも関わらず、色彩やマティエール、何より「描くこと」自体を放擲した「装置」は、50年代のアンフォ

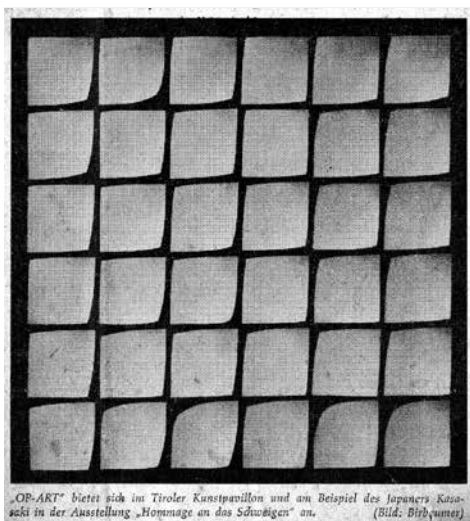


図31 詳細不明の新聞紙面より転載（独語訳は以下の通り。チロルクンスト・パビリオンでのオブ・アートの展覧会「沈黙に捧げる」における日本のカササキ（註：高崎のこと）の作例）

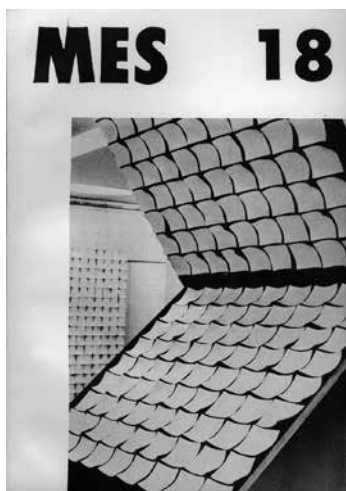


図32 『MES 18』（MESクラブ、1964年）表紙

ルメル絵画に対する高崎なりの反動的な応答であり、60年代の動向に即していうところの「反芸術」ないしは「反絵画」の一形態であった。

また、「装置」の誕生に際して高崎が頻用する「発明」という言葉にも注意を払う必要があるだろう。美的な意味合いを喚起させない「装置」というメカニカルな呼称とシステムティックな外見には、当時は未だ巨大な機械であったコンピューターのイメージも投影されている。後年の高崎は「（装置）は 私の作品の前に立った鑑賞者が 自身の持つデータをインプットして 演算増幅された己自身に対面することを可能にする機械という意味」とも言及している³⁶。他方で、高崎自身どこまで自覚的であったかは定かではないが、「装置」はその錯視的とも取れる外観から、65年から日本でも注目される「オブ・アート」の作例とみなされるケースもある。69年の具体会員の作品が出品されたオーストリアでの展覧

会³⁷に際しては、極東の作家について知りようがない現地新聞に「装置」の画像が掲載され、オブ・アートの作例として簡潔に紹介された（図31）。作者の手を完全に離れたところでの第三者による解釈は、受容の一端を知るうえで重要であろう。

なお、手元の資料で確認する限りは、64年8月の『VOU 95』の掲載を最後に、高崎の主観主義的傾向を帯びた写真の新作発表は確認できなくなる。高崎が写真による偶発的イメージを絵画制作の着想源としていた可能性が高いことは指摘した通りだが、方形の具体的な枚数やサイズ、そして反りの調整や糊付けの工夫が重要視される「装置」の制作において、それが不要なのは明らかだ。ただし、例えば『VOU 95』に先立つ同年4月発行の『MES 18』の表紙（図32）には、63年に櫟画廊で展示した「装置」を写した写真が採用されており、以降の『MES』の表紙にも「装置」や後述

する「密着」の展示風景の写真が用いられるようになる。同一のネガやコンタクトプリントの一部が高崎のアルバムから見つかっていることから、これらの写真の撮影者は高崎本人とみてまず間違いないだろう。つまり、高崎は64年以降もカメラを手放さなかったが、以前とは異なり自作を撮影する方向にシフトした。60年代後半以降の発表作はインスタレーション的傾向を強め、多くの場合会期終了後には破棄されたから、撮影には記録的な意味もあったことだろう。一方で、70年代以降の高崎は、そうした自作の展示風景を写した写真を単独の作品とみなし、展覧会に出品することもあった。かつての主観主義写真とは傾向を異にする、メタ的な視点から自作を捉えた写真は、自身の制作を客観視するための記録というだけでなく、作品としての妙味を備えたものも多い³⁸。

5. 1963-1971年：「装置」の展開と派生

63年から69年頃までは、高崎にとってまさに「装置の時代」であった。先述した通り、63年5月の時点で、基底全面に白色のキャンバス片を配した最もスタンダードなタイプが確認できる。同年8

月の高知での「第2回前衛土佐派展」では、直立する立方体の各面に、無数のカンヴァス片の集合体によるマクロ的視点での矩形を配し、その周縁部に水平・垂直をライン状に残した作例が登場している（図33）。立体化への志向は、ごく早い時期から現れていた。11月に横浜市民ギャラリーで開催された「今日の作家'65年展」の展示風景写真には、方形の縦列を横に等間隔で並べたものや、方形を配した面を二段にしたものなど、様々なパターンの「装置」が写さ

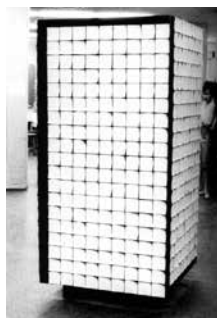


図33 《装置》『こんなアヴァンギャルド芸術があった！－高知の1960年代－』（高知新聞社、1997年）より転載

れている（図34）。翌66年には、基底の黒地を十字状に残して上下左右に無数の方形を貼り付けた作例も発表された（図35）。

66年にニューヨークで封切られた「第1回ジャパン・アート・フェスティバル」への出品が、高崎が「装置」の素材を再考する契機となった（図36）。用意していた出品用の「装置」3点のうち、1点がカンヴァス片の「曲がりぐあいがきつかった」ため、陳列を取りやめることになったのである³⁹。輸送時に変動する温湿度の影響を受けたことが過度な反りの原因と考えられるが、この時に高崎は、カンヴァスを手で折り曲げ、その後の反応を自然環境に任せているだけでは、反りの最終的な程度が想定範囲を逸脱する場合があることに気付く。カンヴァスの曲面が生み出す微細な陰影のニュアンスは、偶然の要素が勝ちすぎると失われ、褐色の裏面を不本意に晒すことに繋がるのであった。

耐久性を希求した結果に選択されたのが、塩化ビニールである。この素材は、熱すると湾曲し、再び熱を加えない限りその形状が保持される。一方でカンヴァスにはない艶やかな光沢を出すこともできる。従来工業分野で用いられる塩化ビニールの採用には、高崎の具体美術協会への加入が遠因となっている可能性もある⁴⁰。66年に具体に加入した高崎は、所謂「後期具体」の一員に数えられる。後期具体の特徴には、プラスチックといった工業用の新素材の使用、キネティック・アートやライト・アートといった当時のテクノロジーを活用した作品が目立つ点が挙げられる⁴¹。多様な素材を駆使する具体会員たちの作品を目の当たりにしたことが、高崎の素材選択に影響を及ぼしたとは十分に考えられよう。

実際に塩化ビニールが用いられた「装置」が登場するのは、67年以降とみられる。その最初期の作例のひとつに、同年3月に高知県銀行協会ビルの玄関に設置され、今尚現存する《装置》がある（図37）。逆三角形の形状で、基底が左から右へと厚



図34 「今日の作家'65年展」（横浜市民ギャラリー）での展示風景

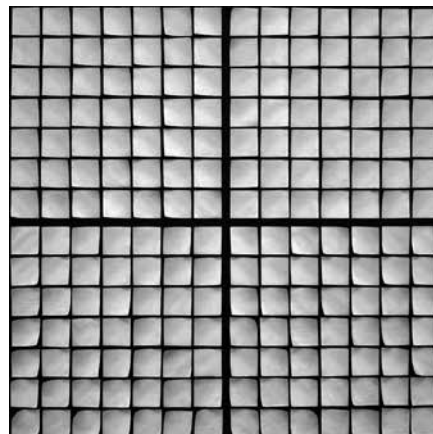


図35 《装置 66-6》1966年 板・カンヴァス片・塗料 高知県立美術館所蔵

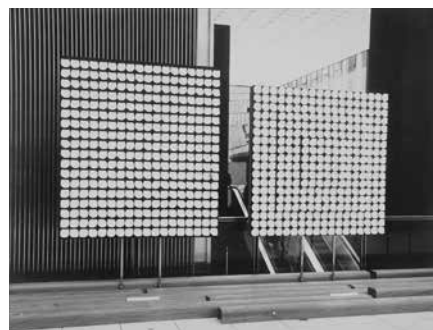


図36（口絵9） 装置Ⅲ・装置Ⅰ／第1回ジャパン・アート・フェスティバル／ユニオン・カーバイド・ビル／1966年（高崎元尚、作題不詳）ゼラチン・シルバー・プリント 高知県立美術館所蔵

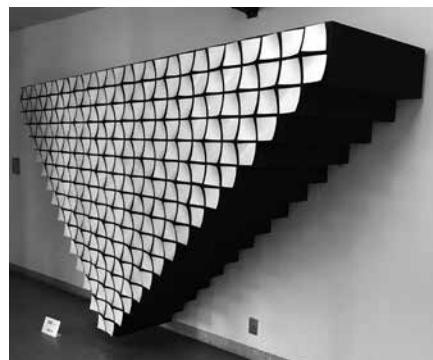


図37 《装置》1967年 板・塩化ビニール 一般社団法人高知県銀行協会所蔵

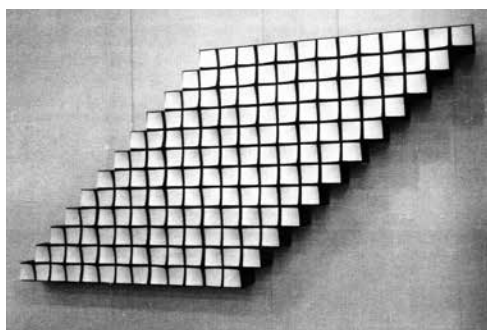


図 38 《装置》1967 年 板・塩化ビニール（2003 年の再制作作品を兵庫県立美術館が所蔵）

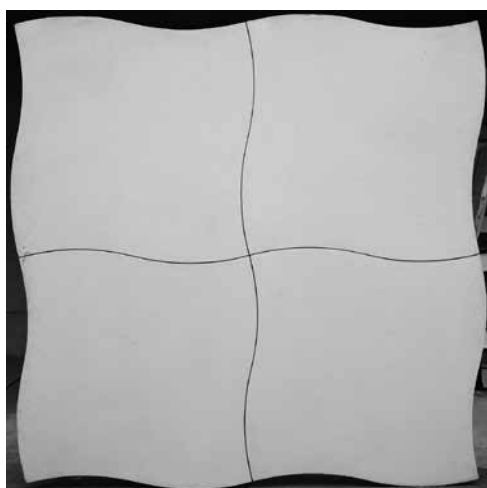


図 39 《CURVED SQUARE》1968 年頃 板・塗料



図 40（口絵 10） 1970 年代のcock doll店内写真 cock dollより提供



図 41 密着（第 21 回具体美術展、グタイピナコテカ、1968 年）

みを増し、アシンメトリーが意図的に演出された本作は、屋内に恒久設置するという前提の元、立体作品を企図して制作された記念碑的の作例であった。その後も同素材の「装置」は、同年 10 月の「第 19 回具体美術展」（図 38）や「第 21 回高知県展」などで出品されたとみられる。それまでにない耐久性と、光沢がもたらす明晰な美しさを併せ持つ塩化ビニールを用い、カンヴァスという伝統的な絵画材料からの決別を果たした「装置」は、自律した作品として、ひとつの到達点を示したといえる。しかし、「型」を用いての制作方法にも裏付けられる、同規格の一律化した視覚効果を実現する塩化ビニールの採用は、カンヴァスの「装置」に見られた方形曲面の繊細な陰影を奪い、環境に作品を委ねること生まれる偶然の要素を失わせた⁴²。同時に、絵画という既存のジャンルからの事実上の独立は、「反絵画」の表象でもあった「装置」が、反する地盤を失うことをも意味した。二重の喪失を経験した「装置」は、本質の部分で変質をきたしたと言える。

高崎は後年、塩化ビニール製の「装置」は、耐久性はあるが微妙な面白さがなくなったと述懐している⁴³。実際に 68 年以降の展覧会では、「装置」の新作品は途絶えている。個の作品として完成した「装置」は、皮肉なことにそれ以上の展開を望めなかったのだろう。結局、高崎は「装置」を放擲して、次なる展開—「CURVED SQUARE」と「密着」へと進んでいく。

68 年 10 月の「第 22 回高知県展」で発表された《68-1⁴⁴》が、「CURVED SQUARE⁴⁵」の最初期の作例と考えられる。化粧板のデコラを素材に用いた同シリーズの作例（図 39）はいずれも薄手で、中央を十字で区切った湾曲した方形という外観に特徴があったが、69 年頃には早くも制作が打ち切られたようだ⁴⁶。ただし、このシリーズには興味深い応用例がある。1970 年代頃の高知市のレストラン「cock doll」では、高崎と当時の店主の協力のもと、ピースを連結した「CURVED SQUARE」が内装に取り入れられ、店内空間をモダンに彩っていた。意匠としての面白さが空間と調和した一例であろう（図 40）。

他方、68 年 11 月に「第 21 回具体美術展」会場のグタイピナコテカ壁面と柱で試行されたのが《密着》（図 41）であった。これは、方形の薄い鉛板を袋に入れた油土で叩きつけ、壁面に文字通り密着させたものだ。ピナコテカでの《密着》は、中央に十字のかたちを出すために、その部分の壁面だけを残すようにして四方に方形の鉛板が貼り付けられた。この

形状は、66年に発表した一連の「装置」(図35)の外観を想起させるものであり、「密着」が「装置」から派生的に生まれたことを示唆する。なお、鉛板を何らかの物体に貼り付けるというアイデア自体は、高崎自身が戦時に目の当たりにした、バズーカ砲から発射される鉛玉が対象に「へばりつく」ことに想を受けているという⁴⁷。

「密着」の展開を考える上での手がかりとなるのが、「装置」を彷彿させる外観の《CURVED SQUARE 2》(図42)ではないだろうか。69年7月の「第1回ヒロシマ・ルネッサンス美術展」に出品された本作は、画像で確認する限り、塩化ビニール製の「装置」のように見える。しかし「装置」とは異なり基底材がなく、床に直接置いて展示された。この展覧会から3ヶ月後、同年10月の「第23回高知県展」で出品された《密着》(図43)は、壁ではなく床に鉛を打ち付けた作品であった。「密着」の制作には、叩くという肉体的な労力と、薄い鉛板が叩いた衝撃で破れないようにする繊細な配慮が必要であったというから、壁よりも床の方が作業しやすいという即物的な事情が考慮された可能性もある。《CURVED SQUARE 2》と地面での「密着」の実践に直接的な因果関係を求めるのは早計に過ぎるかもしれないが、少なくとも、こうした一連の仕事を通して高崎の展示範囲は壁から床へと拡大していった。一方で、「密着」が床設置へと誘われる要因のひとつに、高崎自身のユーモアの精神があったことも忘れてはならない。2017年に筆者が高崎から直接「密着」について話を聞いた際、高崎は「作品(密着)があることを気付かない鑑賞者が、その上を歩くのを見るのが愉快でたまらなかった」と語っていた。壁面に掛けられることが前提の絵画を描く画家から出発した高崎の目には、作品が作品然として並ぶことをやめて環境と一体化し、あまつさえ踏まれる姿は、痛快と映ったのだろう。

「密着」の制作にあたり、壁から床という展示場所だけでなく、高崎の制作意識にも変化がみられることも重要である。当時の高崎の「密着」に対する言及には、「要するにそれは鉛である。問題は如何に作るかではなくて何時どこで決行するか、しないか⁴⁸」という象徴的な一節がある。何かに手を加えて「作る」のではなく、どのように「行為する」かに主眼を置いている点に、「装置」を「作って」いた時からの決定的な発想の飛躍、すなわち「制作」から「行為」への転回を看取できる。また、なまの物質そのものに着目する姿勢には、同時代に台頭する「もの派」の作家たちとも共通する感覚が働いていると読むこともできよう。

「密着」はその後、鉛よりも柔らかく軽やかな布を用いたタイプや(図44)、ボンドに浸した白布で対象を包み込んだタイプ(図45)など、



図42 CURVED SQUARE 2／第1回ヒロシマ・ルネッサンス美術展／広島県立美術館／1969年(高崎元尚、作題不詳)ゼラチン・シルバー・プリント 高知県立美術館所蔵



図43 密着(第23回高知県展、高知県民ホール、1969年)



図44 April展／笛画廊／1971年(高崎元尚、作題不詳)ゼラチン・シルバー・プリント 高知県立美術館所蔵

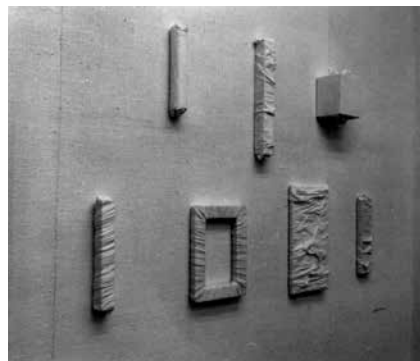


図45 作題不詳(グタイミニピナコテカ開設記念展、グタイミニピナコテカ、1971年)



図46 (口絵11) 侵食 (第25回高知県展、高知県立郷土文化会館前、1971年) 1972年の年賀状より転載

素材を変えて展開されていった。そして、71年10月の「第25回高知県展」で出品された《侵食》(図46)によって、シリーズは新局面を迎える。屋外のアスファルト上にロール状の鉄板を置いた《侵食》は、高崎によると「鉄板をさびさせる作品」であった。高崎の「さびの表情をもっと恐ろしい形相にする必要があり、毎日ケミカルをぶっかけました⁴⁹」の言からは、作家が会期中も継続して手を加え、恣意的に作品の表情を変化させ続けた様子が窺える。「密着」の「貼り付ける」という一回性の行為から一歩踏み込み、事物を物理・化学の両面から「侵す」という継続的な現象に発展させた本作は、その後の「破壊」で顕現する「行為や過程自体の作品化」の要素が潜む先駆例と位置付けることができる。

6. 行為への転換、「破壊」の動機

置かれる環境の温湿度によって反りの程度が変化するカンヴァス製の「装置」の時点から、高崎の制作には「行為や過程自体の作品化」、すなわちプロセス・アートの要素が含まれていた。ただし、そのこと自体が前景化するのには、72年に始まる一連の「破壊」からである。すでに60年代後半から野村仁や成田克彦といった後にも派と目される若手作家たちが、物質の変容や消失の過程を提示する作品を提出していたが、高崎の「破壊」も、対象物の変容過程を段階的に示したという点では、共通性を認めることができる。ただし「破壊」は、目的となる対象を「打ち壊す」という主体的な行為の因果関係によっており、そこに両者間の決定的な相違がある。

では、なぜ高崎は「破壊」せねばならなかったのだろうか。高崎が「破壊」に至った直接的な原因のひとつは、69年に高知県展の洋画部門から立体部門が分離独立したことであった。60年代の洋画部門では、前衛色の強い半立体ないしは立体作品の出品が相次ぎ、従来の洋画出品者の不満が蓄積した。結果的に69年に前衛的な作品の受け皿として立体部門が独立し、高崎は新たな部門の審査員を任された。しかし、「より自由な発展の為にというのは建前で、本音は前衛の排除であることは明らかである⁵⁰」と後年の覚書にある通り、高崎にとってこの分離独立は全面的に首肯できる事態ではなかった。加えて、70年から立体部門の展示場所はそれまでの屋内から屋外へと移された。作品が風雨に晒されて傷むことを嫌って多くの作家は元の洋画部門に戻ってしまい、立体部門の出品者数は激減し、独立早々に存続の危機に立たされることになる。このような経緯により、高崎は「一か八か、生き延びる道はこれしかない」と観念して、ハンマーを振るって、目的のない土木作業を始めていた⁵¹という。

高知県展というローカルな公募展においてみられた、前衛美術を排除とまではいかなくとも差別化しようという動きは、この時期に日本の「前衛」がアクチュアリティを失ったことと無関係ではないだろう。72年9月の『高知新聞』記事において、高崎は以下のように吐露している。「1970年は日本の現代美術がダメになる年であった。あるいはもともとダメな日本の現代美術が、華々しくそのダメさを暴露した年であった。〔中略〕日本の現代美術は何者でもなかった。何かがあると信じていた所に、何もないことがわかった時、日本の現代美術の果てしない落下が始まった。⁵²」

高崎が強調する70年の前後、殊に68年から72年は文化史や社会史上でも日本社会の転換期として

扱われる⁵³。この時期は全共闘運動やベトナム反戦運動の激化に加え、70 年安保といった政治問題も浮上し、社会は騒然とした雰囲気包まれた。高崎が60年代の体现者と目していた小説家、三島由紀夫の自決も70年に起こっている。芸術分野においても、60年代から続いた前衛美術の終焉を象徴する二つの出来事、すなわち過激な前衛表現が有罪とされた千円札裁判と「日本万国博覧会（大阪万博）」の開催があった⁵⁴。後者の万博には高崎も具体の一員として参加したが、そもそも「国策」たる万博への前衛美術家たちの積極的な協力は、本来は体制側と距離を取るべき前衛の立ち位置を転倒させてしまう。高崎自身「壮大ではあるが楽天的な造形でしかあり得ない⁵⁵」と言及する万博芸術は、前衛を標榜した活動を行ってきた当事者に内省を促す契機ともなった。例えば、かつて高崎とともに前衛土佐派を結成し、60年代の高知の前衛を共に率いる立場にあった濱口富治は、実際に見た「何億の金を賭けて造った万博の造形物⁵⁶」への失望を機に、それまでの立体的な造形に限界を感じて絵画制作へと回帰する。よりローカルな事情に即して言うと、濱口は高崎とは異なり、県展の洋画部門に残留したのであった。

オーソドックスに言っても、70年代はそれまでの前衛に代わってものの派が台頭した時代とされる。高崎にそのことを体感させたのは、やはり70年に開催された「第10回日本国際美術展 人間と物質」であろう。この展覧会で存在感を示したものの派をはじめとするコンセプチュアル・アートの数々は、万博芸術とは対照的な新たな表現の出現として、高崎に良くも悪くも衝撃を与えたという⁵⁷。さらに72年には吉原治良の逝去によって具体美術協会も解散し、高崎が属した前衛の組織的な活動は事実上終わりを迎えた。

当時の作家を取り巻く背景事情を総合的に鑑みると、自身にとって切実な県展問題を筆頭に、その背後に連なる様々な時代の変化を象徴する出来事が積み重なったことが、高崎をして「自分を壊すかわりに物を壊し、これを作品と称する心境に立ち至⁵⁸」らせた、と考えるのが妥当ではないだろうか。つまり、高崎の破壊衝動の先には、前衛が失効した日本の美術状況があった。

7. 1972-1983 年：「破壊」

万博を経た高崎は、70年9月から高知の若手作家たちと共に「現代美術の実験」という展覧会の企画を立ち上げ、1日から1週間程度の個展やグループ展を連続して行うことを始めた⁵⁹。「現代美術の実験」展を自身のアイデアを具体化させるための実験の場と位置付けていた高崎は、展覧会印刷物（図47）に見られる通り、来る者を拒まない構えで県内の若手作家をゆるやかに巻き込みながら試行的制作を繰り広げた。なお、71年から72年頃に撮影された高崎の「現代美術の実験」展の写真には、布を用いた「密着」のバリエーション作例などに加えて、後の「破壊」でも頻用される段ボールやレンガで構成された作品の姿が確認できる。今までに使用したことがない素材の感触や性質をひとつひとつ確かめるように、作家は現代の変化に呼応する手法や表現を模索していたのだろう。

制作上の転機となったのは、72年10月の「第26回高知県展」であったとみられる。この時の高崎は《プレゼント》と題した、

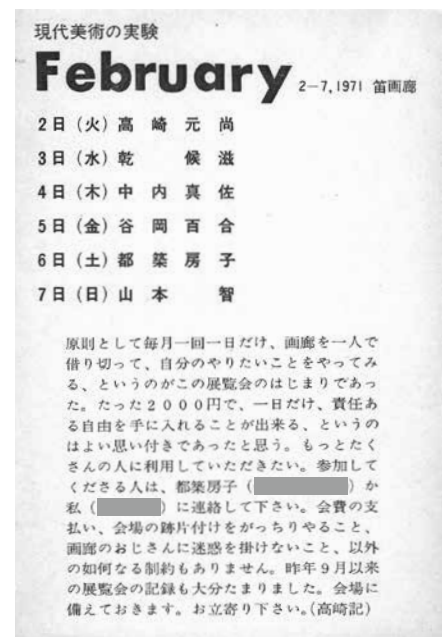


図47 「現代美術の実験 February 2-7, 1971 笛画廊」DM ハガキ

黒塗りのダンボール箱を積み重ねた作品を発表した。可愛らしい作題とは裏腹に、3メートルを超える高さで存在感を放つ箱の壁は、会期終了後に予め高崎から指示を受けていた土佐中学・高等学校の教え子達の手で破壊された。バッドで粉碎され、手で執拗に破られ、段ボール箱はみるみるうちに原型を失って破片と化す（図48）。その後、11月の「現代美術の実験」展では引き裂いた段ボール片で会場床を埋めるなど、同種の作品の試行は続いた。

同年12月、京都のギャラリー16で行った個展「LANDSCAPE」は、個展自体が高崎にとって最初の「破壊」作品と位置づけられた。この個展は、「高知市のアトリエからボール箱用のダンボール90枚を画廊へ輸送し、会期中一つ一つ組み立てて黒塗料を塗っていく行為。最終日に観客と一緒にたたくきこわす⁶⁰」という内容であった（図49）。会期中は作品然とした黒いダンボールを展示していた県展の時よりも意識的に、「段ボールを組み立てる」、「黒く塗る」、「破壊する」といった行為自体を見せようとする意思が働いているのは明らかであろう。

以降の「破壊」における個別の事例を見ていこう。74年、京都市美術館の「今日の方法'74」展における《ゴルフボールの使い方》では、事前に本物のゴルフボールとそれを象った石膏製のボールとを大量に用意して会場床にばら撒き、1週間の会期中、毎日ハンマーで甲高い音を響かせながら砕き続けた（図50）。この時の破壊の対象は、一撃で砕け、瞬時に粉々の白い破片と化す石膏製ボールである。翌75年、直裁的に「現代美術の崩壊」と題したギャラリー16における個展では、建材の波型スレートの破壊過程を提示した（図51）。この個展では初日にスレートを壁面に立てかけ、6日間の会期中に順に倒し、倒したものからハンマー



図48 プレゼント（第26回高知県展、高知県立郷土文化会館前、1972年10月21日-11月5日）1. 会期中 2-4. 会期終了後

図49 LANDSCAPE（個展 LANDSCAPE、ギャラリー16、1972年12月12-17日）



図50 ゴルフボールの使い方（今日の方法'74展、京都市美術館、1974年9月7-13日）

で破碎した。結果として、最終日には当初の長方形の波型スレートは跡形もなくなり、床一面に破片が積み重なった。1日に砕くスレートの枚数や倒す順番が、予めの計画に基づいているのは容易に推察できる。素材に波型スレートが選ばれた理由も、高価すぎず、ハンマーで比較的容易に打ち砕くことができるからだろう。段階的に碎かれるスレートないしは最終的に現出する廃墟のような光景に、当時の現代美術の状況を重ねていることは、個展名でも示されている。しかし、この段階に至ると、最早それは建前に後退している感が強い。当初の現代美術の状況に対する憤懣は、周到な用意と計算のもとで段階的に変容するスレートと空間、すなわち「破壊」という逆説的な建設行為の提示へとすり替わっている。

なお、「破壊」の対象素材は無機物だけではなく、木という有機物を用いた作品も試行されている。木による作例の多くは輪切りで元の形状を再現するように床に横たえて展示され（図 52）、行為の過程よりも、切断という破壊行為によって自然の造形美を倒錯的に見せることに力点が置かれている。

78 年 2 月、高崎は兵庫県立近代美術館の「アート・ナウ '78」において、700 個以上のコンクリートブロックを用いた《Collapse》を発表した（図 53）。会期前の会場に運び込まれたブロックは僅かに間隔を空けて床に敷き詰められ、2 名の学生ボランティアと夫人とともに、3 日かかりで割られた。ブロックを割る際には、ハンマーを左上と右下を狙うようにして振り下ろすという暗黙のルールがあった。ルールを課しても割れ方は微妙な力の入り具合に左右されるため、割れたブロックの表情が一律となることはないが、全くの無秩序にもならない。ブロックを割り終えた後は、「上を歩いて下さい」というキャプションが掲示された。鑑賞者の靴裏で踏まれることで、ブロックは刻々と変化し、当初の規則的な表情は崩れ、偶然の要素が勝ち始める。先に述べた 72 年の個展「LANDSCAPE」では、ダンボールの破壊行為は鑑賞者という他者を巻き込んで遂行された。しかし本作では、作者側による行為は会期前に完結し、作品として提示したブロックの様相を変容させる主体が、不特定多数の鑑賞者へと移行している。鑑賞者という偶然の要素に委ねられ、会期が進むにつれてブロックは崩壊の度合いを増していく。しかし、そうして現れるのは単なる廃墟や荒廃の光景ではなく、陥落したブロック片による美しい幾何学的形態が一面に広がる、独自の韻律を感じさせる光景であった。偶然（鑑賞者）が規則（作者）を裏切り、予期せぬ効果を生み出す様を、高崎は目を細めて見守っていたに違いない。



図 51 COLLAPSE 現代美術の崩壊（高崎元尚個展 現代美術の崩壊、ギャラリー 16、1975 年 12 月 9-14 日）



図 52 TREE（高崎元尚展 TREE、ギャラリー 16、1976 年 12 月 7-12 日）

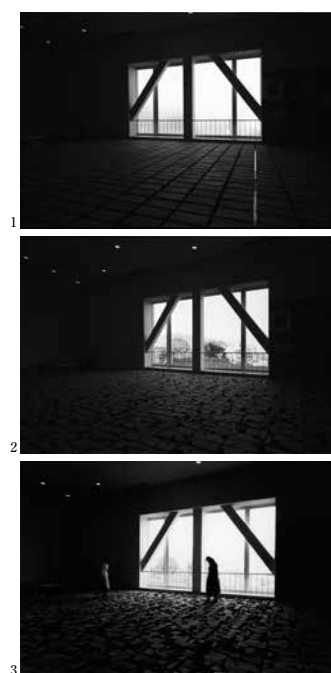


図 53 Collapse（アート・ナウ '78、兵庫県立近代美術館、1978 年 2 月 4-26 日）1. 設営時 2-3. 会期中



図 54 コンクリートブロック発射台 (第 33 回高知市展、高知県立郷土文化会館前、1981 年 6 月 13-21 日)

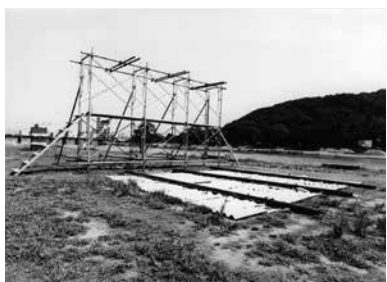


図 55 作題不詳 (野外彫刻展高知 1982、高知市鏡川緑の広場、1982 年 8 月 20-30 日)



図 56 TREE / WOMAN (野外彫刻展高知 1983、高知市鏡川緑の広場、1983 年 8 月 20-30 日)

8. 1984-2017 年：「不能」、再び「装置」へ



図 57 《The Impotence of an Erected Prism》(高崎元尚展、ギャラリー16、1984年)



図 58 《立方体の不能》(瀬戸大橋架橋記念野外彫刻展、高松市中央公園、1988 年)

80 年以降は物理的にもスケールが大きい「破壊」も試みられた。81 年の「第 33 回高知市展」における文字通りの《コンクリートブロック発射台》(図 54) や、翌 82 年の「野外彫刻展高知-1982」で実施された、大掛かりな足場を組み、足場上から地面に置いた波型スレートに向けて金属棒を倒す例(図 55) などでは、一回性の大規模な衝撃を伴う行為を通じて対象を破砕した。ここまで連続的に発表されてきた「破壊」は、83 年、高崎が勤め先の学校で入手した木の表面をバーナーで炭化させ、片足を上げて誘惑する女性の姿態に見立てた《TREE / WOMAN》(図 56) を最後に一旦は途絶えた。

以上述べてきたように、高崎の「破壊」は、決して破れかぶれの衝動的な行動ではない。そして、最終的な破壊後の風景の現出だけが目的でもない。予め時間軸や偶然も計算に入れ、事例ごとに設定した規則のもとで、物理的な破壊行為による対象の段階的な変容過程を提示する、極めて創造的な知性が働いた営為であった。

「破壊」を経た高崎は、再び創作へと回帰した。84 年から始まる「不能」と称されるシリーズは、柔らかいゴム素材で組み立てた立方体ないしは 3 次元な線の形態が、自重に耐えかねて変形する様を提示したものだ。一連の作品は屋内空間を横断するインスタレーションとして設置される場合(図 57) もあれば、屋内・屋外を問わず単体で展示されることもあった(図 58)。ぐにゃりとゴムが湾曲し、直立することができない「不能」の姿は、生まれつき股関節にハンディキャップを抱えていた高崎自身の自虐的な投影、つまり自刻像の一種であり、生来持つ幾何学に対する関心の具象化とも捉えられよう。また、シリーズ名に掛けた男性の性的機能を指すセクシャルな含意には、高崎のユーモアが垣間見える。

90 年頃を境に、高崎は 60 年代の「装置」の再制作に取り組むようになる。かつて制作した「装置」の殆どは自ら廃棄していたが、具体美術協会の再評価の機運が高まり、複数の美術館からの再制作依頼に応えるためにも、高崎は往時の「装置」を再び作り出していく。

やがて高崎の仕事は「装置」の制作に集約される方向へと向かい、「装置」の新作も発表するようになる。90年代以降の「装置」は、方形にはカンヴァスや塩化ビニール、黒い基底部にも従来からの板に加えて布などの様々な素材が自在に駆使され、60年代には控えられた黒色の方形を用いた作例も登場した。また、93年頃には高知と東京を拠点に活動する映像作家・映画監督の大木裕之と知り合い、大木が監督を務めた映画「天国の六つの箱 HEAVEN-6-BOX」などに登場し、制作上でのコラボレーションを行ったことも高崎の活動に一層の奥行きをもたらした⁶¹。

2000年代に入っても、高崎の創作意欲が止むことはなかった。この時期の作例には、2001年のアメリカ同時多発テロ事件に衝撃を受けて制作した《Twin Towers》(図59)や、膨らみのある柔らかい基底部に、外皮のように方形を貼り付けた《いきもの》など、「装置」特有の方形を他の事物に見立てたものが挙げられる。最早制作における制約はないに等しい。かつて前衛の精神を体現した「装置」は、今や作家の想像力を増幅させ、まだ見ぬ表現を成し得る名称通りのデバイスとして機能した。

高崎の最後を飾ったのは、2017年の高知県立美術館における個展「高崎元尚新作展—破壊COLAPSE—」であった。展覧会の準備段階から体調を崩しがちで、病院から指示を送るほかなかった高崎に代わり、松本教仁学芸員が現場のハンドリングをせざるを得なかったという舞台裏の事情もあり、個展名とは裏腹に70年代の復元的な内容にとどまっていたが、東日本大震災を経た2017年の日本に「破壊」を再臨させたことは、作品に新たな意味を付与することに繋がったという見方ができよう。展覧会の幕開けを高知市の病院で知った高崎は、会期中の6月22日に息を引き取った。

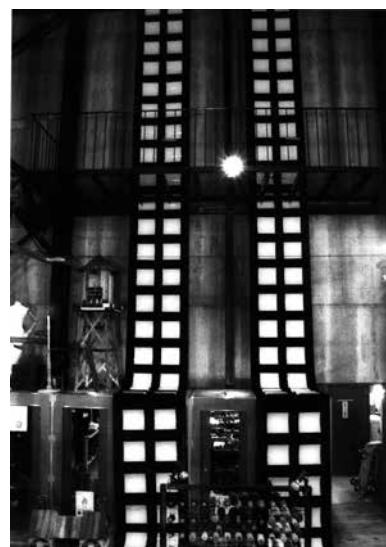


図59 《Twin Towers》2002年、ジーンズファクトリー岡山店

結語

本稿では、戦後高知の美術史に大きな足跡を残し、全国的に見ても稀有な活動を行った高知県出身の前衛美術家・高崎元尚の1950年代から2017年に至るまでの仕事を、時系列に沿って詳述した。高崎の芸術は、時々の動向に敏感に反応し、時代性を反映させながらも、前衛美術家の自負のもとで従来の美術の枠組みを超えて展開した。50年代の初期の制作は、抽象絵画と写真作品とを往還しながら進められ、殊に絵画は「朱と緑」、「アクション」などシリーズ単位で段階的な変遷をみせた。63年に発表した「装置」は、絵画というジャンルに対する「反絵画」という側面を持ち、当時の時代精神に呼応したアクチュアルな表現にほかならなかった。その後、「装置」から派生的に生まれた「密着」において発想が制作から行為へと転回し、70年代の「破壊」では、物理的な破壊行為による対象の変容過程そのものが作品として提示された。10年に渡る「破壊」の時期を経て、再び創作へと回帰してからも、高崎はまだ見ぬ表現を希求する姿勢を崩さず、生涯を通して創造の手を止めることはなかった。

文中ではその芸術に通底するのが「規則」と「偶然」の要素であると予め仮定し、各シリーズや個々の作品にみられる具体的な造形や手法に如何に影響しているかを確認してきた。偶然を規則化させる、あるいは規則を偶発的要素で突き崩す—そして引き出される作者すら予期せぬ効果は、作品に多層的な解釈の可能性をもたらすと同時に、既存の価値観に揺さぶりをかける。作品が自らの予想を裏切る

様を誰よりも楽しんでいたのは、高崎本人であった。「誰もやらないことをやる」を信条に、何事も面白がって受け入れるこの作家ならではのユーモアの精神は、制作のベースとなる理知的な思考と表裏一体の関係にある。振り返ると、「装置」もカンヴァスの予想外の反りを面白がったところから始まった。規則と偶然、そしてユーモアが散りばめられた高崎の芸術は、時を経ても色褪せることなく、今なお新規性を保っている。

本稿の執筆は、貴重な資料を惜しみなくご提供くださり、筆者の質問にいつも快く答えてくださった高崎佳恵氏、高崎元宏氏の協力がなくては実現しませんでした。また、長時間のインタビューに応じてくださった都築房子氏と枳工房代表の北川寛氏、大阪中之島美術館、香美市立美術館、大木裕之氏、平井章一氏、浦野むつみ氏（ANOMALY）、コックドール、株式会社インターナカツ、株式会社高知新聞企業、公益財団法人高知市文化振興事業団、一般社団法人高知県銀行協会（順不同）の皆様のご協力を賜りました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

註

- 1 晩年の高崎による過去の作品についての言及（作題、制作年、出品展覧会、制作意図等）は、作家自身の単純な記憶違いにより、発表当時の内容からは相違しているケースがある。本稿は、高崎の制作活動を事実即して時系列順に考察するという趣旨によるため、作題は判明している限り発表当時の呼称を採用し、作家が作品、あるいはシリーズに関する言及を複数残している場合は、制作年に近い年代のものを優先的に参照している。また、提供元の表記がない画像は全て高崎家より提供を受けたものである。
- 2 高崎の生い立ちや学生時代のエピソードは、主に以下の文献に拠っている。高崎元尚「わたしの十代」『青少年へ贈る言葉 わが人生論 高知編（中）』文教図書出版株式会社、1986年、pp.76-79；高崎元尚「遊びのつづき」『高知県美術家協会会報 杜 No.5』高知県美術家協会、1993年；高崎元尚「私の画業」『季刊手巾31』堀満子、1986年、pp.1-3；高崎元尚「新しいものの好きと粘り強さ」と『土佐倶楽部6』亜細亜書房、1998年、p.42；高崎元尚『高崎元尚 誰もやらないことをやる』高崎元宏、2016年；インタビュー：中嶋泉、池上裕子「高崎元尚オーラルヒストリー-2012年12月28日」、http://www.oralarthistory.org/archives/takasaki_motonaoh/interview_01.php、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ〈2019年1月アクセス〉
- 3 以下の記事によると、高崎の足腰に苦痛をもたらしていた原因が判明するのは高崎が40代半ばの頃であった。高崎元尚「『月曜随想 私の歩き方 高崎元尚（現代美術作家、土佐高校教諭）』『高知新聞』、1977年1月24日朝刊。具体的な病名は、先天性股関節脱臼（病名は以下の詳細不明の自筆文献のコピーを参照した。高崎元尚「現代美術葬」『土佐画壇の行方 NO.5 くじら絵巻』）。夫人の高崎佳恵によると、高崎は40代後半に手術を受け、これを克服したという。
- 4 高崎元尚「遊びのつづき」『高知県美術家協会会報 杜 No.5』高知県美術家協会、1993年
- 5 高崎、前掲註（4）
- 6 高崎元尚「わたしの十代」『青少年へ贈る言葉 わが人生論 高知編（中）』文教図書出版株式会社、1986年、p.78
- 7 本作の図版が掲載された『高崎元尚 誰もやらないことをやる』（高崎元宏、2016年）では、制作年は1947年とある。一方で本作は、神奈川県川崎市の製鉄所の風景を描いたものと高崎家に伝えられていた。高崎は東京美術学校を卒業後、川崎市立臨港中学校に勤めていたというから、本作の制作年は、少なくとも美術学校を卒業する49年以降と推定できる。
- 8 62年に結成された高知の前衛美術グループ。高崎率いる「高知モダンアート研究会」と高知出身の美術家、濱口富治が率いる「グループ・ゼロ（新象土佐派）」とが合併するかたちで設立に至った。高崎が参加した前衛土佐派の関連展覧会には、62年から64年に年1回開催された第1回から第3回までの「前衛土佐派展」、64年の「第1回土佐派選抜展」などが挙げられるが、65年以降高崎は同グループからは距離を置いたとみられる。ただし、前衛土佐派が実質的に瓦解する原因ともなった、67年の「南日本現代美術展」（高知県教育会館）には出品している。
- 9 「第1回ジャパン・アート・フェスティバル」の目録『The 1st Japan Art Festival』（Japan Art Festival Association、1966年）には高崎が1949年の自由美術家協会展に選出されたとあるが、詳細は確認できていない。また、高知市の高崎の自宅アトリエに残された、53年の「第3回モダンアート協会展」出品作《作品52-VI》の裏面には、「自由美術■五回展（■は判読不能）」と読める裏書きがある。《作品52-VI》の制作にあたって既存作のカンヴァスを再利用したと考えられ、下の絵は塗り潰されたとみられる。
- 10 6月頃に開催される無審査のアンデパンダン形式の「高知市文化祭洋画展（高知市展）」で実験的な作品を出品し、10月頃の「高

- 知県美術展覧会（高知県展）」で全力を尽くす、という定型のサイクルに、その他の公募展やグループ展、個展が加わっていくのが生涯を通しての高崎の基本的な制作発表のスタイルといえる。
- 11 帰郷後、土佐高等学校に勤めるまでの期間は、猪野々中学校（現在は廃校）と高知市立城北中学校に勤務したという。
 - 12 高崎はユニークな授業を行う美術教諭として知られた。その教え子には美術家の合田佐和子、美術家・絵本作家の田島征三・征彦兄弟らが含まれる。
 - 13 高崎元尚『高崎元尚 誰もやらないことをやる』高崎元宏、2016年、p.4
 - 14 高知モダンアート研究会の活動については以下を参照。松本教仁「戦後高知の前衛美術集団興亡史」『高知市史研究第2集』高知市、2004年、pp.1-20
 - 15 高崎元尚「現代に生きる 「モダンアート」の10年 高崎元尚（モダンアート協会会員、土佐高校教諭）」『高知新聞』、1960年6月13日朝刊の記事において、高崎はモダンアート協会の沿革と会員を紹介した。同記事では、当時協会展に出品していた嶋本の名前を挙げ、その絵具を大砲で打つ絵画をスイス人作家ジャン・ティンゲリーの作品に準えて評している。嶋本はこの記事を受け、同月22日の消印のある手紙で、高崎に次のように書き送っている。「私はじめ具体一同が最も注目している貴兄より適切な文章を書いて頂いたるは大変うれしいです。大阪展は私のと貴兄の作品が並ぶのが恒例のようになっていますが、今後も又そうなる様希望しています。〔中略〕六月二十二日 嶋本昭三」（原文ママ。嶋本昭三の手紙本文より引用。）文中の大阪展とはモダンアート協会大阪巡回展のことであろう。率直な謝意を綴った文面からは、他の具体会員からの高崎の評価だけでなく、モダンアート協会展に端を発する作家間の私的な交流の様子をも窺うことができる。
 - 16 高崎、前掲註（13）、p.6
 - 17 「秋晴れに県展にぎわう 写真にそろって入賞の師弟コンビ」『高知新聞』、1956年10月28日朝刊
 - 18 詩人たちとの交流は高崎ひとりに限ったことではない。前衛詩運動が盛り上がりを見せた50年代の高知では、詩人たちと前衛的—とりわけ当時で言えば抽象的傾向を帯びた作風の若手作家とが密接な交流を持っていた。作家たちが詩誌に作品画像を供する一方で、詩人たちは独自の視点から展評や作品評を書き残すなど、相互に関わり合いながら互いの創作活動に影響を及ぼしあっていた。仔細な調査には及んでいないが、詩人の北園克衛が主宰したグループ「VOU」（1935年に結成）には高知グループも存在しており、『POP』や『MES』の同人にはVOUに重複して所属する者もいた。高崎は高知の詩人たちと関わり、東京で個展を行うなかで、59年頃から東京のVOU、ひいては北園らとの交流が生まれたと考えられる。
 - 19 「ブームの残したもの 高知県写真界の昨今 座談会 ほしい批評精神 コンテストは「目標」ではない クラブを勉強の場に出席者＝南茂・高知県写真連盟会長、弘田博敏・高知作家集団会員、高崎元尚・モダンアート協会会員」『高知新聞』、1960年6月2日朝刊
 - 20 江川和彦「高崎君の個展を見て」『高知新聞』、1959年12月30日朝刊
 - 21 往時の高崎の活動をよく知る香美市立美術館館長の都築房子によると、高崎は制作にあたってスケッチの類を全くと言っていいほど行わなかったという。
 - 22 香美市立美術館所蔵の本作は「第6回モダンアート協会展」にも出品されているが、作題は現在の《作品（魚）》ではなかった。同展の目録を確認する限り、《作品C》、《作品G》、《作品H》のいずれかであったと考えられる。また、前年の「第9回高知県展」の出品作は同展目録に《魚》とあることから、同一作の可能性もある。
 - 23 同作は翌年4月のモダンアート協会展でも出品された。その時の作題は《かかし（A）》とされ、《かかし（B）》（図8）と併せて展示された。
 - 24 高崎、前掲註（13）、p.11
 - 25 1960年作の本作は、97年に高知県立美術館で収蔵して以降、高崎の確認・了承のうえ、《朱と緑》という作題で扱われてきた。本作の詳細な来歴はこれまで判然としていなかったが、当時の『高知新聞』で言及される60年の「第14回高知県展」出品作《スペース6023》の形状とおおよそ合致する変形カンヴァスの作例であることから、同一作と推定した。
 - 26 高崎元尚「『私のデモン 県展作品から』<5> 人工衛星とともに」『高知新聞』、1960年10月30日朝刊
 - 27 「『文化消息』 高崎元尚氏（モダンアート協会会員）が東京・銀座の村松画廊で画と写真の個展」『高知新聞』、1961年11月24日朝刊
 - 28 本稿では、61年から62年にかけて制作された、モノクロームで、全体が高崎の身振りを直接的に反映した筆致で満たされた、あるいは同型のストローク反復を基調とする画面を持つ一連の作例を高崎の呼称に準じて「アクション」シリーズと定義して考察を進める。
 - 29 《62・A5 大きな世界》は2014年の「《大木裕之》「闘い／抽象／具体／現象」with 高崎元尚」（ARATANIURANO）に出品されている。本作はその際に高崎本人により《装置》と改題され、2枚1組ではなく個別の作品として扱われた。また、62年の「第14回高知市展」出品時とは白い面と黒い面が左右逆の状態で開催展示された。口絵6では、14年時の作家の意思を尊重して、左を黒、右を白の画面の状態に掲載している。
 - 30 高崎元尚「現実対決の甘さ 個展を終わって 高崎元尚（モダンアート協会会員 土佐高等学校教諭）／作品NO.20 高崎元尚」

- 『高知新聞』、1962年12月16日朝刊
- 31 「（装置）について」と題された、高崎がワードプロセッサで記した覚書。この覚書はその内容から1997年以降に執筆されたものとみられ、事実誤認の箇所が見受けられる。
- 32 高崎、前掲註（31）
- 33 「スターダスト 単調な単位の繰り返しの中に人間性を内蔵した高崎元尚の「装置」」『藝術新潮 第169号』新潮社、1964年、pp.154-155
- 34 ヨシダ・ヨシエ「不吉な装置 高崎元尚の作品に」『高知新聞』、1963年11月10日朝刊。この記事は同年の高崎の樺画廊における個展の目録にも転載された。なお、前年に「前衛土佐派」が結成されたこともあり、この時期の高知には東野芳明、中原佑介、針生一郎ら批評家が交互に訪れ、関連作家のアトリエに訪問していたという。詳細は以下を参照。ヨシダ・ヨシエ「あの時代の「前衛」たち—高知の1960年代展に寄せて」『こんなアヴァンギャルド芸術があった！—高知の1960年代—』高知新聞社、1997年、pp.11-13
- 35 高崎元尚『1964年度選抜 秀作美術展陳列目録』、朝日新聞社、1965年、pp.6-7
- 36 高崎、前掲註（31）
- 37 1969年4月29日～5月18日、「Hommage an das Schweigen（沈黙に捧げる）」展（チロルクンスト・バビリオン、インスブルック、オーストリア共和国）。本展には67年にオーストリア共和国のクラウンフルトに位置するギャラリー・ハイデ・ヒルデブラントで開催された「具体オーストリア展」の出品作品の一部が展示されたとみられ、本展の図録には、高崎のほか、今中クミ子、松谷武判、小野田實の作品画像が掲載されている。
- 38 高崎は実際に79年の「第33回高知県展」の写真部門において、74年の個展「LANDSCAPE」（ギャラリー16）における石膏板の破壊過程を三段階に渡って撮影した《作品の記録A》を発表し、褒状を受けた。また、80年8月の「現代美術の実験」展（高知市立中央公民館）でも、自作を写した写真作品《スペクタクル》を発表した（詳細は不明）。高崎の写真に対する考えは、たとえば以下の『高知新聞』記事に詳しい。「『県展広場 褒状を受けた審査員 立体作品の高崎元尚さん 他流試合で“現役復帰” 夢は自分で写真集出版』『高知新聞』、1979年10月25日朝刊
- 39 高崎元尚「『ニューヨークの現代美術』＜上＞ 激しい競争のあけ暮れ さまざまな評価 ジャパン・フェスティバル 思い切ったスターづくり（モダンアート協会・土佐高教論）」『高知新聞』、1966年4月9日朝刊
- 40 「第1回ジャパン・アート・フェスティバル」に先立って65年12月に開催された「第1回日本芸術祭国内展示」は、高崎が同じく出品作家であった吉原治良や白髪一雄といった具体のメンバーの作品を改めて意識し、具体に加入する契機となったことでも知られている。高崎はフェスティバルを実見するために66年3月14日から27日まで渡米したが、渡米前には吉原家で壮行会が行われたという。
- 41 山本淳夫「後期具体（1965-1972）」『具体展Ⅲ—1965～1972—』芦屋市立美術館、1993年、pp.2-5
- 42 当時「装置」制作に協力していた夫人の高崎佳恵によると、60年代の塩化ビニール製「装置」の制作は、以下の方法によるという。ガスコンロ上に鉄製の容器を用意し、その中に方形の湾曲面を象った鉄製の「型」を入れ、塩化ビニールの板を型上に乗せる。その状態に湯を入れて熱し、塩化ビニールが型に沿って湾曲した頃合いを見て一斉に引き上げる。塩化ビニールの適度な湾曲の頃合いを見定めるのが難しかったという。
- 43 1990年代以降のものとみられるワードプロセッサで記された高崎の覚書。
- 44 《68-1》自体は現存しておらず、写真も発見できていない。ただし、1969年4月5日付の『高知新聞』記事「『土曜のいす』 空間を演出する 新作を完成 高崎元尚さん」では、前年の県展出品作である《68-1》の外観についての記述がみられる。
- 45 「CURVED SQUARE」という名称自体は、69年7月の「第1回ヒロシマ・ルネッサンス美術展」が初出と考えられる。文中では化粧板のデコラを用いた、中央を十字で区切った湾曲した方形という外観の一連の作品を、便宜的にシリーズとして「CURVED SQUARE」と呼称した。
- 46 本作は奇しくも高松次郎が69年2月に東京画廊で発表した《波》と視覚的類似をみせた。高崎は以下の『高知新聞』紙上で「CURVED SQUARE」のイラストと共にそのことに対する驚きを語っている。高崎元尚「『マイキャンパス』＜23＞ グリーティング・イン・スペース 絵と文・高崎元尚（土佐高教論・モダンアート協会）」『高知新聞』、1969年2月3日朝刊
- 47 高崎元尚「鉛と県展」『MES 29』MESクラブ、1969年、pp.20-21
- 48 高崎、前掲註（47）、p.20
- 49 1972年1月1日の日付が入った高崎の年賀状に記載されたテキストからの引用。年賀状の表側には図46の《侵食》の写真が用いられている。
- 50 「私の60年代—「朱と緑」から「密着」へ」と題された、高崎がワードプロセッサで記した覚書。この覚書は1996年前後に執筆されたものとみられる。
- 51 高崎、前掲註（13）、p.33
- 52 高崎元尚「ああ現代美術 「現代美術の実験」25回展に思う」『高知新聞』、1972年9月8日朝刊

- 53 水沼啓和「1968 現代美術の転換点」『1968年—激動の時代の芸術 展覧会カタログ』千葉市美術館・北九州市立美術館・静岡県立美術館、2018年、pp.8-10
- 54 黒瀬陽平「90年代のアートにとって『情報化』とはなんだったのか」『1990年代論』河出書房新社、2017年、p.252
- 55 高崎、前掲註（52）
- 56 「現代美術 手とエスプリ展 土佐派20回展」パンフレット、1970年（以下に再録。松本教仁「それからの土佐派と、現代美術の実験」『平成10年度 高知県立美術館研究紀要 第1集』高知県立美術館、1999年、p.40）
- 57 高崎、前掲註（52）
- 58 高崎、前掲註（13）、p.33
- 59 松本教仁「それからの土佐派と、現代美術の実験」『平成10年度 高知県立美術館研究紀要 第1集』高知県立美術館、1999年、pp. 37-74
- 60 伊藤治美ほか編『50 years of galerie 16 1962-2012』ギャラリー16、2014年、p.296
- 61 そのほか、高崎は大木裕之監督・撮影の映画「優勝—Renaissance」（1995）や1998年から継続されている映像作品「白鏡」などに出演している。

[資料1] 高崎元尚 年譜

塚本麻莉 編

凡 例

- ・本年譜は『高崎元尚新作展—破壊 COLLAPSE—』（高知県立美術館、2017 年）所収の「高崎元尚年譜」（中村麻莉、朝倉芽生編）に基づき、追加の調査で判明した展覧会情報を加えたうえで、出品作品や展示風景等の画像も可能な限り掲載したものである。
- ・年譜中の人名表記では敬称を略した。
- ・編者の補足は〈 〉内に記した。

【事 項】

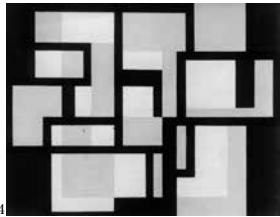
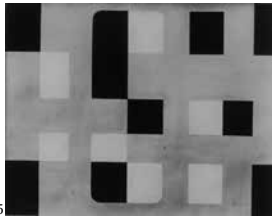
- ・展覧会については、その内容に合わせて公募展やグループ展は●、個展は○、その他の出来事は◎、高崎の写真が掲載されている雑誌の発行月には★を、それぞれ文頭に付した。
- ・展覧会については、「 」内に展覧会名を、続く（ ）内に会場と都道府県名（海外の場合は地名）、さらに海外の場合には国名を続けて記載している。ただし、高知県内で行われた展覧会で、会場名に「高知」を含むものについては、（ ）内での土地の記載は省略した（例；高知大丸）。
- ・高崎が参加した巡回型の公募展、グループ展については、原則として最初の開催地の情報のみを記載した。
- ・詳細な時期（月日）が不明の場合は、該当年の末尾に掲載した。
- ・年譜中の人名といった固有名詞における漢字の表記は、原則として参照元の表記を採用した（例；高崎元尚）。

【出品・掲載作品】

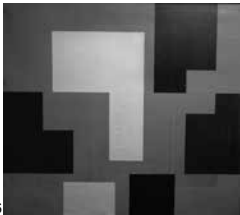
- ・出品・掲載作品名は《 》内に表記した。
- ・作品の名称は、目録等の情報から判明しているものに限って記載した。原則として典拠の表記に準拠したが、漢数字は算用数字に統一した。
- ・高知県展、高知市展、モダンアート協会展の出品作は、作品名の前に出品した部門名を記載した。

【画 像】

- ・各ページの欄外左下に、表中の画像に付した数字と対応させて、その出典（転載ないしは撮影者の情報）、判明している場合は現在の所蔵情報を記載した。

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1923 年／ 大正 12 年／ 0 歳	◎1 月 6 日、高知県香美郡暁霞村（現在の香美市香北町）に生まれる。		
1936 年／ 昭和 11 年／ 13 歳	◎暁霞小学校（現在の香美市立大宮小学校）を卒業。		
1940 年／ 昭和 15 年／ 17 歳	◎3 月、旧制土佐中学校（現在の土佐中学校）を卒業。 ◎早稲田大学専門部工科建築科に入学。		
1941 年／ 昭和 16 年／ 18 歳	◎早稲田大学専門部工科建築科を休学し、川端画学校へ通う。（早稲田大学専門部工科建築科は、同年中に退学したとみられる）		
1942 年／ 昭和 17 年／ 19 歳	◎東京美術学校（現在の東京藝術大学）彫刻科に入学。		
1943 年／ 昭和 18 年／ 20 歳	◎学徒出陣により海軍に配属される。（46 年に東京美術学校に復学）		
1949 年／ 昭和 24 年／ 26 歳	◎3 月 24 日、東京美術学校彫刻科を卒業。（52 年頃まで、川崎市立臨港中学校教諭、自衛隊員などの職を転々としたという）		
1952 年／ 昭和 27 年／ 29 歳	●3 月 20～29 日、「第 2 回モダンアート協会展」（東京都美術館、東京） ◎高知に帰郷。（猪野々中学校や高知市立城北中学校に勤務したという）	絵画： 《對話》 1 《作品》	
1953 年／ 昭和 28 年／ 30 歳	●2 月 21 日～3 月 5 日、「第 3 回モダンアート協会展」（東京都美術館、東京） ◎11 月、「第 7 回高知県展」に出品するも落選。	絵画： 2 《作品 52 - IV》 《作品 52 - VI》 3 《作品 52 - VII》 《作品 53 - II》 《作品 53 - III》	 
1954 年／ 昭和 29 年／ 31 歳	●2 月 21 日～3 月 5 日、「第 4 回モダンアート協会展」（東京都美術館、東京） ◎モダンアート協会新人賞受賞。 ●10 月 30 日～11 月 8 日、「第 8 回高知県展」（高知市議事堂）	絵画： 《作品 53-9》 4 《作品 53-10》 5 《作品 54-4》 洋画： 《陽気な散歩》	 

1. 展覧会ハガキより転載 2. 編者撮影／個人蔵 3. 高知県立美術館所蔵 4. 画像は香美市立美術館より提供／個人蔵 5. 展覧会ハガキより転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1955 年／ 昭和 30 年／ 32 歳	● 2月1～14日、「第5回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 6 《作品 G (花)》 《作品 F》 《作品 H (太陽)》	
	◎ 2月21日、「高知モダンアート研究会 (高知モダンアート協会)」を結成、同会の会長となる。		
	● 4月15～17日、「モダンアート研究会展」(高知市中央公民館)を開催する。〈第1回高知モダンアート研究会展〉		
	◎ 8月17～19日、高知モダンアート研究会が、モダンアート協会会員の勝田寛一を講師に招き、当時高崎が教諭として勤めていた高知市立城北中学校で「サンマースクール」を開催する。	7 サンマースクール会場前での集合写真	
	● 10月2～6日、「関西モダンアート展」(京都市美術館、京都)〈「第5回モダンアート協会展」(2月1～14日、東京都美術館、東京)の巡回展。〉		
	● 10月29日～11月7日、「第9回高知県展」(高知市議事堂・県労働会館)	洋画：《魚》	
1956 年／ 昭和 31 年／ 33 歳	● 1月6～8日、「第2回高知モダンアート研究会展」(高知市中央公民館)		
	● 2月15～28日、「第6回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 《作品 C》 《作品 G》 《作品 H》 8 《作品 F》 9 展示風景	 
	◎ 3月、モダンアート協会から会友に推挙される。		
	◎ 4月1日、土佐高等学校へ教諭として就職する。〈～1988年3月31日まで〉		
	● 5月3～6日、「モダンアート協会展」(高知市中央公民館)〈「第6回モダンアート協会展」の高知巡回展〉		
	● 6月1～5日、「第8回高知市文化祭 洋画展」(高知市議事堂)		
	◎ 6月、土佐高等学校の写真部の顧問となる。		
	● 10月27日～11月5日、「第10回高知県展」(高知市議事堂、県労働会館、文教会館)	洋画：《機械の手》 写真：《風景》	

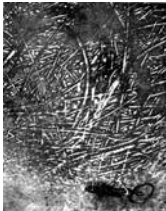
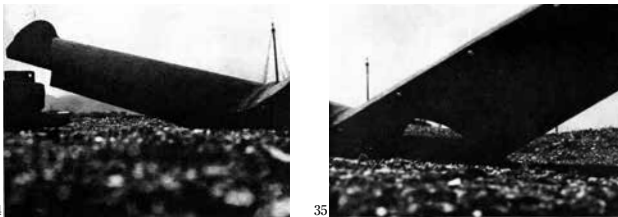
6. 編者撮影／個人蔵 7. 撮影者不明／高崎家より提供 8. 編者撮影／個人蔵 9. 撮影者不明／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1957 年／ 昭和 32 年／ 34 歳	● 1 月 18 ～ 20 日、「第 5 回高知モダン・アート展」(高知市中央公民館)		
	● 2 月 10 ～ 23 日、「第 7 回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 《生のフォルム》 10《機械の手》 《作品 5613》 11《作品 5701》 《作品 5702》	 
	★ 6 月、『POP 1』に写真《穴》が掲載される。	12《穴》	
	● 6 月 11 ～ 16 日、「第 9 回高知市文化祭 洋画展」(高知大丸)		
	★ 9 月、『POP 2』に写真《假面》が掲載される。	13《假面》	
	● 9 月 10 ～ 23 日、「第 11 回高知県展」(高知大丸)	洋画:《フォルム(平和の思考)》 写真:《黒猫》	
	★ 12 月、『POP 3』に写真《オブジェ》、《黒猫》が掲載される。	14《オブジェ》 15《黒猫》	 
	◎モダンアート協会の会員となる。		
1958 年／ 昭和 33 年／ 35 歳	● 1 月 2 ～ 12 日、「モダンアート研究会展」(高知大丸)		
	★ 3 月、『POP 4』に《作品 B》が掲載される。	16《作品 B》 《「朱と緑」のシリーズの平面作品を撮影したもの》	
	● 4 月 6 ～ 24 日、「第 8 回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 《作品 A》 《作品 B》 17《作品 C》 18 展示風景	 

10. 『第 7 回モダンアート協会展 図録』(モダンアート協会、1957 年)より転載 11. 編者撮影／個人蔵 12. 『POP 1』(POP クラブ、1957 年)より転載 13. 『POP 2』(POP クラブ、1957 年)より転載 14-15. 『POP 3』(POP クラブ、1957 年)より転載 16. 『POP 4』(POP クラブ、1958 年)より転載 17. 編者撮影／個人蔵 18. 撮影者不明／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 4月15～20日、「第10回高知市文化祭 洋画展」(高知大丸) ● 6月7日～7月13日、「抽象絵画の展開」(国立近代美術館〈現在の東京国立近代美術館〉、東京)	19《作品》 20展示風景	 
	● 9月23日～10月12日、「第12回高知県展」(高知大丸)	洋画： 21《かかし》 写真： 22《うらめしや》 《日食の祈り》	 
1959年／ 昭和34年／ 36歳	★ 3月、『VOU 66』に写真《祈る人》が掲載される。	23《祈る人》	
	● 4月1～19日、「第9回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 24《かかし A》 〈「第12回高知県展」の出品作《かかし》と同作〉 25《かかし B》	 
	★ 5月、『VOU 67』に写真《窓 A》、《窓 B》が掲載される。〈『VOU 68』、『VOU 69』は原本を確認することができなかった〉	26《窓 A》 27《窓 B》	 
	● 6月29日～7月9日、「1959年モダンアート展」(高知大丸)〈「第9回モダンアート協会展」の高知巡回展。〉		
	★ 7月、『VOU 70』に写真《作品 Z》が掲載される。	28《作品 Z》	
	● 7月21～23日、「VOU 実験写真展」(銀座東電サービスセンター、東京)		
	● 8月7～12日、「'59 VOU 実験写真展」(小西六フォトギャラリー、東京)		

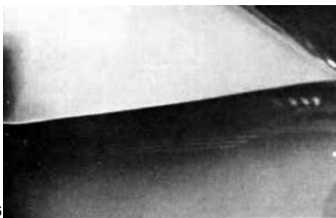
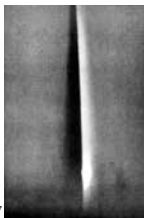
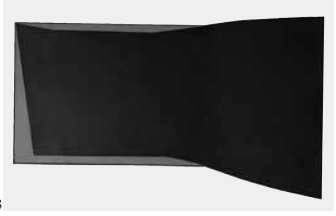
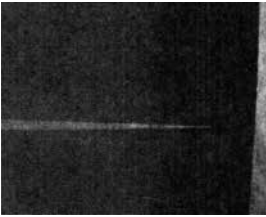
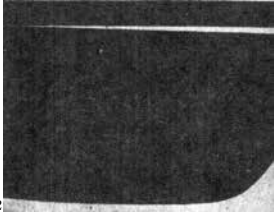
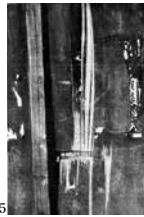
19. 高知県立美術館所蔵 (2000年代の再制作作品) 20. 撮影者不明／高崎家より提供 21. 画像は香美市立美術館より提供／大阪中之島美術館所蔵 22. 高知県立美術館所蔵 23. 『VOU 66』(VOU クラブ、1959年)より転載 24-25. 画像は香美市立美術館より提供／大阪中之島美術館所蔵 26-27. 『VOU 67』(VOU クラブ、1959年)より転載 28. 『VOU 70』(VOU クラブ、1959年)より転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	★ 9 月、『VOU 71』に写真《鉄による作品 C》が掲載される。	29《鉄による作品 C》	
	● 10 月 24 日～11 月 8 日、「第 13 回高知県展」(県民ホール、高知)	洋画:《ユーモレスク》 写真:《人間喜劇》	
	★ 11 月、『VOU 72』に写真《公園》が掲載される。	30《公園》	
	○ 12 月 24～30 日、「高崎元尚個展」(樺画廊、東京)		
1960 年／ 昭和 35 年／ 37 歳	★ 1 月、『VOU 73』に写真《黒い beat》が掲載される。	31《黒い beat》	
	★ 3 月、『VOU 74』に写真《Fin》が掲載される。	32《Fin》	
	● 4 月 1～19 日、「第 10 回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 33《拡がる空間》	
	● 6 月 14～19 日、「モダンアート協会 10 周年記念展」(高知大丸)		
	★ 7 月、『VOU 76』に写真《composition a》、《composition b》〈原文ママ〉が掲載される。〈『VOU 75』は原本を確認することができなかった〉	34《composition a》 35《composition b》	
	● 8 月 29 日～9 月 3 日、「モダンアート協会創立十周年記念 会員小品展」(サエグサ画廊、東京)		

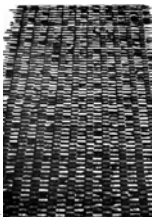
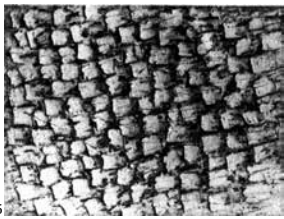
29. 『VOU 71』(VOU クラブ、1959 年)より転載
32. 『VOU 74』(VOU クラブ、1960 年)より転載
76』(VOU クラブ、1960 年)より転載

30. 『VOU 72』(VOU クラブ、1959 年)より転載
33. 『第 10 回モダンアート協会展 出品目録』(モダンアート協会、1960 年)より転載

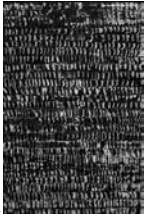
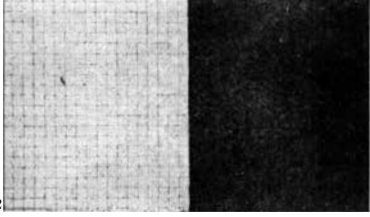
31. 『VOU 73』(VOU クラブ、1960 年)より転載
34-35. 『VOU

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	★ 10 月、『VOU 77』に写真《vacuum space no.1》、《vacuum space no.2》が掲載される。	36《vacuum space no.1》 37《vacuum space no.2》	 
	● 10 月 22 日～11 月 6 日、「第 14 回高知県展」(県民ホール、高知大丸)	洋画： 38《スペース 6023》 写真： 《影》 《鉄の風景》 《こわれるもの》	
	★ 12 月、『VOU 78』に写真《op. 2》が掲載される。	39《op. 2》	
	○ 12 月 25 ～29 日、「高崎元尚展」(村松画廊、東京)	40《コンポジション13》 《写真作品》 41《スペース 6021》 42《スペース 6022》 43《スペース 6024》	   
1961 年／ 昭和 36 年／ 38 歳	★ 2 月、『VOU 79』に写真《op. 6103》、《op. 6101》が掲載される。	44《op. 6103》 45《op. 6101》	 
	★ 4 月、『VOU 80』に写真《op. 6104》が掲載される。	46《op. 6104》	
	● 4 月 1 ～19 日、「第 11 回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 《スペース 6104》 《スペース 6105》 《ソウルの軌跡 6106》 《ソウルの軌跡 6107》 写真： 《グレゴール・ザムザの想い 1》	

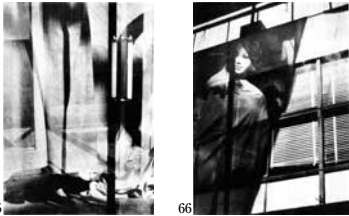
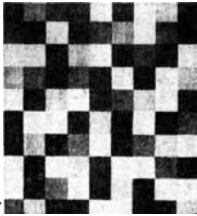
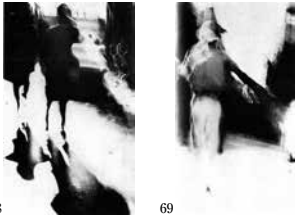
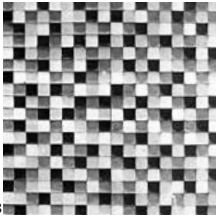
36-37.『VOU 77』(VOU クラブ、1960 年)より転載 38.高知県立美術館所蔵 39.『VOU 78』(VOU クラブ、1960 年)より転載 40-43.1960 年 12 月 29 日付『高知新聞』紙面より転載 44-45.『VOU 79』(VOU クラブ、1961 年)より転載 46.『VOU 80』より転載 47.『第 11 回モダンアート協会展 図録』(モダンアート協会、1961 年)より転載(図録には《ソウルの軌跡》とのみ掲載されている)

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	★ 7 月、『VOU 81』に写真《op. 06》、 《op. 07》が掲載される。	48《op. 06》 49《op. 07》	 
	◎ 8 月、高知市帯屋町界隈で新象 作家協会の濱口富治が中心となっ た前衛美術グループ「グループ・ ゼロ」のパフォーマンス「理由なく デモして街を歩く」に参加。〈以降、 「グループ・ゼロ」というグループ 名は、「新象土佐派」と併行して 使用される〉		
	● 8 月 15 ～ 20 日、「柳原睦夫・高 崎元尚二人展」（高知大丸）	50《作品》	
	◎ 8 月 21 日、東野芳明、中原佑介 が来高し、高崎のアトリエを訪 問する。〈高崎のほか、須藤康夫、 寺尾孝志、濱口富治、堀慎吉、 柳原睦夫のアトリエも訪問して いる。〉		
	★ 9 月、『VOU 82』に写真《op. 2》 が掲載される。	51《op. 2》	
	● 10 月 21 日～11 月 5 日、「第 15 回高知県展」（県民ホール、高知 大丸）	洋画： 《明日が問題 B》 写真： 52《障子と襖のための 写真 A》 《障子と襖のための 写真 D》 《障子と襖のための 写真 E》	
	★ 11 月 5 日発行の『MES 13』の 表紙に写真（作題不詳）が掲載 される。	53不詳	
	○ 11 月 21 ～ 25 日、「高崎元尚個展」 （村松画廊、東京）	54《作品 4》 55《作品 10》	 

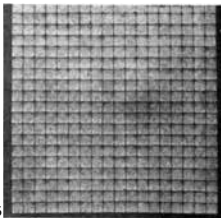
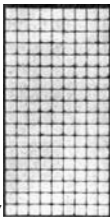
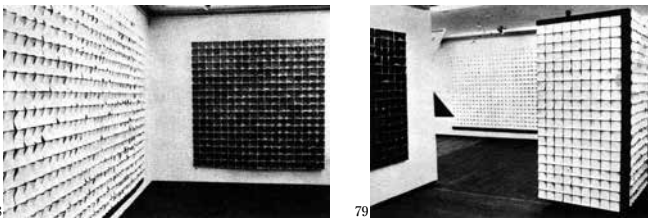
48-49. 『VOU 81』（VOU クラブ、1961 年）より転載 50. 高知県立美術館所蔵 51. 『VOU 82』（VOU クラブ、1961 年）より転載 52. 高崎元尚／高崎家より提供 53. 『MES 13』（MES クラブ、1961 年）より転載 54-55. 1961 年 11 月 27 日付『高知新聞』紙面より転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1962 年／ 昭和 37 年／ 39 歳	★ 12 月、『VOU 83』に写真《figure》 〈原文ママ〉が掲載される。	56《figure》	
	★ 12 月 20 日発行の『MES 14』の 表紙に写真（作題不詳）が掲載 される。	57 不詳	
	★ 3 月 1 日発行の『MES 15』の表 紙に写真（作題不詳）が掲載さ れる。	58 不詳	
	● 3 月 10 ～ 20 日、「VOU 形象展」 （喫茶リオ、高知）		
	★ 4 月、『VOU 84』に写真《figure A》、《figure B》が掲載される。 〈『VOU 85』は誌面を確認するこ とができなかった〉	59《figure A》 60《figure B》	 
	● 4 月 1 ～ 19 日、「第 12 回モダン アート協会展」（東京都美術館、 東京）	61《作品 62 の 1（大 きな世界）》 《作品 62 の 2（大 きな世界）》	
	● 6 月 5 ～ 10 日、「第 14 回高知市 文化祭 洋画展」（高知大丸）	62《62-A5 大きな世界》	
	◎ 7 月 23 日、濱口富治率いる「グ ループ・ゼロ（新象土佐派）」と 高崎を中心とした「高知モダン アート研究会」が合流し、「前衛 土佐派（土佐派）」を結成する。〈『高 知新聞』学芸欄において発表〉		
	★ 8 月 20 日発行の『MES 16』の 表紙に写真（作題不詳）が掲載 される。	不詳	

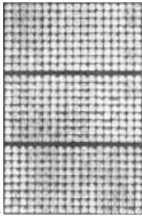
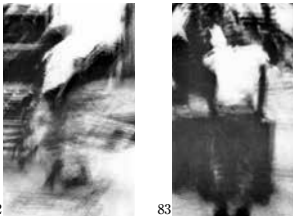
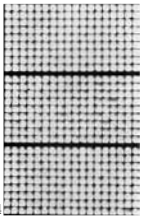
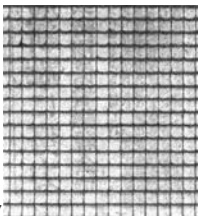
56. 『VOU 83』（VOU クラブ、1961 年）より転載 57. 『MES 14』（MES クラブ、1961 年）より転載 58. 『MES 15』（MES クラブ、1962 年）より転載
59-60. 『VOU 84』（VOU クラブ、1962 年）より転載 61. 高知県立美術館所蔵 62. 1962 年 6 月 8 日付『高知新聞』紙面より転載 63. 『MES 16』（MES
クラブ、1962 年）より転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 8月14～19日、「第1回前衛土佐派展」(高知大丸)	64《マリンズノウ》	
	★ 10月、『VOU 86』に写真《op. 2》、《op. 2》が掲載される。	65《op. 2》 66《op. 2》	
	● 10月20日～11月4日、「第16回高知県展」(県民ホール、高知大丸)	洋画： 《不確定性空間》 写真： 《エントランス》	
	○ 11月25～30日、「高崎元尚個展」(樺画廊、東京)	67《作品 NO20》	
1963年／ 昭和38年／ 40歳	★ 1月、『VOU 87』に写真《op. 1》、《op. 2》が掲載される。	68《op. 1》 69《op. 2》	
	★ 2月10日発行の『MES 17』の表紙に写真(作題不詳)が掲載される。	70不詳	
	★ 3月、『VOU 88』に写真《op. 1》、《op. 2》が掲載される。	71《op. 1》 72《op. 2》	
	● 4月1～19日、「第13回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	73《作品 63-1》	

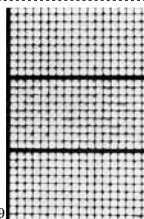
64. 1962年7月31日付『高知新聞』紙面より転載 65-66. 『VOU 86』(VOUクラブ、1962年)より転載 67. 1962年12月16日付『高知新聞』紙面より転載 68-69. 『VOU 87』(VOUクラブ、1963年)より転載 70. 『MES 17』(MESクラブ、1963年)より転載 71-72. 『VOU 88』(VOUクラブ、1963年)より転載 73. 高崎元尚の覚書より転載／高崎家提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 4月11～17日、「VOU クラブ展」 (MS 画廊、高知)	74《作品 NO1》	
	● 5月14～19日、「五月展」(MS 画廊、高知)		
	● 5月29日～6月4日、「高崎元尚・ 高野朗・宮地俊一郎三人展」(MS 画廊、高知)	75《作品 3》	
	● 8月6～11日、「第2回前衛土 佐派展」(高知大丸)	76《装置》	
	● 10月19日～11月3日、「第17 回高知県展」(県民ホール)	洋画：《装置》	
	○ 11月？～10日、「高崎元尚個展」 (笹画廊、高知)	77《装置・NO6》	
	● 11月12～17日、「県展洋画受 賞作家展」(笹画廊、高知)		
	○ 11月24～29日、「高崎元尚個展」 (樺画廊、東京)	《装置》9点 78,79 展示風景	
1964 年／ 昭和 39 年／ 41 歳	◎『藝術新潮 '64-1 月号』で 63 年 11 月に東京の樺画廊で行われた 高崎の個展の様子と出品した《装 置》について、テキストと写真 で紹介される。		
	◎『美術ジャーナル - 4 月号』で、 「土佐派」の特集が組まれ、高崎 自身によるテキストと、63 年 11 月の樺画廊で行った高崎の個展 風景の写真が掲載される。		

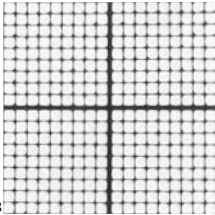
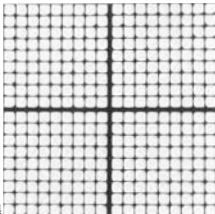
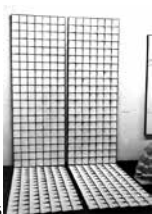
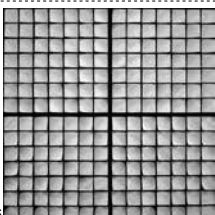
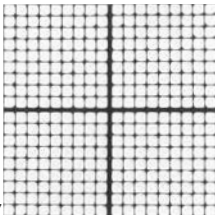
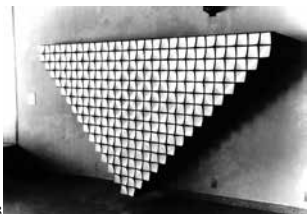
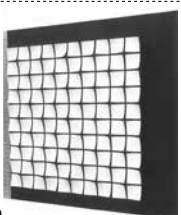
74. 1963 年 4 月 15 日付『高知新聞』紙面より転載 75. 1963 年 5 月 31 日付『高知新聞』紙面より転載 76. 『こんなアヴァンギャルド芸術があった！—
高知の 1960 年代—』(高知県立美術館、1997 年)より転載 77. 1963 年 11 月 10 日付『高知新聞』紙面より転載 78-79. 『ジャパン インテリア JAPAN
INTERIOR DESIGN no.12 3 月号』(ジャパン・インテリア社、1964 年)より転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	★ 4月1日発行の『MES 18』の表紙に前年11月の樺画廊での個展の展示風景の写真が掲載される。	80不詳〈展示風景写真〉	
	● 4月1～19日、「第14回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 81《装置》	
	● 6月30日～7月5日、「第1回土佐派選抜展」(笛画廊、高知)		
	★ 8月、『VOU 95』に写真《op. 1》、《op. 2》が掲載される。	82《op. 1》 83《op. 2》	
	● 8月19～23日、「第3回前衛土佐派展」(高知大丸)	《正方形》	
	● 10月31日～11月15日、「第18回高知県展」(県民ホール、高知)	洋画：《装置》	
	○ 12月7～12日、「高崎元尚個展」(樺画廊、東京)		
1965年／ 昭和40年／ 42歳	● 1月5～10日、「第16回選抜秀作美術展」(日本橋三越、東京)	84《装置》 〈「第14回モダンアート協会展」出品作と 同作〉 85展示風景	 
	● 3月3～12日、「galerie 16 異色四人展」(ギャラリー16、京都)	86展示風景	
	● 4月1～19日、「第15回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	絵画： 87《装置》	

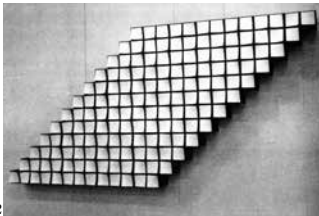
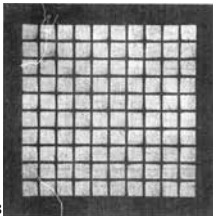
80. 『MES 18』(MESクラブ、1964年)より転載 81. 『第14回モダンアート協会展目録』(モダンアート協会、1964年)より転載／1996年の再制作品を京都国立近代美術館が所蔵 82-83. 『VOU 95』(VOUクラブ、1964年)より転載 84. 『1964年度選抜 秀作美術展陳列目録』(朝日新聞社、1965年)より転載 85-86. 高崎元尚／高崎家より提供 87. 1965年4月13日付『高知新聞』紙面より転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	★ 6月10日発行の『MES 19』の表紙に「装置」の写真が掲載される。	88不詳 〈装置シリーズ〉	88 
	● 6月18日～7月25日、「現代美術の動向 絵画と彫塑」(国立近代美術館京都分館〈現在の京都国立近代美術館〉、京都)	89《装置》 〈「第14回モダンアート協会展」出品作と同作〉	89 
	● 6月21～27日、「ヤンガーアート展」(MS画廊、高知)		
	● 8月10～19日、「岐阜アンデパンダン・アート・フェスティバル」(長良川河畔、岐阜市民センター、岐阜)		
	● 9月、「今日の欲望-100展」(モダンアート・センター・オブ・ジャパン、東京)		
	● 10月17～24日、「第3回ヤンガー・アート展」(MS画廊、高知)		
	● 11月5～14日、「第19回高知県展」(県民ホール、高知)	洋画：《アメリカ行き “装置”1号》	
	● 11月5～15日、「今日の作家'65年展」(横浜市民ギャラリー、神奈川)	《装置》11点 90,91 展示風景	90  91 
	● 12月4～12日、「第1回日本芸術祭国内展示」(国立近代美術館、東京)〈66年にニューヨークで開催の「第1回ジャパン・アート・フェスティバル」に出品予定の作品の国内展示〉	《装置》	
	★ 12月20日発行の『MES 20』の表紙に「装置」の写真が掲載される。	〈『MES 19』と同一の画像〉	
1966年／ 昭和41年／ 43歳	◎ 具体美術協会の会員となる。〈具体的な時期は定かではないが、同年の1～2月の間と考えられる〉		
	◎ 3月14～27日、渡米しニューヨークに滞在。「第1回ジャパン・アート・フェスティバル」などを見学する。		
	● 3月21日～4月23日、「第1回ジャパン・アート・フェスティバル」(ユニオン・カーバイド・ビル、ニューヨーク、アメリカ合衆国)	92 右《装置Ⅰ》 〈「第19回高知県展」出品作と同作〉 左《装置Ⅲ》	92 

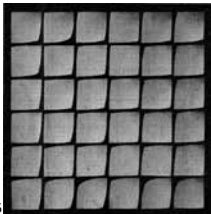
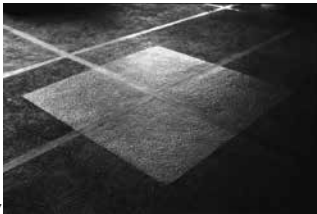
88.『MES 19』(MESクラブ、1965年)より転載 89.『現代美術の動向：絵画と彫塑』(国立近代美術館京都分館、1965年)より転載 90-92. 高崎元尚／高崎家より提供／92 右の1994年の再制作品を高知県立美術館が所蔵

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	★4月1日発行の『MES 21』の表紙に「装置」の写真が掲載される。	〈『MES 19』と同一の画像〉	
	●4月1～19日、「第16回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	93《装置 66-1》	93 
	★8月15日発行の『MES 22』の表紙に《装置 66-1》の写真が掲載される。	94《装置 66-1》 〈「第16回モダンアート協会展」出品作と同一の画像〉	94 
	●9月10～15日、「第17回具体美術展」(高島屋百貨店、横浜)	95《装置》	95 
	●10月15日～11月3日、「第20回高知県展」(県民ホール、高知)	洋画： 96《装置 66-6》	96 
	●11月1～6日、「第1回汎瀬戸内現代美術展」(岡山県総合文化センター、岡山)	《装置》	
1967年／ 昭和42年／ 44歳	★1月20日発行の『MES 23』の表紙に《装置 66-1》の写真が掲載される。	97《装置 66-1》 〈『MES 22』と同一の画像〉	97 
	◎3月、《装置》の立体作品が高知県銀行協会ビルエントランスに設置される。	98《装置》	98 
	●4月1～19日、「第17回モダンアート協会展」(東京都美術館、東京)	99《装置》	99 

93. 展覧会ハガキより転載 94. 『MES 22』(MES クラブ、1966 年)より転載 95. 高崎元尚／高崎家より提供／2003 年の再制作品を兵庫県立美術館が所蔵 96. 画像は香美市立美術館より提供／高知県立美術館所蔵 97. 『MES 23』(MES クラブ、1967 年)より転載 98. 高崎元尚／高崎家より提供／一般社団法人高知県銀行協会所蔵 99. 展覧会ハガキより転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	★4月20日発行の『MES 24』の表紙に《装置》の写真が掲載される。	100不詳 〈「装置」シリーズ。 「第17回モダンアート協会展」出品作 と同作か〉	
	●6月、「具体オーストリア展」(ガレリー・ハイデ・ヒルデブラント、クラーヴンフルト、オーストリア共和国)		
	●6月1～10日、「第18回具体美術展(具体美術新作展)」(グタイピナコテカ、大阪)		
	●8月13～20日、「南日本現代美術展」(高知県教育会館)〈前衛土佐派の企画。この展覧会の運営上のトラブルにより、前衛土佐派は実質的に瓦解した〉	101《装置》	
	●10月1～14日、「第19回具体美術展」(セントラル美術館、東京)	102《装置》	
	●7月1～20日、「第20回具体美術展」(グタイピナコテカ、大阪)		
	●10月21日～11月5日、「第21回高知県展」(県民ホール、高知)	洋画： 103《装置》	
1968年／ 昭和43年／ 45歳	●2月2～8日、「第7回県展選抜展」(東京都美術館、東京)		
	●2月6～11日、「神戸新聞平和賞芸術展」(大丸、神戸)〈この時点での具体美術協会全会員が出品〉		
	●10月19日～11月3日、「第22回高知県展」(県民ホール、高知)	洋画：《68-1》	
	●11月1～20日、「第21回具体美術展」(グタイピナコテカ、大阪)	104《密着》	

100. 『MES 24』(MESクラブ、1967年)より転載 101-102. 高崎元尚／高崎家より提供／102の2003年の再制作品を兵庫県立美術館が所蔵 103. 1967年11月1日付『高知新聞』紙面より転載 104. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 12月6～22日、「第2回現代美術大阪100人展」(画廊あの、信濃橋画廊、大阪)〈高崎を含む具体美術協会の会員20名が出品〉		
1969年／ 昭和44年／ 46歳	◎ 4月頃、高知大学教育学部講師を務める。〈～72年頃まで〉		
	● 4月頃、「Hommage an das Schweigen」展(沈黙に捧げる)展(チロルクンスト・パビリオン、インスブルック、オーストリア共和国)	105 不詳 〈「装置」シリーズ。 67年の「具体オーストリア展」出品作と 同作か〉	
	● 6月18～22日、「第21回高知市文化祭 総合美術展覧会」(県民ホール、高知)		
	● 7月24～29日、「第1回ヒロシマルネッサンス美術展」(広島県立美術館、広島)	《CURVED SQUARE 1》 106《CURVED SQUARE 2》	
	◎ 10月、「第23回高知県展」の立体の部の審査員を務める。〈この年に高知県展における前衛色の強い作品の受け皿として、洋画の部から立体の部が独立した。〉		
	● 10月18日～11月3日、「第23回高知県展」(県民ホール、高知)	立体： 107《密着》	
	★ 12月15日発行の『MES 29』の表紙に《密着》の写真が掲載される。	108《密着》 〈第23回高知県展に出品した《密着》の画像〉	
1970年／ 昭和45年／ 47歳	★ 3月15日発行の『MES 30』の表紙に《Installation View / midori pavillion》の写真が掲載される。	109《Installation View / midori pavillion》 〈万国博みどり館グタイグループ展示に出品した《密着》の画像〉	

105. 詳細不明の新聞紙面より転載 106-107. 高崎元尚／高崎家より提供
108. 『MES 29』より転載 (MES クラブ、1969年) 109. 『MES 30』(MES クラ

ブ、1970年)より転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 3月15日～9月13日、「万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグループ展示」（万国博みどり館エントランス、大阪）〈事実上の最後の具体展〉	100.111《ガーデン・オン・ガーデン》 〈111の四角の立体物が高崎のパート〉 112《密着》	  
	● 6月12～21日、「第22回高知市文化祭 - 総合美術展覧会」（高知県立郷土文化会館）		
	★ 6月30日発行の『MES 31』の表紙に高崎の写真が掲載される。	113 不詳	
	● 9月?～19日、「現代美術研究グループ集団個展」（笛画廊、高知） 〈高崎が中心となって企画。本展には高崎のほか、都築房子をはじめとした高知の当時の若手作家が出品した。以降「現代美術の実験」シリーズとして、メンバーを変えながら87年までこの企画は続く〉		
	◎ 10月、「第24回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10月17日～11月3日、「第24回高知県展」（高知県立郷土文化会館）〈立体部門の作品展示場所が屋外とロビーになる〉	立体： 114《カーブ CURVE》	
	● 10月27日～11月1日、「OCTOBER展」（笛画廊、高知） 〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 11月23～29日、「NOVEMBER展」（笛画廊、高知）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	★ 12月28日発行の『MES 32』の表紙に高崎の写真が掲載される。	不詳 〈『MES 31』と同一の画像〉	
	◎ モダンアート協会を退会する。		
1971年／昭和46年／48歳	○ 2月2日、「February」（笛画廊、高知）〈「現代美術の実験」シリーズ。一日だけの個展〉		
	○ 2月26日、「February II」（笛画廊、高知）〈「現代美術の実験」シリーズ。一日だけの個展〉		

110-112. 高崎元尚／高崎家より提供 113. 『MES 31』（MESクラブ、1970年）より転載 114. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 4月、「ミニアチュア'70・インタナショナル」(ギャラリー 66、フランクフルト、ドイツ連邦共和国)	《イメージ》 115 展示風景 〈中央やや右上、横並びになった黒い3点が高崎の作品。左の白い3点は松谷武判の作品〉	115 
	★ 4月8日発行の『創幻5』の表紙に高崎の写真が掲載される。	116 不詳	116 
	● 4月27日～5月2日、「April 展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ初のグループ展〉	117 不詳 〈布を用いた「密着」〉	117 
	● 5月10～30日、「第10回現代日本美術展」(東京都美術館、東京)	118,119 《密着》	118  119 
	● 6月26日～7月4日、「第23回高知市文化祭 市展」(高知県立郷土文化会館)〈「市展」に関しては、出品を裏付ける資料が確認できたもののみ掲載した〉		
	● 6月29日～7月11日、「June and July 展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ。高崎は6～11日に出品した(グループ展)〉	《Cloth Painting》	
	● 8月24～29日、「おねがい、見に来て!!」(電気ビル画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズから派生した企画〉		
	◎ 10月、「第25回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10月4日～16日、「グタイミニピナコテカ開設記念展」(グタイミニピナコテカ、大阪)	120 不詳 〈布を用いた「密着」〉	120 
	● 10月24日～11月7日、「第25回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体: 121 《侵蝕》	121 

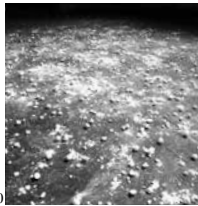
115. 撮影者不明／高崎家より提供 116. 『創幻5』(野島真一郎・創幻社、1971年)より転載 117. 高崎元尚／高知県立美術館所蔵 118-120. 高崎元尚／高崎家より提供 121. 高崎元尚(1972年の年賀状より転載)／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 10月26～31日、「October展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 12月21～26日、「December展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
1972年／ 昭和47年／ 49歳	● 2月8～13日、「February展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	○ 3月7～12日、「March展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ。個展〉		
	◎ 3月31日、吉原治良の死去にともない具体美術協会が解散。		
	● 4月4～9日、「April展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 5月9～14日、「May展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 6月6～11日、「June展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 7月1～9日、「第24回高知市文化祭・市展」(高知県立郷土文化会館)		
	● 8月1～6日、「August展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 9月5～10日、「September展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉	122 不詳	
	● 10月3～8日、「October展」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	◎ 10月、「第26回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10月21日～11月5日、「第26回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 123-126《プレゼント》	   

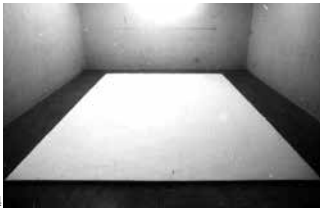
122-126. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1973 年／ 昭和 48 年／ 50 歳	● 11 月 7 ～ 12 日、「November 展」 (笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉	127,128 不詳	  127 〈上部の金網は都築房子の作品〉 128
	○ 12 月 12 ～ 17 日、「高崎元尚展 "LANDSCAPE"」(ギャラリー 16、京都)	129-132 《LANDSCAPE》	  129 130
			  131 132
	● 12 月 12 ～ 17 日、「December 展」 (笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 2 月 6 ～ 11 日、「February 展」(笛 画廊、高知)〈「現代美術の実験」 シリーズ〉		
	● 3 月 6 ～ 11 日、「March 展」(笛 画廊、高知)〈「現代美術の実験」 シリーズ〉		
	● 4 月 10 ～ 15 日、「April 展」(笛 画廊、高知)〈「現代美術の実験」 シリーズ〉		
	● 5 月、「May 展」(笛画廊、高知) 〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 6 月 3 ～ 10 日、「第 25 回高知市 文化祭・市展」(高知県立郷土文 化会館)		
	● 6 月 12 ～ 17 日、「June 展」(笛 画廊、高知)〈「現代美術の実験」 シリーズ〉		
	● 7 月、「July 展」(笛画廊、高知) 〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	◎ 10 月、「第 27 回高知県展」の立 体の部の審査員を務める。		
	● 10 月 6 ～ 21 日、「第 27 回高知 県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《組織的な破壊》	
	● 10 月 22 ～ 28 日、「7 / 365 × 11 = 展 (今日の方法)」(京都市 美術館、京都)	133 《COLLAPSE》 〈素材はコンクリー トブロック〉	 133

127-133. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 11月6～11日、「第3回汎瀬戸内現代美術展」(岡山県総合文化センター、岡山) ○ 12月4～9日、「高崎元尚展」(ギャラリー 16、京都)	134《COLLAPSE》 〈素材はコンクリートブロック〉	
1974年／ 昭和49年／ 51歳	● 3月1～3日、「March 展」(高知市中央公民館)〈「現代美術の実験」シリーズ〉	135《測定》 〈以下の順序で試みられたパフォーマンス。1 室内の一点より壁に向かって石を投げる、2 それぞれの石に煉瓦を併置する、3 煉瓦を一撃にて破壊する〉	
	● 6月15～23日、「第26回高知市文化祭 - 第26回市展」(高知県立郷土文化会館)	136.137 不詳 〈作家の覚書には以下のようにある。「これは、瓦礫が土に返るまで、如何に均質に破壊し続けることが出来るかという、私的な実験である」〉	 
	● 9月7～13日、「今日の方法 74」展 (京都市美術館、京都)	138-140 《ゴルフボールの使い方》	  
	◎ 10月、「第28回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10月18日～11月4日、「第28回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 141-143 《無形へ》 〈素材は石膏板〉	  

134-143. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像	
	○ 12 月 10 ～ 15 日、「高崎元尚展」 (ギャラリー 16、京都)	144-146 《LANDSCAPE》	 144	 145
			 146	
1975 年／ 昭和 50 年／ 52 歳	● 6 月 22 ～ 29 日、「第 27 回 高知 市文化祭・第 27 回市展」(高知県 立郷土文化会館)	立体： 147,148 《Collapse》 〈素材は波型スレー トと透明板。詳細は 不詳だが、各透明 板には Collapse の 文字と共に、以下 の表記がみられる。 6月22日Cambodia/ 6月24日Vietnam/ 6月25日Thailand/ 6月26日Korea/6月 27日Japan/6月28日 U.S.A〉	 147	 148
	● 9 月 24 日～ 10 月 5 日、「第 4 回 汎瀬戸内現代美術展」(岡山県総 合文化センター、岡山)	149 《COLLAPSE》	 149	
	◎ 10 月、「第 29 回高知県展」の立 体の部の審査員を務める。			
	● 10 月 17 日～ 11 月 3 日、「第 29 回高知県展」(高知県立郷土文化 会館)	立体： 《Collapse (崩壊)》		
	○ 12 月 9 ～ 14 日、「高崎元尚個 展 現代美術の崩壊」(ギャラリー 16、京都)	150-153 《COLLAPSE 現代美術の崩壊》	 150	 151
			 152	 153

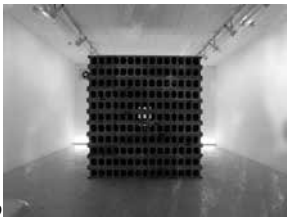
144-146. 高崎元尚／高崎家より提供 147-48. 高崎元尚／高知県立美術館所蔵 149-153. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1976 年／ 昭和 51 年／ 53 歳	● 2 月 10 ～ 20 日、「〈コラージュとフロッターージュ〉展」(ギャラリー 16、京都)		
	● 3 月 2 ～ 7 日、「現代美術の実験」(金高堂ギャラリー、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 4 月 26 日～5 月 2 日、「現代美術の実験」(笛画廊、高知)〈「現代美術の実験」シリーズ。この企画を最後に笛画廊が閉廊〉		
	● 5 月 30 日～6 月 6 日、「第 28 回高知市文化祭 第 28 回市展」(高知県立郷土文化会館)	立体：《TREE》	
	◎ 10 月、「第 30 回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10 月 15 日～11 月 3 日、「第 30 回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 154 《モニュメント 76》	
	● 11 月 2 ～ 14 日、「具体美術の 18 年」(大阪府民ギャラリー、大阪)		
1977 年／ 昭和 52 年／ 54 歳	○ 12 月 7 ～ 12 日、「高崎元尚展 TREE」(ギャラリー 16、京都)	155 《TREE》 〈素材は青桐〉	
	● 6 月 19 ～ 26 日、「第 29 回高知市文化祭・第 29 回市展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《An art sale》 《TREE No.3》	
	◎ 10 月、「第 31 回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10 月 14 日～11 月 3 日、「第 31 回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《holding screen in nature》	
	● 10 月 26 日～11 月 6 日、「第 5 回汎瀬戸内現代美術展」(岡山県総合文化センター、岡山)		
	○ 12 月 6 ～ 11 日、「高崎元尚展 "tree"」(ギャラリー 16、京都)	156 《TREE》	

154. 高崎元尚／高崎家より提供 155. 高崎元尚／高知県立美術館所蔵 156. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1978 年／ 昭和 53 年／ 55 歳	● 2 月 4 ～ 26 日、「アート・ナウ '78」 (兵庫県立近代美術館、兵庫)	157《Tree》 158.159《Collapse》	 157 〈設置中+か〉  158  159
	● 3 月 18 ～ 26 日、「第 3 回高知県 展選抜作家展」(高知県立郷土文 化会館)		
	● 4 月 5 ～ 9 日、「現代美術の実験展」 (高知市立中央公民館)〈「現代美 術の実験」シリーズ〉		
	● 6 月 18 ～ 25 日、「第 30 回 高知 市文化祭・第 30 回高知市展」(高 知県立郷土文化会館)	立体： 160《I am stauding B》 〈原文ママ〉	 160
	● 8 月 9 日～ 13 日、「現代美術の 実験展」(高知市立中央公民館) 〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	◎ 10 月、「第 32 回高知県展」の立 体の部の審査員を務める。		
	● 10 月 14 日～ 11 月 3 日、「第 32 回高知県展」(高知県立郷土文化 会館)	立体： 161《Collapse》	 161
	● 11 月 8 ～ 12 日、「現代美術の実 験展」(高知市立中央公民館)〈「現 代美術の実験」シリーズ〉		
	○ 12 月 5 ～ 10 日、「高崎元尚展」 (ギャラリー 16、京都)	162.163《LANDSCAPE》 〈素材は特注のコン クリート角柱〉	 162  163

157-163. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1979 年／ 昭和 54 年／ 56 歳	● 1 月 5 ～ 28 日、「特別展・吉原治良と具体のその後」(兵庫県立近代美術館〈現在の兵庫県立美術館〉、兵庫)	164《COLLAPSE》	
	● 2 月 6 ～ 10 日、「現代美術の実験展」(高知市立中央公民館)《「現代美術の実験」シリーズ》		
	○ 4 月 16 ～ 21 日、「高崎元尚個展 COLLAPSE」(朝ギャラリー、大阪)	165《Landscape》 〈素材は素焼きの粘土をギプスで包んだ特製ボール。高崎の覚書には以下のようにある。「床の凹凸に着目し転がして位置を決める」〉	
	● 6 月 10 ～ 17 日、「第 31 回高知市文化祭 - 第 31 回市展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 166《CollapSe》 〈原文ママ〉	
	● 8 月 22 ～ 26 日、「現代美術の実験展」(高知市立中央公民館)《「現代美術の実験」シリーズ》	《乱数表による配置》	
	◎ 10 月、「第 33 回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10 月 13 日～11 月 4 日、「第 33 回高知県展」(高知県立郷土文化会館、高知県教育会館)	立体： 167,168《Why 200kg?》 写真： 《作品の記録 A》 〈74 年にギャラリー 16 で発表した《LANDSCAPE》の破壊過程を撮影したもの〉	 
	○ 12 月 4 ～ 9 日、「高崎元尚展」(ギャラリー 16、京都)	169-171《立方体から円錐へ》	  

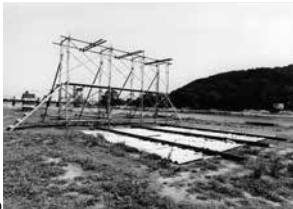
164-171. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
1980 年／ 昭和 55 年／ 57 歳	● 3 月、県展代表作家展（高知県立郷土文化会館）	172,173 不詳	 
	● 4 月 23～27 日、「現代美術の実験」（高知市立中央公民館）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 4 月 24 日～5 月 9 日、「第 13 回日本国際美術展」（東京都美術館）〈高崎は「国内部門（公募）」＝80 年代の個人と社会」の平面部門で入選。〉		
	● 6 月 8～15 日、「第 32 回高知市文化祭・第 32 回市展」（高知県立郷土文化会館）	立体： 174《Landscape 1》	
	● 8 月 13～17 日、「現代美術の実験」（高知市立中央公民館）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	◎ 10 月、「第 34 回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10 月 10～11 月 2 日、「第 34 回高知県展」（高知県立郷土文化会館）	立体： 175《TREE》 〈素材は勤務先の土佐高等学校で立ち枯れていたメタセコイアの巨木〉	
	● 11 月 13～18 日、「現代美術の実験」（松浦屋画廊、高知）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
1981 年／ 昭和 56 年／ 58 歳	○ 12 月 9～14 日、「高崎元尚展 -tree-No.5」（ギャラリー 16、京都）	176《TREE No.5》	
	● 2 月 19～25 日、「現代美術の実験 -「重力に関する 10 人の考察。」」（松浦屋画廊、高知）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 5 月 13～17 日、「現代美術の実験」（高知市立中央公民館）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		

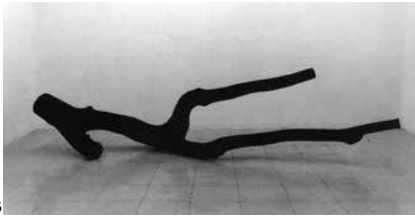
172-176. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 6月13～21日、「第33回高知市文化祭・第33回市展」（高知県立郷土文化会館、高知県立図書館）	立体： 177《レンガの破壊》 〈素材は鏡とレンガ〉 178.179《コンクリートブロック発射台》	  
	● 8月20～30日、「野外彫刻展高知1981」（高知市丸ノ内緑地）	180.181 不詳	 
	◎ 10月、「第35回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10月9日～11月1日、「第35回高知県展」（高知県立郷土文化会館）	立体： 182《砂上の楼閣》	
	● 10月21日～11月1日、「第7回汎瀬戸内現代美術展」（岡山県総合文化センター、岡山）		
	○ 12月8～13日、「高崎元尚展」（ギャラリー16、京都）	183.184《LANDSCAPE -1/2×1/2》 〈素材はレンガ〉	 
1982年／ 昭和57年／ 59歳	● 1月20～24日、「現代美術の実験'82-1・写真」（高知市立中央公民館）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 5月17～23日、「NHKロビー展・現代美術の実験」（NHK高知放送局ロビー）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	○ 5月31日～6月12日、「高崎元尚個展」（靱ギャラリー、大阪）	185《Landscape》 〈素材は鉄管と波型スレート〉	

177-185. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 6月24日～7月4日、「第34回高知市文化祭 第34回市展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 186-188 《ふみえ》	  
	● 7月15～20日、「現代美術 27人の実験-What? 1982」(高知大丸東館ビーコックホール)《「現代美術の実験」シリーズ》		
	● 8月20～30日、「野外彫刻展高知-1982」(高知市鏡川緑の広場)	189,190 不詳	 
	◎ 10月、「第36回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10月15日～11月7日、「第36回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 191《砂の上》	
	○ 12月7～12日、「高崎元尚展」(ギャラリー16、京都)	192《LANDSCAPE》	
1983年／ 昭和58年／ 60歳	● 1月25～30日、「現・代・美・術・の・実・験」(高知市立中央公民館)《「現代美術の実験」シリーズ》		
	● 6月16日～26日、「第35回高知市文化祭 第35回市展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《Land Scape》 《Land Scape (鏡)》 《Land Scape (雨)》 《Land Scape (女)》	
	● 5月12～17日、「無名展 EXPERIMENT'83」(リブロード4F 催事場、高知)		

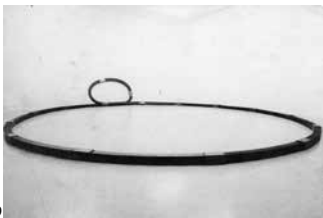
186-192. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 8月20～30日、「野外彫刻展高知-1983」（高知市鏡川緑の広場）	193,194《TREE/WOMAN》 〈勤務先で伐採された植木を貰い受け、燃やして表面を炭化させた〉	 
	● 10月14日～11月6日、「第37回高知県展」（高知県立郷土文化会館）	招待：《Burning》	
	● 10月26日～11月6日、「第8回汎瀬戸内現代美術展」（岡山県総合文化センター、岡山）		
	○ 12月6～11日、「高崎元尚個展 TREE / WOMAN」（ギャラリー16、京都）	195《Tree-woman》	
1984年／ 昭和59年／ 61歳	● 4月4～9日、「現代美術の実験展」（リブロード5F 催事場、高知） 〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 6月12日～17日、「第36回高知市文化祭 第36回市展 後期」（高知県立郷土文化会館）	立体： 《正方形の製造》 《立方体の変形 No.2》 196《立方体の変形 No.3》	
	● 7月7～12日、「現代美術の実験」（高新画廊、高知）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 8月20～30日、「野外彫刻展高知'84」（高知市丸ノ内緑地）	《The impotence of an erected cube》	
	● 10月12日～11月4日、「第38回高知県展」（高知県立郷土文化会館）	立体： 《Planted on the iron field》	
	○ 12月4～9日、「高崎元尚展」（ギャラリー16、京都）	197《The Impotence of an Erected Prism》	
1985年／ 昭和60年／ 62歳	○ 1月3～13日、「現代美術の実験-高崎元尚展」（ギャラリーZUMZUM、高知）〈「現代美術の実験」シリーズ。個展〉		
	● 1月23～27日、「現代美術の実験」（高知市立中央公民館）〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 3月23～28日、「現代美術の実験」（高新画廊、高知）〈「現代美術の実験」シリーズ〉	《Flat Cube》	

193-197. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 4月18～21日、「現代美術の実験」(リプロード5F 催事場、高知) 〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 5月29日～6月1日、「現代美術の実験・木」(高知大丸東館ピーコックホール) 〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 6月25日～30日、「第37回高知市文化祭 第37回市展 前期」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《立方体ー借景》 《ぐじゃり構造》	
	● 7月15～20日、「現代美術の実験」(夜須町公民館ロビー、高知) 〈「現代美術の実験」シリーズ〉	《ぐじゃり構造》	
	● 8月15～19日、「現代美術三人展ー時空遊ー」(高知大丸東館ピーコックホール) 〈吉田稔郎、今井祝雄とのグループ展〉	《Tree-women》 《ハフの立方体》 《グジャリ構造》	
	◎ 10月、「第39回高知県展」の立体の部の審査員を務める。		
	● 10月11日～11月3日、「第39回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《黄色の対角線》	
	○ 12月17～22日、「高崎元尚展」(ギャラリー16、京都)	198《立方体の不能》	
1986年／ 昭和61年／ 63歳	● 2月27日～3月9日、「1986-京都アンデパンダン展」(京都市美術館、京都)		
	● 3月29日～4月3日、「現代美術の実験」(高新画廊、高知) 〈「現代美術の実験」シリーズ〉		
	● 6月24日～29日、「第38回高知市文化祭 第38回市展 前期」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《インポテンス (A)》	
	● 7月5～10日、「NEW AREA 南国展 (香川・高知交流展)」(高新画廊、高知)		
	○ 8月23日～9月4日、「元気が出るアート-なにがなんでも、アクションじゃ!」(ギャラリー・アベニュー、高知)		
	● 10月5日～12月14日、「現代の白と黒」(埼玉県立近代美術館、埼玉)	《装置》	
	● 10月6～11日、「eight・9・展」(大阪府立現代美術センター、大阪)		
	● 10月10日～11月3日、「第40回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《立方体の不能》	

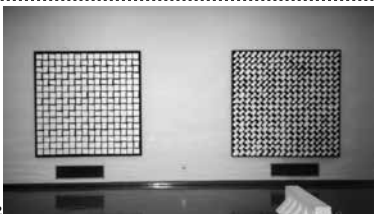
198. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	○ 12月9～14日、「高崎元尚展」 (ギャラリー 16、京都)	199 不詳	
1987 年／ 昭和 62 年／ 64 歳	● 2月26日～3月8日、「1987-京 都アンデパンダン展」(京都市美 術館、京都)	《不能》 〈黒いゴム棒を金具 留めたもの〉	
	● 6月1～13日、「現代美術の実 験-インスタレーション」(高知 電気ビル)〈「現代美術の実験」 シリーズ最後の企画〉		
	● 6月9日～4日、「第39回高知 市文化祭 第39回市展 前期」(丸 の内緑地)		
	● 7月21～26日、「フリーアート ミーティング'87」(愛媛県立美 術館、愛媛)	200《立方体の不能》	
	○ 8月24～29日、「高崎元尚展」(村 松画廊、東京)		
	◎ 10月、「第41回高知県展」の立 体の部の審査員を務める。		
	● 10月9日～11月1日、「第41 回高知県展」(高知県立郷土文化 会館)	立体： 201《立方体のうらが えし》	
	○ 12月8～20日、「高崎元尚展」 (ギャラリー 16、京都)	《不能》	
1988 年／ 昭和 63 年／ 65 歳	● 3月17～31日、「ポリクロスア ート'88」(高知県立郷土文化会館)		
	◎ 3月31日、定年のため土佐高等 学校を退職する。		
	● 4月24日～5月29日、「瀬戸大 橋架橋記念野外彫刻展」(高松市 中央公園、香川)	202《立方体の不能》	
	● 6月7～12日、「第40回高知市 文化祭 第40回市展 前期」(高 知県立郷土文化会館、丸ノ内緑地)	立体： 《立方体の不能》	
	● 10月7日～11月3日、「第42 回高知県展」(高知県立郷土文化 会館)	立体： 《HARAKIRI》	

199-200. 高崎元尚／高崎家より提供 201. 1987 年 12 月のギャラリー 16 の個展 DM より転載 202. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 10月23～31日、「アート・エナジー-これが芸術か!?展」(高知総合倉庫)		
	● 11月8日～12月4日、「INO 紙のこぼ展」(いの町紙の博物館、高知)		
	○ 12月6～11日、「高崎元尚展-HIRAKIRI」(ギャラリー16、京都)	203 不詳	 203
1989年／ 昭和64年・ 平成元年／ 66歳	● 2月4～26日、「現代絵画の一面-くり返しの構造展」(高松市美術館、香川)	《装置》	
	● 5月18日～6月4日、「ポリクロスアート2展」(高知県立郷土文化会館)		
	○ ?～5月20日、「高崎元尚個展」(ギャラリーズムズム、高知)	《作品-1963》 《装置-1964》	
	● 6月13日～18日、「第41回高知市文化祭 第41回市展 前期」(高知県立郷土文化会館、丸ノ内緑地)	立体： 204-206《重力による作品 No.1 No.2 No.3》	 204  205
	● 7月11～23日、「BACK AND FORTH - 2 高崎元尚・野村耕・三島喜美代 1960年代のカラージュ」(ギャラリー16、京都)		 206
	● 10月13日～11月5日、「第43回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体： 《falling body》	
	● 11月14日～12月9日、「第2回 INO 紙のこぼ展」(いの町紙の博物館、高知)	207 不詳	 207
1990年／ 平成2年／ 67歳	● ?～4月1日、「春の常設展 - 現代美術を中心として」(北九州市立美術館、福岡)	《装置》	
	● 7月10～15日、「第42回高知市文化祭 第42回市展 前期」(高知県立郷土文化会館、丸ノ内緑地)	立体： 《60年代の再制作A》 《60年代の再制作B》 《60年代の再制作C》	

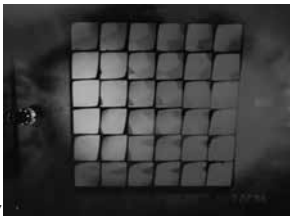
203-207. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 9月29日～10月14日、「第5回国民文化祭協賛・西瀬戸現代美術展」(愛媛県立美術館、愛媛) ● 10月12日～11月4日、「第44回高知県展」(高知県立郷土文化会館) ● 11月6日～12月1日、「第3回INO紙のこば展」(いの町紙の博物館、高知) ● 11月27日～12月26日、「ニューエリア熱き芸術家たち 明日への視線 高知24人展」(中土佐町立美術館、高知)	立体:《循環する形》	
1991年／ 平成3年／ 68歳	○ 3月1～10日、「個展－60年代の再制作」展 (ギャラリー風、高知)	208,209 展示風景	 208  209
	● 7月23日～8月4日、「第43回高知市文化祭 第43回市展」(高知県立郷土文化会館、丸の内緑地)	立体: 210《装置 APPARATUS》	 210
	● 8月7～11日、「ニューエリア熱き芸術家たち展」(高知県立郷土文化会館)		
	● 10月11日～11月4日、「第45回高知県展」(高知県立郷土文化会館)	立体: 211《作品・水・空気・鉄》	 211
	● 12月3～7日、「風の中の立体たち」(高知市中央公園)		
	● 12月10～20日、「ポリクロスアート'91 現代美術展覧会」(高知県立郷土文化会館)	212 展示風景	 212
	◎高知県展の功労者として表彰を受ける。		
1992年／ 平成4年／ 69歳	● 2月1日～3月29日、「具体美術協会の作家たち」(宮城県美術館、宮城)		

208-212. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 3月8日～4月12日、「第3回丸亀野外彫刻展」(JR丸亀駅前他、香川)	213《装置 - 水と空気と鉄》	213 
	● 6月23日～7月5日、「第44回高知市文化祭 第44回市展」(高知県立郷土文化会館、丸ノ内緑地)	立体： 《hanging》 《相似》	
	● 9月22日～10月4日、「第46回高知県展・前期」(高知県立郷土文化会館)	立体： 214《FLOATING - 体積は同じ》	214 
	● 10月30日～11月3日、「ニューエリア熱き芸術家たち展」(須崎市ライフタウン YUTAKA、高知)		
1993年／ 平成5年／ 70歳	● 6月19日～7月18日、「具体展Ⅲ -1965 - 1972」(芦屋市立美術館、兵庫)	《装置 66-3》 《装置 67-1》 《CURVED SQUARE 1》 《密着》	
	● 9月16～25日、「ポリクロスアート'93展」(高知県立郷土文化会館)		
	● 12月3～26日、「第47回高知県展」(高知県立美術館)	立体： 《装置 93-箱》	
	◎土佐山田町立美術館〈現在の香美市立美術館〉に壁画及びモニュメントを制作する。		
1994年／ 平成6年／ 71歳	● 6月8日～19日、「第46回高知市文化祭 第46回市展」(高知県立美術館)	立体： 《装置 94-A》 《装置 94-B》	
	● 9月30日～10月10日、「第48回高知県展・前期」(高知県立美術館)	立体：《装置》	
	◎11月28日、高知県立美術館の製作による映画「天国の六つの箱 HEAVEN-6-BOX」(1995)のため、高崎がハンマーをふるパフォーマンス《測定》の様子が収録される。監督・撮影は映像作家・映画監督の太木裕之。	215 《測定》の様子	215 
1995年／ 平成7年／ 72歳	● 2月16日～3月19日、「TOSA-TOSA'95 クールの時代 美術のノイズ・ミュージック」(高知県立美術館)	216《COLLAPSE》	216 
	● 5月16～28日、「第47回高知市文化祭 第47回市展」(高知県立美術館)	立体： 《装置 95-M》	
	● 10月5～17日、「第49回高知県展・前期」(高知県立美術館)	立体： 《装置95-S(おみあい)》	

213-214. 高崎元尚／高崎家より提供 215. 撮影者不明／高崎家より提供 216. 『高崎元尚新作展—破壊 COLLAPSE—』(高知県立美術館、2017年)より転載

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	◎ 10 月、高知県文化賞受賞。		
1996 年／ 平成 8 年／ 73 歳	● 3 月 31 日～4 月 14 日、「県展 50th・高知新聞企業 30th 記念 なつかしの県展」(高知県立美術館)	立体： 《装置 95-S (おみあい)》	
	● 6 月 11 日～23 日、「第 48 回高知市文化祭 第 48 回市展」(高知県立美術館)	立体： 《作品はどこ？》	
	○ 7 月 11～25 日、「第 46 回 高知県文化賞受賞記念 高崎元尚展」(GALLERY 星ヶ岡アートヴィレッジ、高知)	217 不詳 《「装置」に朱と緑のライトをあてている》	
	● 9 月 26 日～10 月 7 日、「第 50 回高知県展・前期」(高知県立美術館)	立体： 《装置 - 朱と緑をみる》	
1997 年／ 平成 9 年／ 74 歳	● 2 月 8 日～3 月 23 日、「TOSA-TOSA'97 こんなアヴァンギャルド芸術があった！ 高知の 1960 年代」展 (高知県立美術館)		
	● 5 月 13 日～25 日、「第 49 回高知市文化祭 第 49 回市展」(高知県立美術館)	立体： 《ベーター・クーベルカを見た》	
	○ 6 月 26 日～7 月 2 日、「高崎元尚展」(アトリエ倫加、高知)		
	● 10 月 22 日～11 月 3 日、「第 51 回高知県展・前期」(高知県立美術館)	立体：《装置 97》	
	○ 11 月 8～22 日、「高崎元尚展」(LADS GALLERY、大阪)		
	● 12 月 6 日～1998 年 2 月 22 日、「高崎元尚・小原義也 現代美術展」(土佐山田町立美術館、高知)		
1998 年／ 平成 10 年／ 75 歳	● 5 月 19～31 日、「第 50 回高知市文化祭 第 50 回市展」(高知県立美術館)	立体：《装置 98M》	
	○ 3 月 3～15 日、「高崎元尚個展」(すろおが 463、岡山)		
	● 9 月 23 日～10 月 5 日、「第 52 回高知県展・前期」(高知県立美術館) (9 月 25 日以降は豪雨水害のため中止となった)	立体：《黒い丸》	
1999 年／ 平成 11 年／ 76 歳	● 1 月 29 日～2 月 7 日、「県展前期復活展」(高知県立美術館)		
	● ?～3 月 22 日、「ポリクロスアート展」(高知公園)	218 不詳	
	● 5 月、すろおが 463 (岡山) で大木裕之と高崎の作品を用いたコラボレーション展示を行う。		

217. 撮影者不明／高崎家より提供 218. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 6月9～20日、「第51回高知市文化祭 第51回市展」(高知県立美術館)	先端美術： 219《Parasite (寄生するアート)》	
	○ 8月23～29日、「EXHIBITION -装置- 高崎元尚展」(宮武画廊、香川)		
	● 9月23日～10月4日、「第53回高知県展・前期」(高知県立美術館)	立体：《装置 99》	
2000年／ 平成12年／ 77歳	● 6月20日～7月2日、「第52回高知市文化祭 第52回市展」(高知県立美術館)	先端美術： 《立体の条件》	
	● 6月22日～7月24日、「[装置] -[波動-II] 高崎元尚・松谷武判展 -時代を駆け抜けた作家-」(ギャラリーアコスタージュ、香川)	220 展示風景	
	● 9月27～10月8日、「第54回高知県展・前期」(高知県立美術館)	立体： 《装置 2000 C》	
2001年／ 平成13年／ 78歳	● 2月24日～3月25日、「大阪市立近代美術館(仮称)コレクション展 2001 美術パノラマ・大阪」(ATC ミュージアム、大阪)		
	● 6月6～17日、「第53回高知市文化祭 第53回市展」(高知県立美術館)	先端美術： 《100の立方体》	
	● ?～8月5日、「WASHI・TEN- 高知のアーティストたちの仕事」(GALLERY 星ヶ岡アートヴィレヅ、高知)		
	● 10月10～21日、「第55回高知県展・前期」(高知県立美術館)	立体： 《なにもしない》	
	● ?～12月25日、「クリスマスアートキューブコレクション」(グラフィティ、高知)		
2002年／ 平成14年／ 79歳	○ 3月20日～4月1日、「なにもしない a response to 9/11」(グラフィティ、高知)		
	● 4月7日～21日、「第54回高知市文化祭 第54回市展」(高知市文化プラザかるぼーと)	先端美術： 《Twin Tower》	
	○ 6月11～20日、「装置 高崎元尚」(Galeria punto、岡山)		
	○ 7月13～27日、「高崎元尚展」(ギャラリー AO、兵庫)		

219-220. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 10月18日～11月4日、「第56回高知県展」(高知県立美術館) ○ 11月26日～12月1日、「高崎元尚作品・カレンダー展」(アトリエ倫加、高知)	立体： 221《Twin Tower》	 221
2003年／ 平成15年／ 80歳	● ?～5月24日、「アーティスト・ブック展」(nBox、高知) ● 6月7日～22日、「第55回高知市文化祭 第55回市展」(高知市文化プラザかるぽーと) ● 8月22日～9月28日、「開館10周年記念-高知の美術150年の100人展」(高知県立美術館) ● 10月10～26日、「第57回高知県展」(高知県立美術館) ○ 12月10～15日、「結成50周年記念「具体」回顧展-高崎元尚展」(グラフィティ、高知)	先端美術： 《Twin Towers》 立体：《装置03》	
2004年／ 平成16年／ 81歳	● 1月24日～3月14日、「「具体」回顧展」(兵庫県立美術館、兵庫) ● 6月5日～20日、「第56回高知市文化祭 第56回市展」(高知市文化プラザかるぽーと) ○ 7月17～31日、「高崎元尚展」(ギャラリー AO、兵庫) ● 10月8～24日、「第58回高知県展」(高知県立美術館)	先端美術：《装置》 立体：《装置04》	
2005年／ 平成17年／ 82歳	● 5月14日～6月12日、「土佐山田町立美術館第67回企画展-物部川流域-森と水と風のアートフェスティバル-5人のアーティスト展」(土佐山田町立美術館、高知) ● 7月16日～11月3日、「平成17年度 兵庫県立美術館 コレクション展Ⅱ」(兵庫県立美術館、兵庫) ○ 8月16～28日、「高崎元尚展」(Galeria punto、岡山) ● 10月7～23日、「第59回高知県展」(高知県立美術館)	立体：《装置(崩壊)》	
2006年／ 平成18年／ 83歳	● 5月27日～6月11日、「第58回高知市文化祭 第58回市展」(高知市文化プラザかるぽーと) ● 8月29日～9月10日、「無鑑査作家展 土佐の美—未来へ 第二期」(高知市文化プラザかるぽーと) ● 9月29日～10月22日、「第60回高知県展」(高知県立美術館) ○ 11月18～28日、「高崎元尚展」(ギャラリー AO、兵庫)	先端美術： 《装置 黒と白》 立体：《装置2006》	

221. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
2007 年／ 平成 19 年／ 84 歳	● ?～5月27日、「モノクローム展」 (COMO SALON、高知)		
	● 9月28日～10月22日、「第61 回高知県展」(高知県立美術館)	立体：《いきもの》	
2008 年／ 平成 20 年／ 85 歳	● 5月24日～6月8日、「第60回 高知市文化祭 第60回市展」(高 知市文化プラザかるぽーと)	先端美術： 《イキモノ 白・黒》	
	● 7月1～6日、「第15回県美術 家協会展」(高知市文化プラザか るぽーと)		
	● 10月3～19日、「第62回高知 県展」(高知県立美術館)	立体： 222《いきもの》	
	○ 11月16～30日、「高崎元尚展」 (ギャラリー AO、兵庫)	223《いきもの》	
2009 年／ 平成 21 年／ 86 歳	● 3月8日～4月5日、「市民とつ くる展覧会 - 高知アートネット プロジェクト - 戦後高知の美術 シーン」(高知県立美術館)		
	● ?～4月19日、「モノクローム展」 (COMO SALON、高知)		
	● 5月30日～6月14日、「第61 回高知市文化祭 第61回市展」(高 知市文化プラザかるぽーと)	先端美術： 《装置 2009-3》	
	● 8月22日～9月27日、「コレク ション展2 - もっと知りたい!」 (芦屋市立美術館、兵庫)		
	● 10月9～25日、「第63回高知 県展」(高知県立美術館)	立体： 224《装置 200Q》	
2010 年／ 平成 22 年／ 87 歳	○ 4月29日～5月9日、「高崎元 尚展」(LADS ギャラリー、大阪)		
	● 4月29日～6月20日、「かたち のちから - 高度成長期の美術篇 [大阪市立近代美術館コレクション を中心に]」展(大阪市立近代 美術館(仮称)心斎橋展示室、 大阪)	《装置 67》	

222-224. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 5月29日～6月13日、「第62回高知市文化祭 第62回高知市展」(高知市文化プラザかるぽーと)	先端美術： 《装置の爆発（爆発のイベントは13日午後3時予定）》〈会期中に作品を爆破させるイベントを行った（爆発は失敗した）〉	
	● 10月8～24日、「第64回高知県展」(高知県立美術館)	立体： 225《対角線》	
2011年／ 平成23年／ 88歳	● 3月26日～7月3日、「伊藤文化財団設立30年記念—寄贈作品の精華」(兵庫県立美術館、兵庫)		
	● 5月25日～6月6日、「高崎元尚×川崎康為-現代アートの継承」(グラフィティ、高知)		
	● 5月28日～6月12日、「第63回高知市文化祭 第63回市展」(高知市文化プラザかるぽーと)	先端美術： 《風船による 限界体験イベント（毎日曜日 午後2時3階ギャラリーにて小中学生歓迎）》	
	○ 6月1～26日、「現代アート展-高崎元尚」(現代っ子ミュージアム、宮崎)		
	● 9月13日～11月6日、「機械とわたし」(福岡市美術館、福岡)		
	● 10月7～23日、「第65回高知県展」(高知県立美術館)〈この年から「立体の部」の名称が「先端美術の部」へと改称した〉	先端美術： 226《しほんだま》	
	◎ 11月、第29回高知ベンクラブ賞を受賞。		
2012年／ 平成24年／ 89歳	● 3月8～25日、「コレクションの愉しみ」(高松市塩江美術館、香川)		
	● 5月26日～6月10日、「第64回高知市文化祭 第64回市展」(高知市文化プラザかるぽーと)	先端美術： 《しほんだま》	
	● 7月4日～9月10日、「『具体』ニッポンの前衛 18年の軌跡」(国立新美術館、東京)		
	● 8月2～14日、「M・I展」(沢田マンションギャラリー room38、高知)		
	● 10月5～21日、「第66回高知県展」(高知県立美術館)	先端美術： 《しほん玉》	
	● 10月17日～2013年1月6日、「高知の戦後美術と前衛土佐派」(高知県立美術館)		

225-226. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
2013 年／ 平成 25 年／ 90 歳	● 2 月 15 日 ～ 5 月 8 日、「Gutai: Splendid Playground」(グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、アメリカ合衆国)	227《装置》	 227 〈出品作品の前に立つ高崎〉
	● 5 月 25 日～6 月 9 日、「第 65 回高知市文化祭 第 65 回市展」(高知市文化プラザかるぽーと)	先端美術：《2 人》	
	● 8 月 8 ～ 20 日、「『M・I 2013』展」(沢田マンションギャラリー、高知)		
	● 10 月 4 ～ 20 日、「第 67 回高知県展」(高知県立美術館)	先端美術： 《Nothing (無)》	
2014 年／ 平成 26 年／ 91 歳	● 1 月 11 日～2 月 9 日、「具体円熟終幕」(芦屋市立美術博物館、兵庫)		
	● 3 月 8 日～4 月 12 日、「『大木裕之』「闘い／抽象／具体／現象」with 高崎元尚」(ARATANIURANO、東京)		
	● 5 月 24 日～6 月 8 日、「第 66 回高知市文化祭 第 66 回市展」(高知市文化プラザかるぽーと)	先端美術： 《地球を考える》	
	● 7 月 5 日～9 月 7 日、「GUTAI × INTERNATIONAL 具体、海を渡る。」(芦屋市立美術博物館、兵庫)		
	● 10 月 10 ～ 26 日、「第 68 回高知県展」(高知県立美術館)	先端美術： 228《地球を考える》	 228
	● 11 月 1 日～12 月 14 日、「開館 20 周年記念展【後期】－ひろがる表現の世界－」(香美市立美術館、高知)		
2015 年／ 平成 27 年／ 92 歳	◎ 5 月 15 ～ 17 日〈14 日にレビュー〉、「Art Basel Hong Kong 2015」(香港コンベンション・アンド・エキシビション・センター、香港、中華人民共和国)〈ARATANIURANO のブースにて作品を出品〉	229 展示風景	 229
	● 5 月 23 日～6 月 7 日、「第 67 回高知市文化祭 第 67 回市展」(高知市文化プラザかるぽーと)	先端美術： 230《地球を考える》	 230

227. 高崎家より提供 (画像中の作品は宮城県美術館所蔵) 228. 高崎元尚／高崎家より提供 229. Courtesy of ANOMALY 230. 高崎元尚／高崎家より提供

年 月	事 項	出品・掲載作品等	関 連 画 像
	● 10月9～25日、「第69回高知県展」（高知県立美術館）	先端美術： 231《作品》	
	● 12月23日～2016年2月27日、「コレクション・テーマ展 かたちのリズムー抽象表現のいろいろ」（高知県立美術館）		
2016年／ 平成28年／ 93歳	◎ 4月、よんでん芸術文化賞受賞。 〈同年6月によんでん文化振興財団による表彰式が行われた〉		
	○ 4月9日～6月12日、「第63回企画展・香美市合併10周年記念事業 高崎元尚展 誰もやらないことをやる」（香美市立美術館、高知）	232,233 展示風景	 
	● 10月7～23日、「第70回高知県展」（高知県立美術館）	先端美術： 234《ゆっくり歩こう 転ばないように》	
	● 11月5日～12月18日、「第66回企画展ーアートアワードコレクションよりー美の挑戦者たち」（香美市立美術館、高知）		
	● 12月21日～2017年2月25日、「コレクション・テーマ展ー高知の戦後美術ー前衛美術作品を中心に」（高知県立美術館）		
2017年／ 平成29年／ 94歳	○ 6月17日～7月23日、「高崎元尚新作展ー破壊 COLLAPSEー」（高知県立美術館）	《密着》 《COLLAPSE 現代美術の崩壊》 《LANDSCAPE》 《LANDSCAPE 1/2 × 1/2》 《COLLAPSE》	
	◎ 6月22日、0時27分に高知市内の病院で永眠（享年94歳）。		
	● 9月19～30日、「BACK AND FORTHーspecialー岩田重義・高崎元尚・宮本浩二」（ギャラリー16、京都）		
	● 10月18日～2018年1月14日、「コレクション・テーマ展 高知の洋画」（高知県立美術館）	《装置》	

231. 高崎元尚／高崎家より提供 232-233. 香美市立美術館より提供 234. 高崎家より提供

[資料 2] 文献等資料目録

塚本麻莉、朝倉芽生 編

凡例

- ・各項目ごとに出版年順に掲載した。
- ・新字と旧字の表記については、参照元の文献の表記に準じた。
- ・編者の補足は〈 〉内に記した。

関連文献

1. 単行書
2. 逐次刊行物
 - (1)『POP』、『MES』（詩誌）
 - (2)『VOU』（詩誌）
 - (3)その他
3. 自筆文献
 - (1)単行書
 - (2)逐次刊行物
 - (3)新聞
 - (4)展覧会図録
4. 展覧会目録、図録等
 - (1)モダンアート協会展関係
 - (2)高知市展
 - (3)高知県展
 - (4)その他
5. 展覧会 DM、チラシ
6. 文献その他
7. 新聞
 - (1)高知新聞
 - (2)朝日新聞
 - (3)読売新聞
 - (4)毎日新聞
 - (5)日本経済新聞
 - (6)西日本新聞
 - (7)京都新聞
8. その他

関連文献

1. 単行書

『高知市中央公民館 26 年史』高知市立中央公民館、1977 年
『モダンアート協会 30 年史』モダンアート協会、1980 年
『文化祭三十年』高知市教育委員会、1980 年〈自筆文章の掲載あり〉
『高知市立中央公民館 30 年の歩み』高知市立中央公民館、1981 年
『県展作家－人と作品－1982』高知新聞社、1982 年
『写真集・第 35 回高知市文化祭』高知市文化祭執行委員会、1983 年
『原色図典日本美術史年表』集英社、1986 年
『文化祭四十年』高知市教育委員会、1989 年〈自筆文章の掲載あり〉
勅使河原純『美術館からの逃走 現代「美術」は風景にかみつき』現代企画室、1995 年
『高知県展 50 年』高知新聞社、1996 年
『冠する土佐の名に叶へ 土佐中高 80 年記念誌』土佐中・高等学校、2001 年
平井章一『「具体」ってなんだ？ 結成 50 周年の前衛美術グループ 18 年の記録』美術出版社、2004 年
『靱ギャラリー 1978 - 1985』三上豊、2007 年
『村松画廊 1942 - 2009』株式会社村松画廊、2009 年
関田孝司『私の CHIT-CHAT 物語』リーブル出版、2010 年〈自筆文章の掲載あり〉
尾崎重春『京都アンデパンダン展一全・2 回 + 31 回を概観一』品河舎、2011 年
『50 years of galerie 16 1962-2012』ギャラリー 16、2014 年
『公益財団法人高知市文化振興事業団 30 周年記念誌』公益財団法人高知市文化振興事業団、2015 年
ミン・ティアンポ『GUTAI 周縁からの挑戦』株式会社三元社、2016 年
羽永光利『羽永光利 一〇〇〇』松本弦人・一〇〇〇 BUNKO、2017 年〈p.106 に高崎の「装置」の画像が掲載されている〉

2. 逐次刊行物

(1)『POP』、『MES』（詩誌）

『POP NO.1』POP クラブ、1957 年、p.8 〈写真作品を掲載〉
『POP NO.2』POP クラブ、1957 年、p.7 〈写真作品を掲載〉
『POP NO.3』POP クラブ、1957 年、p.8 〈写真作品を掲載〉
岡崎功『1958 年高知モダンアート研究会展に寄せて』『POP NO.4』1958 年、pp.1-6
『POP NO.4』POP クラブ、1958 年、pp.9 〈高崎による作品《作品 B》の画像を掲載〉
『MES 13』MES クラブ、1961 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 14』MES クラブ、1961 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 15』MES クラブ、1962 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
伊藤伸顕「13 人のノート 第 2 回教員美術展」『MES 15』MES クラブ、1962 年、pp.25-26
『MES 16』MES クラブ、1962 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
岡本弘「あるひとつの角度から—高崎元尚の絵を見て—」
『MES 17』MES クラブ、pp.17-18

小原義也「13 人のノート 言いたいことがある」『MES 17』MES クラブ、pp.19-20

『MES 18』MES クラブ、1964 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 19』MES クラブ、1965 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 20』MES クラブ、1965 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
伊藤伸顕「〈高崎元尚〉の空間」『MES 20』MES クラブ、1965 年、pp.12-13

『MES 21』MES クラブ、1966 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 22』MES クラブ、1966 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 23』MES クラブ、1967 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 24』MES クラブ、1967 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 29』MES クラブ、1969 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 30』MES クラブ、1970 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉
『MES 31』MES クラブ、1970 年〈表紙に高崎の作品を掲載〉

(2)『VOU』（詩誌）

『VOU 66』VOU クラブ、1959 年、p.23 〈写真作品を掲載〉
『VOU 67』VOU クラブ、1959 年、p.17, p.18 〈写真作品を掲載〉
『VOU 70』VOU クラブ、1959 年、p.19 〈写真作品を掲載〉
『VOU 71』VOU クラブ、1959 年、p.19 〈写真作品を掲載〉
長谷部行勇「VOU 実験写真展 7 月 21 ~ 23 日 銀座東電サービスセンター」『VOU 71』VOU クラブ、1959 年、p.38
『VOU 72』VOU クラブ、1959 年、p.19 〈写真作品を掲載〉
『VOU 73』VOU クラブ、1960 年、p.23 〈写真作品を掲載〉
『VOU 74』VOU クラブ、1960 年、p.20 〈写真作品を掲載〉
『VOU 76』VOU クラブ、1960 年、p.20, p.21 〈写真作品を掲載〉
『VOU 77』VOU クラブ、1960 年、p.18, p.19 〈写真作品を掲載〉
『VOU 78』VOU クラブ、1960 年、p.18 〈写真作品を掲載〉
『VOU 79』VOU クラブ、1961 年、p.22, p.23 〈写真作品を掲載〉
『VOU 80』VOU クラブ、1961 年、p.20, p.21 〈写真作品を掲載〉
『VOU 81』VOU クラブ、1961 年、p.18, p.19 〈写真作品を掲載〉
『VOU 82』VOU クラブ、1961 年、p.25 〈写真作品を掲載〉
『VOU 83』VOU クラブ、1961 年、p.21 〈写真作品を掲載〉
堀内れい子「高崎元尚個展 11 月 21 日 ~ 25 日 村松ギャラリー」『VOU 83』VOU クラブ、1961 年、pp.40-41
『VOU 84』VOU クラブ、1962 年、p.22, p.23 〈写真作品を掲載〉
『VOU 86』VOU クラブ、1962 年、p.20, p.21 〈写真作品を掲載〉
『VOU 87』VOU クラブ、1963 年、p.18, p.19 〈写真作品を掲載〉
北園克衛「高崎元尚個展 11 月 25 日 ~ 30 日 樺画廊」『VOU 87』VOU クラブ、1963 年、pp.42-43
『VOU 88』VOU クラブ、1963 年、p.24, p.25 〈写真作品を掲載〉
『VOU 95』VOU クラブ、1964 年、p.22, p.23 〈写真作品を掲載〉

(3)その他

植村鷹千代「日本における抽象絵画の展開」『現代の眼 国立近代美術館ニュース 6 月号』東京国立近代美術館、1958 年、pp.2-5
『美術ジャーナル 47』色研、1964 年 〈自筆文章の掲載あり〉
「スターダスト 単調な単位の繰り返しの中に人間性を内蔵した高崎元尚の「装置」」『藝術新潮 第 169 号』新潮社、1964 年、pp.154-155
針生一郎「秀作展に出ると出ないと」『藝術新潮 第 170 号』新潮社、1964 年、pp.154-158
麻生良方「芸術見本市について」『現代の眼 国立近代美術館ニュース 12 月号』東京国立近代美術館、1965 年、p.6
ヨシダ・ヨシエ「絵画的要素を否定する作品」『ジャパン

インテリア JAPAN INTERIOR DESIGN no.12 3月号』ジャパン：インテリア社、1964年

『町にひろう 南国高知に咲いた前衛の花』『美術手帖 7月号』美術出版社、1967年、pp.16-17

『創幻5』野島真一郎・創幻社、1971年、〈表紙に高崎の写真が使用されている〉

平野重光「展評 関西」『美術手帖 2月号』美術出版社、1973年、pp.236-240

藤慶之「展評 関西」『美術手帖 3月号』美術出版社、1975年、pp.225-230

『美術手帖 3月増刊美術年鑑』美術出版社、1975年、pp.288〈名簿〉

高橋亨「展評 十二月一日―三十一日 《関西》」1976年、pp.244-248

高橋亨「展評 十二月一日―三十一日 《関西》」1977年、pp.254-258

建畠哲「展評 関西」『美術手帖 2月号』美術出版社、1981年、p.215、pp.218～220

愛宕出「展評 関西」『美術手帖 3月号』美術出版社、1982年、p.205

有田照子「《作品解説》高崎元尚 Motonao TAKASAKI (1923～)「装置」Apparatus 1966年 麻布・合板 180.0×180.0cm」『美術の森 北九州市美術館ニュース』北九州市立美術館 谷 伍平、1995年

「パレット 土佐山田町立美術館 No.4 2つの「装置」と高崎元尚さんのこと」『広報とさやまだ 平成8年5月号 (No.402)』土佐山田町報道委員会、1996年

『筆山 第24号／1998・1 土佐中・高同窓会 関東支部会報』藤宗俊一編集、1998年

松本教仁「それからの土佐派と、現代美術の実験」『平成10年度 高知県立美術館研究紀要 第1集』高知県立美術館、1999年、pp.37-74

松本教仁「1980年代の高知における現代美術展覧会について」『平成13年度 高知県立美術館研究紀要 第4集』高知県立美術館、2002年、pp.33-79

松本教仁「戦後高知の前衛美術集団興亡史」『高知市史研究 第2集』高知市、2004年、pp.1-20

山本淳夫「「具体」と「ハプニング」の出会い、もしくは、出会いそこね、について」『美術手帖 4月号』美術出版社、2004年、pp.280-283

中村秀樹『京都アンデパンダン展－全・2回＋31回を概観－』、2011年、p.120〈題なし。1986年の京都アンデパンダン展の展評。本稿は、1986年4月1日発行の『京都市美術館ニュース』の転載である〉

中村秀樹『京都アンデパンダン展－全・2回＋31回を概観－』、2011年、pp.125-126〈題なし。1987年の京都アンデパンダン展の展評。本稿は、1987年4月1日発行の『京都市美術館ニュース』の転載である〉

大野由紀夫「第18回高知県美術家協会展 新しい風が吹く試みを」『高知県美術家協会会報 杜 No.70』高知県美術家協会、2011年

『KENBI LETTER 97 高知県立美術館通信』、高知県立美術館、2017年

黒瀬陽平「かつてここにあった、現代美術との「対話」」『文化高知 NO.199』公益財団法人高知市文化振興事業団、2017年、pp.6-7

黒瀬陽平「ある前衛芸術家の死 高崎元尚新作展―破壊 COLLAPSE―」『美術手帖 10月号』美術出版社、2017年、pp.194-195

3. 自筆文献

(1) 単行書

高崎元尚「わたしの十代」『青少年へ贈る言葉 わが人生論 高知編 (中)』文教図書出版株式会社、1986年、pp.76-79

関田孝士・高崎元尚・長野泰子『CHIT-CHAT』亜細亜書房、1997年

(2) 逐次刊行物

高崎元尚「自作を語る 「装置」第15回モダンアート展から」『美術手帖 6月号』、美術出版社、1965年、pp.50-51

高崎元尚『第3回ヤンガーアート展 目録』ヤンガー・アート事務局、1965年〈展覧会目録〉

高崎元尚「鉛と県展」『MES 29』MESクラブ、1969年、pp.20-21

高崎元尚「特集・「表現への径」 アイ・ム スティールリビング」『高知作家 第二号』高知作家の会、1974年

高崎元尚「立体作品十年の歩み」『文化祭三十年』高知市文化祭執行委員会、1980年、pp.77-79

高崎元尚『美術手帖 3月号』美術出版社、1982年、p.199〈題なし〉

高崎元尚「満子さんへの手紙」『季刊手巾 24』堀 満子、1984年、pp.20-22

高崎元尚「なぜ英語か」『高知文学 第十一号』高知文学学校、1985年、pp.270-273

Motonao Takasaki「Sunken Treasures」『高知文学 第十一号』高知文学学校、1985年、pp.261-269

高崎元尚「私の画業」『季刊手巾 31』堀 満子、1986年、pp.1-3

Motonao Takasaki「Seven Warriors」『高知文学 第十二号』高知文学学校、1986年、pp.350-357

高崎元尚「わたしの英語」『高知文学 第十二号』高知文学学校、1986年、p.358

高崎元尚「ア・バド・ハビット」『高知文学 第十四号』高知文学学校、1988年、pp.151-154

高崎元尚「これからの正念場の立体作品」『文化祭四十年』高知市教育委員会、1989年、pp.56-57

高崎元尚「遊びのつづき」『高知県美術家協会会報 杜 No.5』高知県美術家協会、1993年

高崎元尚「50年代について」『星ヶ岡随想シリーズ第十四号』星ヶ岡アートヴィレツェ、1996年

高崎元尚「“反絵画”から出発 洋画の異分子として出発―前衛美術の興亡を反映―」『高知県展 50年』高知新聞社、1996年、pp.27-28

高崎元尚「高知から日本の現代美術を見る」『季刊あうろーら (秋・第5号)』“21世紀の関西を考える会”事務局 KANSAI FORUM 21、1996年

高崎元尚「新しいもの好きと粘り強さと。」『土佐倶楽部 6』亜細亜書房、1998年、p.42

高崎元尚「グッゲンハイム具体展の招待日」『文化高知 No.179』公益財団法人高知市文化振興事業団、2014年、pp.8-9

(3)新聞

高崎元尚「随想 自由な人間の自由な芸術 高崎元尚（高知モダンアート研究会長）『高知新聞』1956年1月6日夕刊
高崎元尚「娯楽 『県展アンケート』 高崎元尚（高知市・洋画）」『高知新聞』、1956年10月18日朝刊
高崎元尚「『読書の広場』モダンアートでお答え 高知市・高崎元尚」『高知新聞』、1958年1月21日夕刊
高崎元尚「学芸 真面目な努力 高知大美術展をみて 高崎元尚・モダンアート協会会員」『高知新聞』1958年1月24日朝刊
高崎元尚「『第12回県展特選作品』 洋画 「かかし」『高知新聞』、1958年9月25日夕刊
高崎元尚「『第12回県展特選作品』 写真 「うらめしや」『高知新聞』、1958年10月6日夕刊
高崎元尚「現代に生きる 「モダンアート」の10年 高崎元尚（モダンアート協会会員、土佐高校教諭）」『高知新聞』、1960年6月13日朝刊
高崎元尚「『県展特選サロン』 「障子と襖のための写真A」（写真）」『高知新聞』、1961年10月28日夕刊
高崎元尚「『ピカソと僕』 高崎元尚（土佐高教諭 モダンアート協会会員）」『高知新聞』、1962年2月25日朝刊
高崎元尚「『夏』＜21＞ 夏はまっぴら 絵と文・高崎元尚（モダンアート協会会員・土佐校教諭）『高知新聞』、1962年6月29日朝刊
高崎元尚「現実対決の甘さ 個展を終わって 高崎元尚（モダンアート協会会員 土佐高等学校教諭）／作品NO.20 高崎元尚」『高知新聞』、1962年12月16日朝刊
高崎元尚「ある女流画家 山崎京子さんの個展によせて 高崎元尚（土佐高教諭）」『高知新聞』、1963年2月19日朝刊
高崎元尚「現代芸術の意味 土佐派展を前に 人間を再確認する 断絶通じて新しい美へ 高崎元尚（土佐派同人・土佐高教諭）」『高知新聞』1964年8月13日朝刊
高崎元尚「『文化消息』 高崎元尚氏からたより 自作は1年のズレ」『高知新聞』、1966年3月24日朝刊
高崎元尚「『ニューヨークの現代美術』＜上＞ 高崎元尚 激しい競争のあけ暮れ さまざまな評価 ジャパン・フェスティバル 思い切ったスターづくり（モダンアート協会会員・土佐高教諭）」『高知新聞』、1966年4月9日朝刊
高崎元尚「『ニューヨークの現代美術』＜下＞ 高崎元尚 個性をもって競争 スター育てる画廊街（土佐高教諭・モダンアート協会会員）」『高知新聞』、1966年4月10日朝刊
高崎元尚「『リレー随筆』 言わなくてもよいこと 高崎元尚 土佐高教諭・モダンアート協会、具体美術協会会員」『高知新聞』、1968年3月1日朝刊
高崎元尚「『マイキャンパス』＜23＞ グリーティング・イン・スペース 絵と文・高崎元尚（土佐高教諭・モダンアート協会会員）」『高知新聞』、1969年2月3日朝刊
高崎元尚「県展 立体作品部の独立 高崎元尚（県展立体作品部審査員）美術は社会とともに 万博がもたらす未来の風景」『高知新聞』、1969年9月27日朝刊
高崎元尚「新審査員一言 社会の動きとともに」『高知新聞』、1969年10月12日朝刊
高崎元尚「万国博美術展に参加して 喜びと不安の相克 拒絶する判断の手掛かり」『高知新聞』、1970年3月22日
高崎元尚「立体美術のゆくえ 都市文明へ挑戦促す 言

葉なきシンポジウム 高崎元尚（県展立体部門審査員）」『高知新聞』、1971年5月21日朝刊
高崎元尚「『第25回県展 審査のあと』（3）立体 審査員＝高崎元尚・寺尾孝志・高野朗 小粒だが楽しい作品群 若い人たちの参加を期待」『高知新聞』、1971年10月29日朝刊
高崎元尚「ああ現代美術 「現代美術の実験」25回展に思う」『高知新聞』、1972年9月8日朝刊
高崎元尚「『第28回県展 審査のあと』＜4＞ 立体作品 審査員 高野朗・高崎元尚 作家のレベルは向上底流するエネルギーを表に」『高知新聞』、1974年10月22日朝刊
高崎元尚「『月曜随想』 私の歩き方 高崎元尚（現代美術作家、土佐高校教諭）」『高知新聞』、1977年1月24日朝刊
高崎元尚「『県展を語る』 立体作品 審査員 高崎元尚 高野朗 志賀健蔵 作家に活力… 動き始めた新しい生命」『高知新聞』、1977年10月20日朝刊
高崎元尚「第34回県展審査から 立体作品 高崎元尚 大西清澄」『高知新聞』、1980年10月17日朝刊
高崎元尚「こども高知新聞 『思い出の先生』＜8＞ 寄宿生には父親の存在 高崎元尚 県展立体作品部審査員・土佐高教諭」『高知新聞』、1981年2月23日朝刊
高崎元尚「第35回県展審査評＜上＞ 立体作品 高崎元尚 バラエティーに乏しい」『高知新聞』、1981年10月15日
高崎元尚「現代美術と高知＜上＞ 連続個展を開き努力 高崎元尚（現代美術家・高知市）」『高知新聞』、1985年7月19日朝刊
高崎元尚「現代美術と高知＜下＞ いろいろな場所へ進出 高崎元尚（現代美術作家・高知市）」『高知新聞』、1985年7月20日朝刊
高崎元尚「第39回 県展 審査評 立体作品（審査員 高崎元尚 都築房子）マイペースが確立」『高知新聞』、1985年10月14日朝刊
高崎元尚「県展40年 あの日あの時」＜3＞高崎元尚（県展立体作品部招待 土佐高校講師 高知市幸町）暗い部屋に呼び出され」『高知新聞』、1986年10月15日朝刊
高崎元尚「芸能 『私のこの一曲』 高崎元尚（65）現代美術作家 「人生の並木路」（昭和12年 佐藤惣之助・作詞 古賀政男・作曲）『高知新聞』、1988年8月5日夕刊
高崎元尚「立体 審査員 高崎元尚 枠を出て「大胆」に」『高知新聞』、1989年3月7日朝刊
高崎元尚「『第45回県展 あの日、あの時』＜7＞立体作品 その創設のころ 高崎元尚（立体作品部招待・高知市）」『高知新聞』、1991年10月15日朝刊
高崎元尚「『「高知の1960年代」展の作家たち』（7-終） 高崎元尚 作品 県立美術館 23日まで」『高知新聞』、1997年3月13日朝刊
高崎元尚「『月曜随想』 田島兄弟のエネルギー」『高知新聞』、2006年8月21日朝刊

(4)展覧会図録

高崎元尚『1964年度選抜 秀作美術展陳列目録』、朝日新聞社、1965年、pp.6-7〈題なし〉
高崎元尚「前衛の時代」『TOSA-TOSA'95 クールの時代 美術のノイズ・ミュージック profile』高知県立美術館、1995年、p.36

高崎元尚『高崎元尚 誰もやらないことをやる』高崎元宏、2016年
『高崎元尚新作展 一破壊 COLLAPSE―』高知県立美術館、2017年

4. 展覧会目録、図録等

(1)モダンアート協会展関係

『第2回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1952年
『第3回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1953年
『第4回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1954年
『第5回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1955年
『関西モダンアート展 出品目録』モダンアート協会、1955年
『第6回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1956年
『第7回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1957年
『第7回モダンアート協会展 図録』モダンアート協会、1957年
『MOSERN-ART』高知モダンアート研究会、1957年〈1957年4月30日～5月5日開催の「中央モダンアート協会展」（高知大丸）の作品目録〉
『第8回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1958年
『第8回モダンアート協会展 図録』モダンアート協会、1958年
『第9回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1959年
『第9回モダンアート協会展 図録』モダンアート協会、1959年
『第10回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1960年
『第11回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1961年
『第11回モダンアート協会展 図録』モダンアート協会、1961年
『第12回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1962年
『第13回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1963年
『第14回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1964年
『第15回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1965年
『第16回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1966年
『第17回モダンアート協会展 出品目録』モダンアート協会、1967年

(2)高知市展

『第8回 文化祭洋画展出品目録』高知市文化祭執行委員会、1986年〈1956年6月1～5日の「高知市文化祭 洋画展」の目録〉
〈高崎家に残されていた目録以外では、公益財団法人高知市文化振興事業団が保管していた1975年以降の『市展目録』が確認できた。〉

『第27回市展』高知市文化祭執行委員会、1975年
『第28回市展』高知市文化祭執行委員会、1976年
『第29回市展』高知市文化祭執行委員会、1977年
『第30回市展』高知市文化祭執行委員会、1978年
『第31回市展』高知市文化祭執行委員会、1979年
『第32回市展』高知市文化祭執行委員会、1980年
『第33回市展』高知市文化祭執行委員会、1981年
『第34回市展』高知市文化祭執行委員会、1982年
『第35回市展』高知市文化祭執行委員会、1983年
『第36回市展』高知市文化祭執行委員会、1984年
『第37回市展』高知市文化祭執行委員会、1985年
『第38回市展』高知市文化祭執行委員会、1986年
『第39回市展』高知市文化祭執行委員会、1987年
『第40回市展』高知市文化祭執行委員会、1988年
『第41回市展』高知市文化祭執行委員会、1989年
『第42回市展』高知市文化祭執行委員会、1990年
『第43回市展』高知市文化祭執行委員会、1991年
『第44回市展』高知市文化祭執行委員会、1992年
『第46回市展』高知市文化祭執行委員会、1994年
『第47回市展』高知市文化祭執行委員会、1995年
『第48回市展』高知市文化祭執行委員会、1996年
『第49回市展』高知市文化祭執行委員会、1997年
『第50回市展』高知市文化祭執行委員会、1998年
『第51回市展』高知市文化祭執行委員会、1999年
『第52回市展』高知市文化祭執行委員会、2000年
『第53回市展』高知市文化祭執行委員会、2001年
『第54回市展』高知市文化祭執行委員会、2002年
『第55回市展』高知市文化祭執行委員会、2003年
『第56回市展』高知市文化祭執行委員会、2004年
『第58回市展』高知市文化祭執行委員会、2006年
『第59回市展』高知市文化祭執行委員会、2007年
『第60回市展』高知市文化祭執行委員会、2008年
『第61回市展』高知市文化祭執行委員会、2009年
『第62回市展』高知市文化祭執行委員会、2010年
『第63回市展』高知市文化祭執行委員会、2011年
『第64回市展』高知市文化祭執行委員会、2012年
『第66回市展』高知市文化祭執行委員会、2014年
『第67回市展』高知市文化祭執行委員会、2015年

(3)高知県展

『第8回高知県展目録』高知新聞社、1954年
『第9回高知県展目録』高知新聞社、1955年
『第10回高知県展目録』高知新聞社、1956年
『第11回高知県展目録』高知新聞社、1957年
『第12回高知県展目録』高知新聞社、1958年
『第13回高知県展目録』高知新聞社、1959年
『第14回高知県展目録』高知新聞社、1960年
『第15回高知県展目録』高知新聞社、1961年
『第16回高知県展目録』高知新聞社、1962年
『第17回高知県展目録』高知新聞社、1963年
『第18回高知県展目録』高知新聞社、1964年
『第19回高知県展目録』高知新聞社、1965年
『第20回高知県展目録』高知新聞社、1966年
『第21回高知県展目録』高知新聞社、1967年
『第22回高知県展目録』高知新聞社、1968年
『第23回高知県展目録』高知新聞社、1969年

『第24回高知県展目録』高知新聞社、1970年
 『第25回高知県展目録』高知新聞社、1971年
 『第26回高知県展目録』高知新聞社、1972年
 『第27回高知県展目録』高知新聞社、1973年
 『第28回高知県展目録』高知新聞社、1974年
 『第29回高知県展目録』高知新聞社、1975年
 『第30回高知県展目録』高知新聞社、1976年
 『第31回高知県展目録』高知新聞社、1977年
 『第32回高知県展目録』高知新聞社、1978年
 『第33回高知県展目録』高知新聞社、1979年
 『第34回高知県展目録』高知新聞社、1980年
 『第35回高知県展目録』高知新聞社、1981年
 『第36回高知県展目録』高知新聞社、1982年
 『第37回高知県展目録』高知新聞社、1983年
 『第38回高知県展目録』高知新聞社、1984年
 『第39回高知県展目録』高知新聞社、1985年
 『第40回高知県展目録』高知新聞社、1986年
 『第41回高知県展目録』高知新聞社、1987年
 『第42回高知県展目録』高知新聞社、1988年
 『第43回高知県展目録』高知新聞社、1989年
 『第44回高知県展目録』高知新聞社、1990年
 『第45回高知県展目録』高知新聞社、1991年
 『第46回高知県展目録』高知新聞社、1992年
 『第47回高知県展目録』高知新聞社、1993年
 『第48回高知県展目録』高知新聞社、1994年
 『第49回高知県展目録』高知新聞社、1995年
 『第50回高知県展目録』高知新聞社、1996年
 『第51回高知県展目録』高知新聞社、1997年
 『第52回高知県展目録』高知新聞社、1998年
 『第53回高知県展目録』高知新聞社、1999年
 『第54回高知県展目録』高知新聞社、2000年
 『第55回高知県展目録』高知新聞社、2001年
 『第56回高知県展目録』高知新聞社、2002年
 『第57回高知県展目録』高知新聞社、2003年
 『第58回高知県展目録』高知新聞社、2004年
 『第59回高知県展目録』高知新聞社、2005年
 『第60回高知県展目録』高知新聞社、2006年
 『第61回高知県展目録』高知新聞社、2007年
 『第62回高知県展目録』高知新聞社、2008年
 『第63回高知県展目録』高知新聞社、2009年
 『第64回高知県展目録』高知新聞社、2010年
 『第65回高知県展目録』高知新聞社、2011年
 『第66回高知県展目録』高知新聞社、2012年
 『第67回高知県展目録』高知新聞社、2013年
 『第68回高知県展目録』高知新聞社、2014年
 『第69回高知県展目録』高知新聞社、2015年
 『第70回高知県展目録』高知新聞社、2016年

(4)その他

『抽象絵画の展開』東京国立近代美術館、1958年
 『VOU 実験写真展 '59』VOU クラブ、1959年
 『現代美術の動向：絵画と彫塑』国立近代美術館京都分館、1965年
 『第1回日本芸術祭国内展示』国立近代美術館・社団法人国際芸術見本市協会、1965年
 『今日の作家 '65年展』横浜市民ギャラリー、1965年

『第3回ヤンガーアート展 目録』ヤンガー・アート事務局、1965年
 『1964年度選抜 秀作美術展陳列目録』、朝日新聞社、1965年
 『第16回 選抜秀作美術展図録』朝日新聞社、1965年
 『The 1st Japan Art Festival』Japan Art Festival Association、1966年
 『南日本現代美術展』南日本現代美術展〈企画・前衛土佐派〉、1967年
 『Hommage an das Schweigen, 1969 〈「沈黙に捧げる」展図録〉』
 『7 / 365 × 11 = 展 (今日の方法)』、京都市美術館、1973年
 『具体美術の18年』『具体美術の18年』刊行委員会、1976年
 『アート・ナウ '78』兵庫県立近代美術館、1978年
 『特別展・吉原治良と具体のその後 図録』兵庫県立近代美術館、1979年
 『第13回 日本国際美術展』東京都美術館・京都市美術館、1980年
 『野外彫刻展高知 出品目録』野外彫刻展執行委員会、1983年
 『現代美術三人展－時空遊－』高知大丸、1985年
 『現代の白と黒』埼玉県立近代美術館、1986年
 『昭和59年度、60年度 新収蔵品展』北九州市立美術館、1986年
 『FREE ART MEETING'87』愛媛県立美術館、1987年
 『POLY CROSS ART'88』高知県立郷土文化会館／(財)高知市文化振興事業団、1988年
 『瀬戸大橋架橋記念野外彫刻展』高松市・高松市教育委員会・野外彫刻展開催実行委員会、1988年
 『ポリクロスアート展』高知県立郷土文化会館・(財)高知市文化振興事業団、1989年
 『現代絵画の一断面 くり返しの構造展』高松市美術館、1989年
 『BACK AND FORTH COLLAGE IN THE 1960'S 高崎元尚、野村耕、三島喜美代』galerie 16、1989年
 『第3回 INO 紙のことは展—Metaphorical paper Exhibition—』いの紙のことは展実行委員会・いの町紙の博物館、1990年
 『第5回国民文化祭協賛 西瀬戸現代美術展 報告書』愛媛県立美術館、1990年
 『ポリクロスアート'91展』ポリクロスアートフェスティバル実行委員会・(財)高知市文化振興事業団・高知県立郷土文化会館、1991年
 『POLY CROSS ART EXHIBITION'93 現代美術の様相と断層から』高知市文化振興事業団、1993年
 『具体展Ⅲ—1965～1972—』芦屋市立美術館博物館、1993年
 『具体資料集-ドキュメント具体 1954-1972』財団法人芦屋市文化振興財団、1993年
 『具体展 I・II・III』財団法人芦屋市文化振興財団、1994年
 『TOSA-TOSA'95 クールの時代 美術のノイズ・ミュージック profile』高知県立美術館、1995年
 『TOSA-TOSA'95 クールの時代 美術のノイズ・ミュージック document』高知県立美術館、1995年
 高知県立美術館・松本教仁『こんなアヴァンギャルド芸術があった！-高知の1960年代-』高知新聞社、1997年

『高崎元尚・小原義也 現代美術展 展示目録』土佐山田町立美術館、1997 年
 『大阪市立近代美術館（仮称）コレクション展 2001 美術パノラマ・大阪』大阪市教育委員会、2001 年
 『開館 10 周年記念 高知の美術 150 年の 100 人展』高知県立美術館、2003 年
 『土佐山田町立美術館第 67 回企画展 物部川流域 森と水と風のアートフェスティバル 5 人のアーティスト展 展示目録』土佐山田町立美術館、2005 年
 『平成 17 年度 兵庫県立美術館 コレクション展Ⅱ』兵庫県立美術館、2005 年
Gutai: Splendid Playground, Guggenheim Museum Publications, 2013
 『GUTAI collection by an art mouse』アート・遊、2015 年
 『「具体」—ニッポンの前衛 18 年の軌跡』国立新美術館、2012 年
 『GUTAI × INTERNATIONAL 具体、海を渡る。』芦屋市立美術博物館、2014 年

5. 展覧会 DM、チラシ

「1958 モダンアート（中央）展」モダンアート協会、1958 年〈DM〉
 「高崎元尚個展 PAINTING EXHIBITION」樺画廊、1959 年
 「1959 モダンアート展」高知大丸、モダンアート協会、1959 年〈1959 年 6 月 29 日～7 月 9 日に開催された同展の DM〉
 「VOU 形象展」新宿 風月堂、1959 年
 「VOU 実験写真展」東電サービスセンター、1959 年
 「創立 10 周年記念／高知市文化祭参加 モダンアート展」モダンアート協会、1960 年〈6 月 14 日～19 日に開催された同展の DM〉
 「motonoa takasaki exhibition no.6 高崎元尚」樺画廊、1964 年
 「異色 4 人展」galerie 16、1965 年
 「高崎元尚 展」galerie 16、1986 年
 「高崎元尚展」galerie 16、1987 年
 「第 46 回高知県文化賞受賞記念 高崎元尚展」GALLERY 星ヶ岡アートヴィレッジ、1996 年
 「高崎元尚展」アトリエ倫加、1997 年
 「高崎元尚展」LADS GALLERY、1997 年
 「高崎元尚展」すろおが 463、1998 年
 「EXHIBITION—装置—高崎元尚展」宮武画廊、1999 年
 「夢芝居—オオハルマボロシノショウ 大木裕之展」すろおが 463、1999 年〈スペシャルゲストとして高崎の名前が記載されている〉
 「[装置]—[波動—Ⅱ] 高崎元尚・松谷武判展—時代を駆け抜けた作家—」ギャラリーアスコタージュ、2000 年
 「なにもしない a response to 9/11 高崎元尚展」グラフィティ、2002 年
 「装置 高崎元尚」Galeria punto、2002 年
 「高崎元尚展」ギャラリー AO、2002 年
 「高崎元尚作品・カレンダー展」アトリエ倫加、2002 年
 「結成 50 周年記念「具体」回顧展 高崎元尚展」グラフィティ、2003 年
 「高崎元尚展」ギャラリー AO、2004 年
 「高崎元尚展」Galeria punto、2005 年
 「高崎元尚展」ギャラリー AO、2006 年
 「高崎元尚展」ギャラリー AO、2008 年

「高崎元尚展」LADS GALLERY、2010 年
 「高崎元尚×川崎康為 現代アートの継承」グラフィティ、2011 年
 「現代アート展 高崎元尚」現代っ子ミュージアム、2011 年
 「2012 夏の高知 M・I よさこいアート祭り」2012 年
 「2013 夏の高知 M・I よさこいアート祭り」2013 年〈うちわ〉

6. 文献その他

東京藝術大学美術学部卒業証明書、1949 年〈高崎元尚の東京美術学校彫刻科塑造部の卒業証明書〉
 ヨシダ・ヨシエ「白い部屋から」「motonoa takasaki exhibition no.6 高崎元尚」樺画廊、1964 年〈高崎元尚の展覧会 DM に寄せたテキスト〉
 『高知大学職員録 昭和 47 年度』国立大学法人高知大学、1972 年

7. 新聞

(1) 高知新聞

「婦人と家庭 高崎元尚氏、モダンアート展に入選」『高知新聞』、1952 年 3 月 21 日朝刊
 「美術 溢れる制作意欲 香美郡 県展への動き」『高知新聞』、1952 年 9 月 20 日朝刊
 「高崎氏、モダンアート展に入選」『高知新聞』、1954 年 2 月 20 日夕刊
 「高知モダンアート協会発足」『高知新聞』、1955 年 2 月 23 日夕刊
 「モダンアート研究会展 15 日から高知市中央公民館で」『高知新聞』、1955 年 4 月 14 日夕刊
 「生花と絵画展 中央公民館で」『高知新聞』、1955 年 4 月 16 日朝刊
 「東俊二氏の美術教育講習会」『高知新聞』、1955 年 4 月 29 日夕刊
 「モダンアート展 1 日から高知市で」『高知新聞』、1955 年 5 月 1 日夕刊
 植村鷹千代「モダンアート展について」『高知新聞』、1955 年 5 月 1 日夕刊
 「鑑賞者首ひねる モダン・アート展」『高知新聞』、1955 年 5 月 2 日夕刊
 「モダンアート・サンマースクール」『高知新聞』、1955 年 7 月 29 日夕刊
 「高知モダンアート講習会」『高知新聞』、1955 年 8 月 15 日夕刊
 「いずれ劣らぬメイ作 モダンアートのサンマースクール」『高知新聞』、1955 年 8 月 18 日朝刊
 「モダンアート展開く」『高知新聞』、1956 年 1 月 7 日夕刊
 「モダンアート展入選者」『高知新聞』、1956 年 2 月 17 日夕刊
 「モダンアート展で高崎氏会友に」『高知新聞』、1956 年 3 月 3 日夕刊
 「家庭 高知市でモダンアート 56 年版」『高知新聞』、1956 年 3 月 27 日夕刊
 「学芸 モダンアート展 3 日から高知市中央公民館」『高知新聞』、1956 年 4 月 29 日朝刊
 「学芸 「作品 F」 高崎元尚（モダンアート展から） 6 日まで高知市中央公民館」『高知新聞』、1956 年 5 月 5 日朝刊

「秋晴れに県展にぎわう 写真にそろって入賞の師弟コンビ」『高知新聞』、1956年10月28日朝刊
「第5回モダン・アート展」『高知新聞』、1957年1月18日朝刊
笹岡信彦「学芸 『読者の広場』 高知モダンアート宣言」『高知新聞』、1957年1月20日朝刊
「早春の芽吹き 高知市内で絵画と書道展」『高知新聞』、1957年1月20日夕刊
「学芸 30日からモダンアート中央展」『高知新聞』、1957年4月28日朝刊
「傑作あつめて盛況 中央モダン・アート展」『高知新聞』、1957年5月2日朝刊
「あざやか“県展二刀流” 初出展で初入賞も 細木芸西中教諭ら5氏」『高知新聞』、1957年9月16日夕刊
「モダンアート研究会展開く」『高知新聞』、1958年1月3日朝刊
西卓「学芸 現代絵画の問題 モダンアート研究会展によせて」『高知新聞』、1958年1月8日朝刊
「学芸 高知でモダンアート中央展」『高知新聞』、1958年7月1日朝刊
「和 洋 2つの前衛的絵画群 いずれも高知ではじめて／」『高知新聞』、1958年7月2日夕刊
筒井広道「モダンアート展をみて」『高知新聞』、1958年7月3日朝刊
「第12回県展特選作品」『高知新聞』、1958年9月25日
「『美神の使徒たち 第12回高知県展から』＜6＞ “うで”と“あたま”」『高知新聞』、1958年10月4日夕刊
「モダンアート展 あすから高知大丸で」『高知新聞』、1959年6月28日朝刊
中村博「モダンアート展に際して」『高知新聞』、1959年7月2日朝刊
「高知勢も活躍 モダンアート 中央作品展」『高知新聞』、1959年7月2日朝刊
「高崎氏 東京で個展」『高知新聞』、1959年12月18日朝刊
江川和彦「高崎君の個展を見て」『高知新聞』、1959年12月30日朝刊
「高知市に高知洋画研究所 土、日曜夜講習会」『高知新聞』、1960年3月16日朝刊
「ブームの残したもの 高知県写真界の昨今 座談会 ほしい批評精神 コンテストは「目標」ではない クラブを勉強の場に 出席者＝南茂・高知県写真連盟会長、弘田博敏・高知作家集団会員、高崎元尚・モダンアート協会会員」『高知新聞』、1960年6月2日朝刊
「対照的な雰囲気 高知市で2つの展覧会」『高知新聞』、1960年6月15日朝刊
「『私のデモン 県展作品から』＜5＞ 人工衛星とともに」『高知新聞』、1960年10月30日朝刊
「『文化消息』 高崎元尚氏の個展」『高知新聞』、1960年12月19日朝刊
「「造形」と「空間」 高崎元尚氏個展」『高知新聞』、1960年12月28日朝刊
植松鷹千代「高崎元尚君の個展を見て あらわれた動きと広がり 東洋的な色感の世界の追及」『高知新聞』、1960年12月29日朝刊
「本県は6氏出品 モダンアート展」『高知新聞』、1961

年4月1日朝刊
浜口富治「ふしぎな青の魅力 高崎元尚作品に」『高知新聞』、1961年8月14日朝刊
「意欲作ずらり 高崎、柳原両氏の2人展」『高知新聞』、1961年8月17日朝刊
岡崎功「モニュメンタルな世界 2人展の彫刻によせて」『高知新聞』、1961年8月18日朝刊
「『エコール ド トサ』① グループ・ゼロ 非常な意識の集い 県展の主力作家そろえる」『高知新聞』、1961年10月6日朝刊
「『文化消息』 高崎元尚氏（モダンアート協会会員）が東京・銀座の村松画廊で画と写真の個展」『高知新聞』、1961年11月24日朝刊
江川和彦「直接的な作品へ 高崎元尚個展を見て／「作品10」「作品4」」『高知新聞』、1961年11月27日朝刊
「『文化消息』 東京で洋画家の高崎元尚氏が個展」『高知新聞』、1961年12月3日朝刊
筒井広道「高知市文化祭洋画展評 考えるべき平均化充実・水準は上がったが」『高知新聞』、1962年6月8日朝刊
「新しい美術 土佐派展を語る 座談会／「マリンスノウ」高崎元尚」『高知新聞』、1962年7月31日朝刊
「『文化消息』 VOU写真展 写真＝高崎元尚」『高知新聞』、1963年4月15日朝刊
「『五月』写真・高崎元尚（高知市帯屋町MS画廊で開催中＝6月4日まで＝三人展から）」『高知新聞』、1963年5月31日朝刊
「「作品3」 高崎元尚（高知市帯屋町MS画廊で開催中＝6月4日まで＝三人展から）」『高知新聞』、1963年5月31日朝刊
「前衛“土佐派” ものういユーモア＝浜口富治「オブジェ移動展」 不吉な魅力をもつ＝高崎元尚「作品63－1」美術誌が高く評価」『高知新聞』、1963年6月2日朝刊
中原佑介「アッケラカン芸術とは一土佐派展に寄せて」『高知新聞』、1963年8月7日
ヨシダ・ヨシエ「不吉な装置 高崎元尚の作品に」『高知新聞』、1963年11月10日朝刊
「『文化消息』 高崎元尚（土佐高教諭・前衛土佐派）の「装置」と題する作品の個展が、「芸術新潮」新年号の“スターダスト”にとりあげられている」『高知新聞』、1964年1月13日朝刊
「『文化消息』 モダンアート展」『高知新聞』、1964年4月7日朝刊
「野心作「パニック」など あす平橋パレエ公演」『高知新聞』、1964年4月18日朝刊
「『文化消息』 「土佐派の発言」」『高知新聞』、1964年5月29日朝刊
「『高知ギャラリー』 正方形の文明批評 高崎元尚、ことしの個展」『高知新聞』、1964年9月8日朝刊
「『文化消息』 東京での個展 土佐高教諭の高崎元尚さん、小原義也さん、沢田明子さん」『高知新聞』、1964年12月2日朝刊
「『文化消息』 つぎつぎと東京個展 高崎元尚と柳原睦夫」『高知新聞』、1964年12月11日朝刊
「『文化消息』 秀作展へ高崎元尚氏 ベテランと肩を並べて」『高知新聞』、1964年12月28日朝刊

「『高知ギャラリー』『大家』と競った高崎さん 選抜秀作展での成果」『高知新聞』、1965年1月15日朝刊
「『文化消息』 異色4人展へ高崎元尚」『高知新聞』、1965年2月28日朝刊
三木多聞「春の公募展から「装置」 高崎元尚（土佐高教論）モダンアート展から」『高知新聞』、1965年4月13日朝刊
「平櫛モダンバレエ公演 22日、高知中央公民館で」『高知新聞』、1965年5月18日夕刊
「『文化消息』 現代美術の動向展へ 高崎元尚」『高知新聞』、1965年6月12日朝刊
「『高知ギャラリー』『おつきあいの市展』 高崎元尚の爆弾発言」『高知新聞』、1965年6月26日朝刊
「『高知ギャラリー』 市展作家が鋭く反撃 “大衆にそむく高崎発言”」『高知新聞』、1965年7月3日朝刊
「『文化消息』 高崎作品、アメリカへ」『高知新聞』、1965年7月9日朝刊
「高知からニューヨークへ 美術見本市に出品する高崎元尚 ベテランと肩ならべて 地方美術の一つの結実／「装置」（昨年のモダンアート展へ出品した作品）／高崎元尚氏に聞く 自信ある会場効果 地方と外国に落差不い」『高知新聞』、1965年8月27日朝刊
「『話題』 東は東（橋井）」『高知新聞』、1965年9月13日夕刊
「日本芸術祭 ニューヨークへの高崎作品 できあがった3点 「現代社会の表象として」」『高知新聞』、1965年12月13日朝刊
「『文化消息』 自作をみてる 高崎元尚氏、ニューヨークへ」『高知新聞』、1966年3月3日朝刊
「『文化消息』 高崎元尚の作品が選ばれる可能性も N・Yビエンナーレ」『高知新聞』、1966年7月26日朝刊
「『文化消息』 こんどはオーストリアへ 選ばれて高崎元尚作品」『高知新聞』、1966年10月10日朝刊
「『文化消息』 高知から3人 岡山の汎瀬戸内美術展」『高知新聞』、1966年11月3日朝刊
「『高知ギャラリー』 立体化への第一歩 高崎元尚の新作建築との対応において」『高知新聞』、1967年3月13日朝刊
服部知文「「南日本現代美術展」を見て」『高知新聞』、1967年8月17日朝刊
「『県展 人と制作』<2>洋画（下） そろって力作を準備 ベテラン、新人、多士済々」『高知新聞』、1967年10月8日朝刊
「『文化消息』 中央展で活躍 高崎・末田さん」『高知新聞』、1967年10月10日朝刊
「『県展審査のあと』<4> 明快で若々しい めざましい新人の台頭」『高知新聞』、1967年10月27日朝刊
「『県展特選』 洋画 「装置」 高崎元尚（高知市）」『高知新聞』、1967年11月1日朝刊
「好評の本県作品 東京で第7回県展選抜展」『高知新聞』、1968年2月10日朝刊
「『文化消息』 高知から4作家が出品 岡山で「汎瀬戸内芸術美術展」」『高知新聞』、1968年10月31日朝刊
「『土曜のいす』 空間を演出する 新作を完成 高崎元尚さん」『高知新聞』、1969年4月5日朝刊
「『第23回県展・人と制作』<9> 激しい入賞争い 搬

入数は毎年トップ」『高知新聞』、1969年10月12日朝刊
「『第23回県展 審査のあと』<5> 立体作品 審査員＝高崎元尚・寺尾孝志 人を触発する何かを 特選作、素朴な実存感」『高知新聞』、1969年10月28日朝刊
「『文化消息』 笛で集団個展 現代美術研究グループ」『高知新聞』、1970年9月18日朝刊
「『第24回県展 審査を終わって』<4> 立体 壁と共存する特選作 時間、場所も作品の要素 審査員＝高崎元尚、寺尾孝志、高野朗」『高知新聞』、1970年10月21日朝刊
「『文化消息』 招待作家に高崎さん 第10回現代日本美術展」『高知新聞』、1971年1月18日朝刊
「『文化消息』 西独のミニアート展に高崎作品」『高知新聞』、1971年4月19日朝刊
「『会と催し』 April」『高知新聞』、1971年4月26日朝刊
「『高知ギャラリー』『June and July』 現代美術の実験」『高知新聞』、1971年7月11日朝刊
中村博「『県展茫々』<10> 反響」『高知新聞』、1971年9月29日朝刊
「『会と催し』 March」『高知新聞』、1972年3月6日朝刊
「『会と催し』 May」『高知新聞』、1972年5月9日朝刊
「『会と催し』 June」『高知新聞』、1972年6月6日朝刊
「『会と催し』 November」『高知新聞』、1972年11月7日朝刊
高野朗「『第27回県展 審査のあと』(3) 立体美術 審査員 高崎元尚 寺尾孝志 高野朗 さらに多様化の方向 ユニークな特選作品」『高知新聞』、1973年10月9日朝刊
「『文化消息』 二つの作品展 高崎元尚氏が京都で」『高知新聞』、1973年12月16日朝刊
「『文化消息』 高崎元尚氏・高知市も出品 京都の「今日の方法'74展」」『高知新聞』、1974年9月9日朝刊
「『文化消息』 汎瀬戸内現代美術展 高崎元尚、都築房子氏が出品」『高知新聞』、1975年9月28日朝刊
「『文化消息』 現代美術の崩壊を提示 京都で個展 高崎元尚氏」『高知新聞』、1975年12月10日朝刊
高野朗「第30回県展 審査のあと 立体 審査員 高崎元尚・高野朗・志賀健蔵 力強い新人の登場 激論呼んだ県展大賞」『高知新聞』、1976年10月21日朝刊
「『県展30年』(8) 立体登場 洋画からの“分家独立”」『高知新聞』、1976年10月23日夕刊
宮村憲章「『話題の周辺』『立体作品』の目ざすもの 既成概念を否定する 時代と対決、新しい世界を…」『高知新聞』、1977年10月17日朝刊
「“現代美術の実験” 異色の展覧会開く 県下の立体作家5人」『高知新聞』、1978年4月5日夕刊
「現代美術の実験展 高知市中央公民館で」『高知新聞』、1978年11月11日朝刊
「『文化消息』『吉原治良と具体のその後』展 高崎元尚さんも出品」『高知新聞』、1979年1月27日朝刊
「『このごろ』 目下は準備運動中 高崎元尚・現代美術作家（高知市幸町）」『高知新聞』、1979年7月30日朝刊
「『画廊から』 現代美術の実験 自由に個性を発揮」『高知新聞』、1979年8月25日朝刊
「『県展広場』 褒状受けた審査員 立体作品の高崎元尚さん 他流試合で“現役復帰” 夢は自分で写真集出版」『高知新聞』、1979年10月25日朝刊

「『文化消息』 高崎元尚展 9日まで京都市で」『高知新聞』、1979年12月7日朝刊
「『文化消息』「日本国際美術展」に高崎・寺尾両氏入選」『高知新聞』、1980年5月11日朝刊
「『現代美術の実験展』 高知市立中央公民館 広がりつつある“すそ野”(忍)」『高知新聞』、1980年8月17日朝刊
「『文化消息』 京都市で高崎元尚展 きょうから14日まで」『高知新聞』、1980年12月9日朝刊
「『現代美術の実験展』 高知市で 自由なイメージを」『高知新聞』、1981年2月25日朝刊
小松康夫「『話題の周辺』 野外彫刻展 高知1981 総合的な街造りへ 育てたい環境芸術の<芽>」『高知新聞』、1981年8月24日朝刊
「第35回県展 力作に厳しい審査の目 立体作品は入選決まる(審査評=高崎元尚・審査員)」『高知新聞』、1981年10月5日朝刊
「『文化消息』 立体の高崎元尚さん 大阪市で個展」『高知新聞』、1982年6月12日朝刊
「『野外彫刻の作品募集』」『高知新聞』、1982年7月5日夕刊
「『野外彫刻展高知』始まる 鏡川べりに美術空間」『高知新聞』、1982年8月8日夕刊
小林一平「高知文芸展望<上> 高崎元尚=痛快な一文「少数派」」『高知新聞』、1982年9月28日朝刊
「現代美術家協会が発足 県展立体部門の作家ら 高知市で「無名展」マンネリ化超え新しい造形運動(大西清澄高崎元尚)」『高知新聞』、1983年5月13日朝刊
「新鮮さと力強さと 「現代美術の実験」展」『高知新聞』、1985年3月26日朝刊
「現代美術の実験展 夜須町公民館 ずらり前衛作品」『高知新聞』、1985年7月16日朝刊
「『文化消息』 15日から「現代美術三人展」 高知大丸東館で」『高知新聞』、1985年8月15日朝刊
「『高知ギャラリー』 現代美術三人展(高知市) 時間と空間と遊びと…」『高知新聞』、1985年8月17日朝刊
「県展審査始まる 立体で入選、入賞14点」『高知新聞』、1985年10月7日夕刊
「県展 40回の節目に 座談会 出席者=井沢正三 伊野部敦子 堅田孝政 沢田明子 高崎元尚 筒井広道」『高知新聞』、1986年1月1日朝刊
「『日曜サロン』「日本美術史年表」に載った 高崎元尚さん(県展立体作品部招待 土佐高講師)「本当に照れ臭い」「前衛」を実践し続けて」『高知新聞』、1986年10月5日朝刊
「『高知ギャラリー』 現代美術の実験・インスタレーション 空間とのかかわり 高知市で開催」『高知新聞』、1987年6月6日朝刊
「『文化消息』 高松市で架橋記念「野外彫刻展」」『高知新聞』、1988年5月7日朝刊
「第40回高知市展から 「立方体の不能」(立体) 高崎元尚(郷土文化会館、丸の内緑地)」『高知新聞』、1988年6月11日朝刊
「紙が素材の作品33展 伊野・紙の博物館「紙のことば展」開く(高知市の高崎元尚さんら現代美術作家17人の立体作品など33点)」『高知新聞』、1988年11月9日朝刊
「『文化消息』 繰り返す同一単位 高崎元尚個展」『高知新聞』、1989年5月16日朝刊

「『ポリクロスアート展』 高知市・県立郷土文化会館 現代美術の多様性楽しむ(同会館と高知市文化振興事業団の共催。高崎元尚さんら県内外9人の立体作品を展示)」『高知新聞』、1989年5月20日朝刊
「『文化消息』 高崎さん(高知市)の作品など 北九州市立美術館常設展」『高知新聞』、1990年2月27日朝刊
「『文化消息』 きょうから高崎元尚展 ギャラリー風で」『高知新聞』、1991年3月1日朝刊
「白と黒を基調 独特の雰囲気 高知市で高崎元尚展」『高知新聞』、1991年3月1日夕刊
「ニューエリア 熱き芸術家展」 モダンアートの力作77点集め 11日まで高知市」『高知新聞』、1991年8月7日夕刊
「第45回県展 功労者表彰 立体 高崎元尚 68 高知市 幸町」『高知新聞』、1991年9月20日朝刊
「『第45回県展 功労者の横顔』 <5>高崎元尚さん(現代美術家) 第一線で意欲作を」『高知新聞』、1991年10月3日朝刊
「『文化消息』 2月 仙台市で具体美術展 高崎元尚さんの作品も」『高知新聞』、1992年1月25日朝刊
「『文化消息』 県展招待作家ら出品 30日からニューエリア展 須崎市」『高知新聞』、1992年10月24日朝刊
「『文化消息』「ニューエリア」高知会員小品展 11日から高知市」『高知新聞』、1993年2月6日朝刊
「第3回 佐川芸術賞展開幕 美術賞に中村さんら6人 9日まで町総合文化センター」『高知新聞』、1993年5月4日朝刊
「高崎元尚さん(高知市)の野外制作も 19日から芦屋で「具体展3」 抽象美術運動を回顧」『高知新聞』、1993年6月16日朝刊
「『文化消息』 熱き芸術家たち」愛媛展 高知から21人出品 24日から」『高知新聞』、1993年8月20日朝刊
「『文化消息』 ポリクロスアート展 出品者(祖父江建樹 高崎元尚 玉造義隆 辻野栄一 都築房子 名本秀樹 浜田憲司郎)」『高知新聞』、1993年9月13日朝刊
「佐川芸術賞展 美術 立体 特選 矢野園子(南国市)内川和子(高知市)(審査員=高崎元尚)」『高知新聞』、1994年5月3日朝刊
「高知文学(第20号の内容) 英文エッセー 高崎元尚「Homeless People」」『高知新聞』、1994年7月21日朝刊
「高知新聞創刊90周年記念特集 県展48年 美術・文化に大きな役割 高い水準の地方展 焦土の中 昭和22年スタート」『高知新聞』、1994年9月1日別刷
西一知「詩を生きる(45) 高知の前衛詩運動(5)」『高知新聞』、1994年12月11日朝刊
西一知「詩を生きる(47) 高知の前衛詩運動(7)」『高知新聞』、1994年12月13日朝刊
西一知「詩を生きる(48) 高知の前衛詩運動(8)」『高知新聞』、1994年12月14日朝刊
「県立美術館 常設展を見る(上) 6年度 第4期 4月9日まで ケージへの“賛歌”・パイク」『高知新聞』、1995年1月26日朝刊
「高知県立美術館・自主企画第1弾 「TOSA - TOSA'95 クールの時代 美術のノイズ・ミュージック」展」『高知新聞』、1995年2月15日朝刊
「新しい美術に挑戦 「クールの時代展」開幕 高知県立美術館」『高知新聞』、1995年2月16日夕刊

「アート最前線 「クールの時代」展から <6>
「COLLAPSE」高崎元尚（香北町生まれ。東京美術学校・彫刻科卒業。県展招待。高知市在住）」『高知新聞』、1995年3月1日朝刊
「不思議体験を体験 県立美術館 「クールの時代」展を鑑賞 触って、踏んで気楽に」『高知新聞』、1995年3月3日夕刊
「クールの時代」展を見る（下） 県立美術館 19日まで 松本教仁（高知県立美術館学芸員） 語らいを願う作品群 イメージ体現する映像」『高知新聞』、1995年3月10日朝刊
「第2回県美術家協会展 伸び伸び独自の世界追求 高知県立美術館で30日まで」『高知新聞』、1995年4月20日朝刊
「美を生きる アーティストの現場から (5) 高崎元尚・高知市 立体「見る人に新鮮な驚きを」 シンプルで精巧な装置」『高知新聞』、1995年9月20日朝刊
「高知県文化賞<平成7年度>現代美術の高崎元尚さん 現代舞踏の内山時江さん・高知市 中村交響楽団・中村市」『高知新聞』、1995年10月30日夕刊
「「文化消息」「ポリクロスアート'95展」高知市で23日から」『高知新聞』、1995年11月13日朝刊
「<第4部>県展50年に思う 高崎元尚・立体=玄関ロビーで第一声 福原云外・書道=常に厳しい脱皮を/県展の歩み（第50回展 50周年）」『高知新聞』、1996年1月1日朝刊
「県展50年に思う 県展の歩み（第31回—49回）」『高知新聞』、1996年1月1日朝刊
「ローカルジャーナル」 杜（第17号）」『高知新聞』、1996年2月21日朝刊
「ベルリン映画祭に参加して 未来を共にできる人たちとの出会い 大木裕之」『高知新聞』、1996年4月12日朝刊
「見ごたえある作品群 14日まで県立美術館 県美術家協会展」『高知新聞』、1996年5月10日朝刊
「県展50年（16） 第2部 作品たちの風景(6) 立体 不思議で新しいなぞ」『高知新聞』、1996年6月29日朝刊
「50—60年代の軌跡 高知市で高崎元尚展 25日まで」『高知新聞』、1996年7月17日朝刊
「「雑誌から」「具体美術」の評価問う 高知市の高崎元尚さん「あうろーら」に寄稿」『高知新聞』、1996年11月16日朝刊
「この人に聞く 高知県立美術館学芸員 松本教仁さんものをつくる欲求とは 60年代美術 特異な活動」『高知新聞』、1997年1月31日夕刊
「「TOSA-TOSA'97 こんなアヴァンギャルド芸術があった！」 1960年代の高知の美術状況 作品と資料150点」『高知新聞』、1997年2月3日朝刊
「「『高知の1960年代』展の作家たち」(5) 貞広英明 The Face 県立美術館 23日まで」『高知新聞』1997年3月9日朝刊
ヨシダ・ヨシエ「『月曜随想』'60年代の通過儀礼」『高知新聞』、1997年4月7日朝刊
「整然とした偶然性 来月2日まで高知市 高崎元尚展」『高知新聞』、1997年6月28日朝刊
「四銀事務センター 美術作品4点設置 南国市久礼田風で動く彫刻も 一般の方もどうぞ」『高知新聞』、1997年8月27日朝刊

「第51回県展前期 立体作品部門の入賞入選は21人 独自性が大切」『高知新聞』、1997年10月18日夕刊
「これまでの歩み凝縮 大阪で高崎元尚展 22日まで」『高知新聞』、1997年11月19日朝刊
「高崎元尚・小原義也展 土佐山田町立美術館 極限の現代アート28点」『高知新聞』、1997年12月11日夕刊
「『ぶつくす高知』 英文でエッセー集 関田、永野、高崎さん「CHIT—CHAT」」『高知新聞』、1998年1月23日朝刊
「ともに無限の広がり 高崎元尚・小原義也現代美術展22日まで 土佐山田町立美術館」『高知新聞』、1998年2月6日朝刊
「立体2作品 来て見て触って 県展前期復活戦 7日まで県立美術館 鑑賞者が自由にタッチ」『高知新聞』、1999年2月5日夕刊
「高知城から刺激受け 野外に現代美術35点展開 高知公園でポリクロスアート展」『高知新聞』、1999年3月18日朝刊
「自分見る鏡として鑑賞を 高崎元尚さんら2人展 高松市で来月24日まで」『高知新聞』、2000年6月25日朝刊
「高崎元尚さん（高知市）らの代表作 コレクション展2001 大阪市立近代美術館 25日まで」『高知新聞』、2001年3月9日朝刊
田島征彦「『ゆきちゃんせいちゃん 往復書簡』(25) レジェの休暇 田島征彦（京都）⇔田島征三（伊豆）」、2001年4月2日朝刊
田島征三「『ゆきちゃんせいちゃん 往復書簡』(29) 高崎先生+太郎さん 田島征彦（京都）⇔田島征三（伊豆）」、2001年4月9日朝刊
田島征三「『ゆきちゃんせいちゃん 往復書簡』(40) 木の実が創ったアート 田島征彦（淡路島）⇔田島征三（伊豆）」、2001年7月23日朝刊
「土佐和紙で持ち味発揮 バナナ展参加の24人 高知市で作品展」『高知新聞』、2001年7月29日朝刊
「クリスマスアートキューブコレクション 28人が箱に自分の世界 高知市で25日まで」『高知新聞』、2001年12月16日朝刊
「『招待券』 高知市で個展 現代美術作家 高崎元尚さん（高知市） 米テロ事件から作品」『高知新聞』、2002年3月24日朝刊
坂本稔「『月曜随想』 同人誌の旅（季刊文芸誌「南方手帖」編集者・吾川郡伊野町波）」『高知新聞』、2002年9月2日朝刊
「『装置』13のバリエーション 来月1日までの高崎元尚展 高知市」『高知新聞』、2002年11月29日朝刊
「作家の個性 「本」に凝縮 アーティスト・ブック展24日まで南国市」『高知新聞』、2003年5月14日朝刊
「コーヒー片手に芸術空間を堪能 高崎さん（高知市）の現代美術作品 香川の喫茶店で常設展示」『高知新聞』、2003年9月1日朝刊
「『美術の歩み 「高知の美術150年の100人展」から』(下) 県展を揺りかごに “前衛土佐派”ら育つ 28日まで県立美術館」『高知新聞』、2003年9月17日朝刊
「高崎元尚展 秩序と異なる個が同居 「具体」展出品物を展示 高知市ですすまで」『高知新聞』、2003年12月14日朝刊
「元気もらった！ ピカソ展 23日まで 現代美術家高崎さ

ん(高知市)ピカソを語る 新しい世界切り開いた 彼がいたから今、自由』『高知新聞』、2004年5月12日朝刊
「歌ごころ旅ごころ 『四国・中国文化ガイド』」『高知新聞』、2005年8月11日夕刊
「<県展60年> 『土佐の美 未来へ 無鑑査作家展より』(7) 高崎元尚「装置」立体作品・2000年 頑強に作り続ける」『高知新聞』、2006年9月1日夕刊
野田正彰「『野田正彰の高知が若かったころ』(7) ある美術教員 好きなように物に向かう」『高知新聞』、2006年12月28日夕刊
「個性際立つモノクロ世界 県内作家21人が企画展 高知市」『高知新聞』、2007年5月23日朝刊
「多彩なモノクロ世界 県内作家ら21人出品 30日まで高知市」『高知新聞』、2008年4月19日朝刊
「県展入賞作家の170点 県美術家協会展 6日まで かるぽーと 高知市」『高知新聞』、2008年7月2日朝刊
「「装置」シリーズ発展 高崎元尚が作品展 神戸市のギャラリー」『高知新聞』、2008年11月22日朝刊
「石に描かれた郷愁 24人競作 モノクローム展 19日まで高知市」『高知新聞』、2009年4月13日朝刊
「「具体」作品など37点 高崎の「装置」も展示 芦屋市」『高知新聞』、2009年9月4日朝刊
「装置シリーズ「決定打」 高崎元尚展 作風の変遷示す大阪9日まで」『高知新聞』、2010年5月3日朝刊
「県展無鑑査の高崎元尚 「装置の爆発」爆破ならず 高知市展 「またいつか」意欲満々」『高知新聞』、2010年6月16日朝刊
「一流作家の存在感「競演」 春の企画展 野外遊歩道完成を記念 南国市の白木谷美術館」『高知新聞』、2011年3月30日朝刊
「50年変わらず「生命」表現 高崎元尚と川崎康為の2人展 高知市で来月6日まで」『高知新聞』、2011年5月30日朝刊
「『文化消息』 高崎元尚さんに高知ペンクラブ賞」『高知新聞』、2011年11月14日朝刊
「前衛美術「具体」一堂に 東京・国立新美術館 高崎元尚(高知市)らの作品も」『高知新聞』、2012年7月10日朝刊
「前衛土佐派の熱い新風 県立美術館 37作品展示 1月6日まで」『高知新聞』、2012年11月10日朝刊
「90歳高崎さん(高知市)NY出展 前衛美術の代表作「装置」「信念 間違ってたかった」来月から グッゲンハイム美術館」『高知新聞』、2013年1月25日夕刊
乾良明「『具体的な具体の話』(1) 展示で伝わらない熱気」『高知新聞』、2013年2月11日朝刊
西森征司「『話題』 装置」『高知新聞』、2013年2月19日夕刊
国井綾「「グッゲンハイム『具体』展に寄せて」 50年前の遊びごころ再び」『高知新聞』、2013年4月24日朝刊
「現代美術作品がバッグに 高崎さん(高知市)の「装置」NYの美術館も購入」『高知新聞』、2013年7月9日夕刊
「映像作家・大木裕之 東京で展覧会 いまだにアバンギャルド 高崎元尚を撮り、作品に」『高知新聞』、2014年4月2日朝刊
「香美市立美術館開館20周年展(後期) 36作家の42点紹介 多様な表現で館の歩みを」『高知新聞』、2014年11

月13日朝刊
「県立美術館 かたちのリズム 抽象表現並ぶ所蔵品展 来月27日まで 形と色が醸す面白さ 本県から高崎元尚、浜田浄」『高知新聞』、2016年1月21日朝刊
「高崎さん よんでん文化賞 現代美術家 県関係7人目」『高知新聞』、2016年4月8日朝刊
「現代美術家・高崎元尚 故郷香美市で個展 誰もやらないことをやる 93歳 創作70年の軌跡たどる」『高知新聞』、2016年4月15日朝刊
西森征司「『話題』 見つける」『高知新聞』、2016年5月11日夕刊
「よんでん文化賞 高崎元尚さん表彰 高松市」『高知新聞』、2016年6月18日朝刊
『県展の思い出』(11) 高崎元尚さん(高知市) = 先端美術」『高知新聞』、2016年9月13日夕刊
「戦後高知の美術表現一望 県立美術館で館蔵品展 前衛作品など44点紹介」『高知新聞』、2017年1月19日朝刊
「高崎元尚さん「破壊」新作 94歳高知市の現代美術家 県立美術館で個展開催」『高知新聞』、2017年6月18日朝刊
「自分だけの表現貫く 高崎元尚さん 創作最期まで」『高知新聞』、2017年6月22日夕刊
「高崎元尚さん死去 本県現代美術をけん引 94歳」『高知新聞』、2017年6月22日夕刊
野田正彰「高崎元尚さんを悼む 自他に自由求めた人 凄まじい創造力」『高知新聞』、2017年6月23日朝刊
「話題 創作の原点」『高知新聞』、2017年6月26日夕刊
都築房子「高崎元尚先生を悼んで いつも背中を追いかけた」『高知新聞』、2017年6月27日朝刊
「広がりを持つ「破壊」 高崎元尚新作展23日まで 県立美術館」『高知新聞』、2017年7月1日朝刊
池添正「“想像する”に共感」『高知新聞』、2017年7月2日朝刊
松本教仁「高崎元尚「破壊の10年」展」2017年7月10日朝刊
福田仁「話題 高崎先生」『高知新聞』2017年7月31日朝刊

(2)朝日新聞

「美術 現代の知性あふれる作品群 アート・ナウ'78」『朝日新聞』1978年2月15日夕刊
「美術 日常超えた異様な空間 高崎元尚展 E・ネグレ」『朝日新聞』1982年12月11日夕刊
「美術 京都の三人展 コラージュ持ち寄り」『朝日新聞』1989年7月15日
「展覧会／高知」『朝日新聞』1997年12月6日朝刊
「高崎元尚さん 先端走る若々しい精神(定年からの生きがい)／高知」『朝日新聞』1998年4月1日朝刊
「ホームページ／香川」『朝日新聞』2000年6月23日朝刊
「立ち上がれツインタワー 悲劇のビル題材に搜索続く高崎さん／高知」『朝日新聞』2002年10月13日朝刊
「ギャラリー／兵庫県」『朝日新聞』2008年11月13日朝刊
「(美術評)「戦後高知の美術シーン」展 多士済々、おおらかな「前衛」【大阪】」『朝日新聞』2009年3月14日夕刊
「生き様刻む最後の個展 高知で開催中 現代美術家の故高崎さん 代表作「破壊」シリーズ5点」『朝日新聞』

2017年7月11日夕刊

「(インタビューズ) あの日 画家・絵本作家の田島征彦さん／兵庫県」『朝日新聞』2012年9月19日朝刊

「前衛美術「荒々しく」「高知の戦後美術」展、県内作家の45点／高知県」『朝日新聞』2017年1月29日朝刊

清水有香「先日他界“無意味な破壊”の問い 地元高知で高崎元尚展」『高知新聞』2017年7月31日

(3)読売新聞

村田慶之「美術 アート・ナウ 78 展 臨場感を演出 “もの” とのかかわり追う」『読売新聞』1978年2月21日夕刊

中村敬治「高崎元尚展 知力と暴力の緊張した共存」『読売新聞』1978年12月9日

中島徳博「根付くアンデパンタンの精神 高知市展に招かれて」『読売新聞』1981年6月27日

「「野外彫刻展 1983」高知市の「緑の広場」」『読売新聞』1983年、8月23日

「都築房子展 素朴な外観の内側に重い自己表現秘める」『読売新聞』1983年12月25日

「キャンパス遊び心無限 香美で高崎元尚さん企画展「装置」シリーズ、鏡利用「体験型」パネルも展示」『読売新聞』2016年6月3日

(4)毎日新聞

「プロセスの芸術－高崎元尚展 虚と実を追って－長宗我部友子展」『毎日新聞』1977年12月9日夕刊

「異色作で入選 破壊し できた造形を写真に 土佐高の高崎先生 日本国際美術展」『毎日新聞』1980年4月23日

「ギャラリー 高崎元尚展」『毎日新聞』1982年6月4日夕刊

「「ワイド・ナウ」展」『毎日新聞』1997年11月13日大阪夕刊

「コレクション展：「具体」三部作、締めくくり－兵庫・芦屋市立美術館」『毎日新聞』2014年2月5日大阪夕刊

(5)日本経済新聞

「プロムナード 過激な美術教師－森岡正博」『日本経済新聞』2010年8月31日

(6)西日本新聞

「“白紙の芸術”に落書き お年寄り男性 作者は「理解」」『西日本新聞』1994年6月19日

(7)京都新聞

「展評 切断された青桐」『京都新聞』、1976年12月11日

8. その他

大木裕之監督「HEAVEN-6-BOX 天国の六つの箱」高知県・高知県立美術館、1994-5年〈映画。高崎と夫人の佳恵が出演〉
大木裕之監督「優勝—Renaissance」(1995)〈映画。高崎が出演〉

インタビュー：中嶋泉、池上裕子「高崎元尚オーラルヒストリー 2012年12月28日」、http://www.oralarthistory.org/archives/takasaki_motonoao/interview_01.php、日本美